

川内 C 遺跡ほか

発掘調査報告書

川内 C 遺跡第1次、仙台城跡扇坂地区、沖野城跡第15・16次
南小泉遺跡第72次、荒井広瀬遺跡第1次、荒井南遺跡第2次
中田南遺跡第5次、西台畠遺跡第10次、裏町古墳第3次

2014年3月

仙台市教育委員会

序 文

仙台市の文化財保護行政に対しまして、日頃からご理解、ご協力を賜り、感謝申し上げます。

仙台市内には現在約 760 篇所の遺跡が確認されております。このような埋蔵文化財は地域の歴史を伝える将来へ守るべき大切な財産です。

平成 23 年 3 月 11 日の東日本大震災により、市内の各所はもとより、東北地方の太平洋沿岸部で多くの被害が発生しました。震災後、3 年を経て、早期の復旧・復興が望まれるなか、公共事業や各種事業が本格化したことを反映して、平成 25 年度の発掘調査の件数は、震災以前と比べ、増加する傾向が続いています。埋蔵文化財の保存もさることながら、復旧・復興事業への対応としての発掘調査、文化財の保存と継承に日々努めているところです。

本報告書には、公共事業や各種開発に先立ち、平成 25 年度に発掘調査を実施した、川内 C 遺跡、仙台城跡、沖野城跡、南小泉遺跡、荒井広瀬遺跡、荒井南遺跡、中田南遺跡、西台畠遺跡、裏町古墳の調査結果を収録しています。

つきましては、本報告書が、学術研究のみならず学校教育や生涯学習などの文化活動に寄与し、皆様の埋蔵文化財へのより深い関心とご理解の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、今回の調査や報告書の作成に際して、ご協力いただきました多くの方々に心より深く感謝申し上げます。

平成 26 年 3 月

仙台市教育委員会

教育長 上田昌孝

例 言

1. 本書は、平成 25 年度に仙台市が実施した各種の整備事業および民間の開発事業に伴う発掘調査報告書であり、川内 C 遺跡第 1 次、仙台城跡扇坂地区、沖野城跡第 15・16 次、南小泉遺跡第 72 次、荒井広瀬遺跡第 1 次、荒井南遺跡第 2 次、中田南遺跡第 5 次、西台畠遺跡第 10 次、裏町古墳第 3 次の各発掘調査報告を合本したものである。

本書の内容は、すでに公開されている遺跡見学会資料や、各種の発表会資料に優先する。

2. 本書の本文執筆・挿図・表・写真図版の作成等については以下のように分担し、編集は平間亮輔が行った。

第 1 章 — 平間亮輔 第 2 章第 1 節 — 千葉靖彦

第 2 章第 2 節、第 3 章第 1 節、第 4 章第 3 節、総括 — 小泉博明

第 3 章第 2 節、第 4 節 — 千葉悟 第 3 章第 3 節 — 黒田智章

第 4 章第 1 節 — 佐藤高陽 第 4 章第 2 節 — 早坂純一

遺物の基礎整理～実測図作成 — 佐藤洋

遺物図・遺構図デジタルトレース — 黒田智章 陶器・磁器の鑑定 — 佐藤洋

調査区位置図・設定図デジタルトレース — 千葉靖彦 遺物観察表・遺構記録表作成 — 小泉博明

遺物写真撮影・図版作成 — 佐藤高陽・千葉悟 遺構写真図版作成 — 早坂純一

3. 本書に係る出土遺物、実測図、写真などの資料は仙台市教育委員会が保管している。

凡 例

1. 文中および図中の方位は概ね北を示している。

2. 図中の標高を測定した基準点のデータは平成 23 年 3 月 11 日の東日本大震災以前に測定したものそのまま使用している。

3. 遺構の略称は以下の通りで、遺構番号は各調査別の通し番号である。

SB：掘立柱建物跡 SD：溝跡 SE：井戸跡 SI：竪穴住居跡 SK：土坑 SX：性格不明遺構

P：ピット

4. 遺物の略称は以下のとおりである。

A：縄文土器 B：弥生土器 C：土師器（非クロロ調整） D：土師器（クロロ調整）・赤焼土器

E：須恵器 F：丸瓦 G：平瓦 H：その他の瓦 I：陶器 J：磁器 K：石器・石製品

L：木製品 N：金属製品 P：土製品

5. 土色については、「新版標準土色帳」（小山・竹原 1999）を使用した。

6. 遺物実測図中の網点は黒色処理を示している。

7. 遺物観察表の（ ）がついた数値は図上復元した推定値である。

8. 本文中の「灰白色火山灰」（庄子・山田 1980）はこれまでの仙台市域の調査報告や東北地方中北部の研究から、「十和田 a 火山灰（To-a）」と考えられている。降下年代は西暦 915 年と推定されている。

庄子貞夫・山田一郎 1980 「宮城県北部に分布する灰白色火山灰について」『多賀城跡・昭和 54 年度発掘調査概報』
宮城県多賀城跡調査研究所

仙台市教育委員会 2000 「沼向遺跡 第 1～3 次発掘調査」仙台市文化財調査報告書第 241 集

小口雅史 2003 「古代北東北の広域テフラをめぐる諸問題—十和田 a と白頭山（長白山）を中心に」『日本律令制の展開』吉川弘文館

目 次

第1章 調査計画と実績	1		
I 調査体制	II 調査計画	III 調査実績	
第2章 青葉区内の調査	3		
第1節 川内C遺跡	3		
I 遺跡の概要	3		
II 第2次調査	3		
1. 調査要項	2. 調査に至る経緯と調査方法	3. 基本層序	4. 発見遺構と出土遺物
5. まとめ			
第2節 仙台城跡扇坂地区	13		
I 遺跡の概要	13		
II 扇坂地区的調査	13		
1. 調査要項	2. 調査に至る経緯と調査方法	3. 基本層序	4. 1トレンチの調査
5. 2トレンチの調査	6. 3トレンチの調査	7. 4トレンチの調査	
8. 5トレンチの調査	9. 6・7トレンチの調査	10. まとめ	
第3章 若林区内の調査	20		
第1節 沖野城跡	20		
I 遺跡の概要	20		
II 第15次調査	20		
1. 調査要項	2. 調査に至る経緯と調査方法	3. 基本層序	4. 発見遺構と出土遺物
III 第16次調査	28		
1. 調査要項	2. 調査に至る経緯と調査方法	3. 基本層序	4. 発見遺構と出土遺物
5. まとめ			
第2節 南小泉遺跡	34		
I 遺跡の概要	34		
II 第72次調査	34		
1. 調査要項	2. 調査に至る経緯と調査方法	3. 基本層序	4. 発見遺構と出土遺物
5. まとめ			
第3節 荒井広瀬遺跡	41		
I 遺跡の概要	41		
II 第1次調査	41		
1. 調査要項	2. 調査に至る経緯と調査方法	3. 基本層序	4. 発見遺構と出土遺物
5. まとめ			
第4節 荒井南遺跡	58		
I 遺跡の概要	58		
II 第2次調査	58		
1. 調査要項	2. 調査に至る経緯と調査方法	3. 基本層序	4. 発見遺構と出土遺物

5. まとめ				
第4章 太白区内の調査	66		
第1節 中田南遺跡	66		
I 遺跡の概要	66		
II 第5次調査	66		
1. 調査要項	2. 調査に至る経緯と調査方法	3. 基本層序	4. 発見遺構と出土遺物	
5. まとめ				
第2節 西台畠遺跡	70		
I 遺跡の概要	70		
II 第10次調査	70		
1. 調査要項	2. 調査に至る経緯と調査方法	3. 基本層序	4. 発見遺構と出土遺物	
5. まとめ				
第3節 裏町古墳	74		
I 遺跡の概要	74		
II 第3次調査	74		
1. 調査要項	2. 調査に至る経緯と調査方法	3. 基本層序	4. 発見遺構と出土遺物	
5. まとめ				
総括	79		

挿図目次

第1図 川内C遺跡と周辺の遺跡	3	第23図 1トレンチ平面・断面図	43・44
第2図 調査区設定図	4	第24図 2トレンチ平面・断面図	46
第3図 川内C遺跡全体図、断面図	5	第25図 地震痕跡平面・断面図	47
第4図 第1次調査出土遺物（1）	6	第26図 第1次調査出土遺物（1）	48
第5図 第1次調査出土遺物（2）	7	第27図 第1次調査出土遺物（2）	50
第6図 第1次調査出土遺物（3）	8	第28図 第1次調査出土遺物（3）	51
第7図 第1次調査出土遺物（4）	9	第29図 第2次調査区設定図	59
第8図 仙台城扇坂地区と周辺の遺跡	13	第30図 1・2トレンチ平面・断面図	60
第9図 1～7トレンチ配置図	14	第31図 3～5トレンチ平面・断面図	61・62
第10図 1～5トレンチ断面図	15	第32図 中田南遺跡と周辺の遺跡		
第11図 沖野城跡と周辺の遺跡	20	調査区位置図	66
第12図 第15・16次調査区位置図、設定図	21	第33図 第5次調査区設定図		
第13図 第15次調査平面・断面図	23・24	調査区平面・断面図	67
第14図 第15次調査出土遺物（1）	25	第34図 第5次調査出土遺物	68
第15図 第15次調査出土遺物（2）	26	第35図 西台畠遺跡と周辺の遺跡	70
第16図 第16次調査1～3トレンチ平面・断面図	30	第36図 第10次調査区位置図、設定図	71
第17図 第16次調査出土遺物	31	第37図 第10次調査区平面・断面図	72

第18図 第72次調査区設定図	35	第38図 第10次調査出土遺物	73
第19図 9トレンチ平面・断面図	36	第39図 裏町古墳と周辺の遺跡	74
第20図 第72次調査出土遺物	37	第40図 第3次調査区設定図	75
第21図 荒井広瀬遺跡と周辺の遺跡	41	第41図 A区平面・断面図	76
第22図 第1次調査区設定図	42	第42図 B区平面・断面図	77

挿表目次

表1 市関連事業に伴う発掘調査一覧	1	表2 民間事業に伴う発掘調査一覧	2
-------------------	---	------------------	---

写真図版目次

写真図版1 川内C遺跡2トレンチ、出土遺物(1)	10	写真図版13 第1次調査(2)	54
写真図版2 第1次調査出土遺物(2)	11	写真図版14 第1次調査(3)	55
写真図版3 第1次調査出土遺物(3)	12	写真図版15 第1次調査出土遺物(1)	56
写真図版4 仙台城扇坂地区	19	写真図版16 第1次調査出土遺物(2)	57
写真図版5 第15次調査出土遺物	27	写真図版17 第2次調査(1)	63
写真図版6 第15次調査	28	写真図版18 第2次調査(2)	64
写真図版7 第16次調査出土遺物	32	写真図版19 第2次調査(3)	65
写真図版8 第16次調査	33	写真図版20 第2次調査出土遺物	65
写真図版9 第72次調査(1)	38	写真図版21 第5次調査	69
写真図版10 第72次調査(2)	39	写真図版22 第5次調査出土遺物	69
写真図版11 第72次調査出土遺物	40	写真図版23 第10次調査、出土遺物	73
写真図版12 第1次調査(1)	53	写真図版24 第3次調査	78

第1章 調査計画と実績

I. 調査体制

調査主体 仙台市教育委員会

調査担当 仙台市教育局生涯学習部文化財課

【文化財課】課長 吉岡恭平

【調査調整係】係長 斎野裕彦 主査 平間亮輔 主任 村上とよ子

主事 小泉博明 鈴木隆 黒田智章

文化財教諭 佐藤高陽 早坂純一 千葉悟 千葉靖彦

専門員 篠原信彦 佐藤洋

【整備活用係】係長 長島栄一 主任 斎藤克己 主事 及川謙作

文化財教諭 石山智之 伊藤翔太 橋本勇人

専門員 木村浩二

II. 調査計画

仙台市が実施する各種の整備事業に伴う発掘調査および、民間の開発に伴う発掘調査を想定し、計画した。

III. 調査実績

平成25年度（平成25年4月1日～平成26年1月31まで）実施された調査は表1のとおりで、仙台市関連が13件、民間開発が24件の計37件である。このうち本書に収録したのは平成25年12月6日までに終了したもので、10件である。

平成25年度 市関連事業に伴う発掘調査一覧（平成25年4月1日～平成26年1月31日） 調査面積 1175.6m²

調査No	道路名	所在地	対象面積	調査面積	調査期間	遺構・遺物	届出等No	報告書	調査原因
H25-19	荒井南道路	若林区荒井	7750.0	138.0	6月12日～7月16日	弥生水田	H25 253-6	2次	東部市街地排水路
H25-25	黄種園	若林区南小泉	50.5	16.0	7月29日	遺構無	H24 E27-62	—	消防センター
H25-33	茂ヶ崎城跡	太白区茂ヶ崎	29.4	19.0	8月22日	遺構・遺物無	H24 E27-2	—	消防無線事業
H25-35	山田桑里道路	太白区山田	16.9	8.0	8月26日	遺構・遺物無	H25 165-3	—	防火水槽
H25-34	香形道路	若林区荒井東	12.0	6.0	8月28日	遺構・遺物無	H24 E27-60	—	汚水管
H25-42	川内 C 道路	青葉区青葉山	155.2	132.0	9月17日～10月8日	繩文包含層	H25 253-8	2次	コンベンション施設
H25-49	若林城跡隣接地	若林区古城	23.4	12.0	10月17日	遺構・遺物無	H25 165-4	—	防火水槽
H25-51	仙台城跡	青葉区川内	161.2	39.3	10月21日～11月6日	遺構なし	H25 253-20	扇版地区歩行者道路	
H25-50	大野田官衙道路	太白区大野田	15.0	2.5	10月21日	小溝	H25 165-16	—	ガス整備
H25-53	南小泉道路	若林区遠見塚	153.6	103.0	10月23日～12月6日	土坑、ピット	H25 253-11	72次	校庭整備
H25-56	牛小倉道路・和田堀道路	宮城野区蒲生	11567.0	545.8	11月11日～12月9日	車跡、溝跡	H25 253-18	26年度	区画整理
H25-55	茂庭けんとう城	太白区茂庭	153.6	36.0	11月7日	遺構・遺物無	H25 107-21	—	法面整形
H25-64	川内 C 道路	青葉区川内	118.7	118.0	12月9日～12日	遺構・遺物無	H25 253-20	—	公園整備

表1 市関連事業に伴う発掘調査一覧

平成 25 年度 民間事業に伴う発掘調査一覧（平成 25 年 4 月 1 日～平成 26 年 1 月 31 日） 調査面積 1230.7m²

調査No	道路名	所在地	対象面積 調査面積	調査期間	遺構・遺物	届出等No	報告書	調査原因
H25-2	境B道路	泉区八乙女	153.8	15.4 4月 8日	遺構・遺物無	H24 122-402	—	共同住宅
H25-8	中田南道路	太白区中田	478	20.2 4月 23日～24日	完形須恵器 1	H25 123-21	5次	宅地造成
H25-11	沖野城跡	若林区沖野	1304	194.0 5月 9日～16日	輪廻、陶磁器・木製品	H25 124-16	15次	宅地造成
H25-13	郡山道路 240 次	太白区郡山	186.4	37.8 5月 13日～16日	ピット 2	H25 124-5	—	共同住宅
H25-14	荒井広瀬道路	若林区荒井	270	271.0 5月 13日～7月 5日	木製品、地蔵痕跡	H25 124-23	1次	区画整理
H25-24	南小泉道路	若林区南小泉	89.1	12.8 7月 16日	SX1 基	H25 124-19	—	建完住宅
H25-30	上屋敷道路	若林区上飯田	2914.4	24.0 7月 25日～8月 5日	土坑、SX	H25 124-45	—	宅地造成
H25-31	南小泉道路	若林区古城	69.5	20.0 8月 5日	遺構なし	H25 124-42	—	共同住宅
H25-29	沖野城跡	若林区沖野	673	76.2 8月 21日～9月 6日	輪廻、陶磁器	H25 124-24	16次	建完住宅
H25-38	小鶴城跡	宮城野区新田	150.3	39.0 9月 9日	遺構・遺物無	H25 124-27	—	共同住宅
H25-37	西台畠道跡	太白区郡山	1494.7	114.5 9月 9日～17日	堅穴住居跡	H25 124-34	10次	共同住宅
H25-41	三神峯道路	太白区西多賀	3453.1	38.0 9月 11日	遺構・遺物無	H25 124-44	—	宅地造成
H25-16	裏町古墳	太白区西多賀	116.5	33.2 9月 19日～24日	古墳積土	H25 124-7	3次	共同住宅
H25-17			128.9	22.5 9月 19日～24日	古墳積土	H25 124-9		
H25-44	養種園道路	若林区南小泉	153.6	40.6 9月 30日～10月 4日	溝跡・土坑	H25 124-63	—	共同住宅
H25-45	神明道路	太白区西郎丸	163.8	32.0 10月 3日	ピット	H25 124-37	—	共同住宅
H25-48	福荷船跡	宮城野区岩切	466.3	43.7 10月 15日	遺構造物なし	H25 124-85	—	共同住宅
H25-52	富沢道路	太白区泉崎	338.9	34.0 10月 22日	遺構造物なし	H25 124-47	—	共同住宅
H25-60	南小泉道路	若林区遠見塚	45.5	6.0 11月 27日	遺構無、遺物少	H25 124-92	—	建完住宅
H25-67	南ノ東道路	太白区富田	1870	20.7 12月 24日、2月 20日	遺構・遺物無	H25 125-334	—	築路、地中送電線
H25-65	羽黒堂道路	太白区山田本町	4853.5	50.0 12月 17日	遺構・遺物無	H25 124-105	—	宅地造成
H25-69	天神沢道路	泉区天神沢	193.6	24.0 1月 9日	土坑	H25 124-72	—	共同住宅
H25-78	郡山道路	太白区郡山	58	14.9 1月 27日	ピット	H25 124-113	—	建完住宅
H25-72	六反田道路	太白区大野田	147.6	46.2 1月 20日～23日	堅穴住居跡	H25 124-121	次年度	店舗

表 2 民間事業に伴う発掘調査一覧

第2章 青葉区内の調査

第1節 川内C遺跡

I 遺跡の概要

川内C遺跡は仙台市の中心部から近く、仙台城跡のある青葉山の東側に位置する。遺跡の東側には広瀬川が流れ、その河岸段丘上に立地している。今回、市の施設建設に伴う試掘調査によって発見され新たに登録した遺跡である。

本遺跡の場所は江戸時代に描かれた絵図には武家屋敷または御炭蔵と記載されており、その後は陸軍第二師団や米軍駐留地として使用されていた。当遺跡の時期は縄文時代と近世である。

II 第1次調査

1. 調査要項

遺 跡 名 川内 C 遺跡（宮城県登録遺跡番号 01572）

調 査 地 点 仙台市青葉区青葉山 8-1（宮城県スポーツセンター跡地）

調 査 期 間 平成 25 年 9 月 17 日～平成 25 年 10 月 8 日

調査対象面積 155.2m²

調査面積 132m² (1トレンチ 10m² 2トレンチ 122m²)

調査原因 コンベンション施設建設

調査主体 仙台市教育委員会

調査担当 仙台市教育委員会生涯学習部文化財課調査調整係

担当職員 主査 平間 亮輔 文化財教諭 千葉 悟 千葉 靖彦 専門員 佐藤 洋

2. 調査に至る経緯と調査経過

今回の調査は、平成 25 年 6 月 21 日付で申請者より提出された「(仮称) 国際センター駅周辺地区コンベンション施設設備計画と埋蔵文化財のかかわりについて(協議)」(平成 25 年 7 月 12 日付 H25 教生文第 253-8 号で伝達)に基づき実施した。この調査は、当初川内 A 遺跡隣接地試掘調査として、平成 25 年 9 月 17 日(木)に着手した。トレンチを 2 本設定し、1 トレンチの盛土を除去したところ、直下で段丘疊層を確認した。2 トレンチは盛土を除去したところ、縄文土器を含む遺物包含層を検出し、遺構検出作業を行った。各トレンチの平面図(1/50)および 2 トレンチ調査区北壁断面図(1/20)を作成し、デジタルカメラで記録写真を撮影した。平成



番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	川内 C 遺跡	散布地	段丘	縄文・近世
2	川内 A 遺跡	散布地・層敷跡	段丘	縄文・近世
3	川内 B 遺跡	散布地・層敷跡	段丘	縄文・近世
4	仙台城跡	城館跡	丘陵・段丘	中世・近世

第1図 川内 C 遺跡と周辺の遺跡



25年10月8日(火)に調査の一切を終了した。

3. 基本層序

確認した盛土は約1mで、その下部で基本層を大別3層確認した。

I層：黒色シルト（10YR2/1）。径約1～15cmの礫を多量、炭化物を少量含む。縄文時代の遺物包含層である。

II層：黄褐色砂層（10YR3/4）である。

III層：暗褐色砂層（10YR5/6）。径約5～20cmの礫を多量に含む砂礫層である。

4. 発見遺構と出土遺物

2トレンチにおいて縄文土器を含む遺物包含層、近世の井戸跡1基を検出した。

1 トレンチ

現代の盛土の直下で礫層に到達し、遺物・遺構は確認できなかった。

2 トレンチ

1層である遺物包含層は調査区中央部を中心に南北約7m、東西約5mの楕円形の範囲に認められ、下面が凹地状をなしていたことから、当初は竪穴住居跡の可能性も考えられた。しかし、底面は凹凸があり、炉跡や柱穴もなく、自然の地形に形成された遺物包含層と理解された。遺物は、縄文土器片が約2400点出土している。このうち注口土器2点と深鉢形・鉢形の上器37点（第4・5図、第6図1～9）を図示した。他に、土製品が5点出土している（第6図10～14）。縄文土器は主なものを分類すると、大きく3つに分けることができる。

I群：方形区画文が隆線で施されている土器3点（第4図2～4）、刺突文が施されている土器3点（第4図5・6・8）。これらは縄文時代後期初頭の土器と考えられる。

II群：曲線で沈線文が施されている土器4点（第4図7～10）、注口土器1点（第4図11）。これらは縄文時代後期前葉の古段階の土器と考えられる。第4図10は胴部の形状から小型の鉢形を呈する。

III群：注口土器1点（第4図12）、平行沈線文が幾何学的な文様で施されている土器13点（第4図13～19、第5図1～5・7）。これらは縄文時代後期前葉の新段階の土器と考えられる。第4図12は、注ぎ口が長い典型的な注口土器である。

その他の土器は深鉢形の土器である（第5図8～11、第6図1～6）。底部の木葉痕のあるものが3点（第6図7～9）、土製品は土製円盤（第6図10～14）である。石器は約70点出土しており、このうち珪質頁岩製のスクレイパー（第7図2）を図示した。

SE1 井戸跡

河原石を積み上げた石組井戸で、堀り方の大きさが東西約1.8m、南北約1.9mの円形である。遺構面の上部より近世の陶磁器片1点と円礫の隙間から瓦数点が出土しているが、小破片のため図示することができない。約1m掘り下げたが、裏込めと考えられる径約10cm程度の礫が崩落の恐れがあること、径約50cm程度の礫が井戸跡内に多量に入っていたことから、そこまでで、調査を終了した。

遺構外出土遺物

2トレンチで土偶の胴部1点（第7図3）が出土した。立像で頭部と体部下半、右腕と左腕の先端部を欠く。乳房は隆起しているが、左右ともに先端を欠く。文様は、複数の平行する沈線文とそれに沿う刺突列、渦巻沈線文によって構成されている。乳房の上部には二つ右回りの渦巻文が施されている。上方から見て両肩にもS字状に連なるようく2~3個の右回りの渦巻文が施されており、背面中央部にもS字状に近い右回りの渦巻文が1個施されている。乳房の間から下には正中線が沈線文で施されている。破損面を観察すると首部に1か所、胴部2か所に盲孔があり、貫通はしていない。これらの孔は土偶作成時の芯材の痕跡の可能性がある。胴部の形態や文様は仙台市域では太白区大野田遺跡に類例が認められ、近隣県では福島県郡山市の割田A遺跡出土のハート形土偶と類似する。

このほか、石礫が1点（第7図1）、近世の瓦4点・陶磁器片3点が出土している。

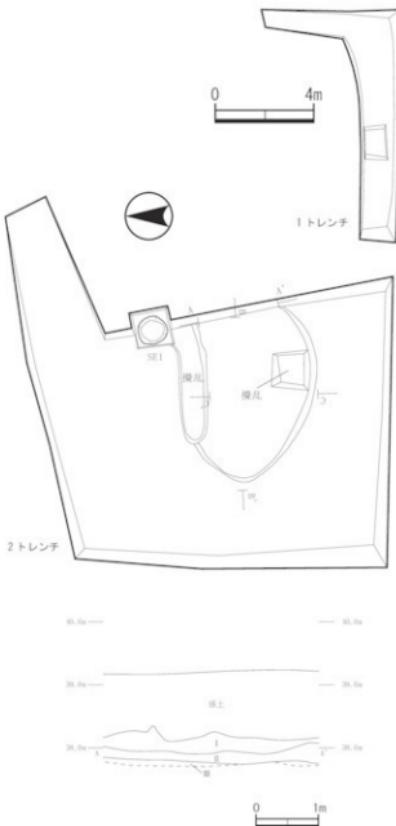
5.まとめ

今回の調査において、大部分は過去の建築物の基礎等によって破壊されており、1トレンチからは遺構や遺物は検出されなかった。2トレンチでは縄文時代後期初頭から後期前葉の遺物包含層を検出した。

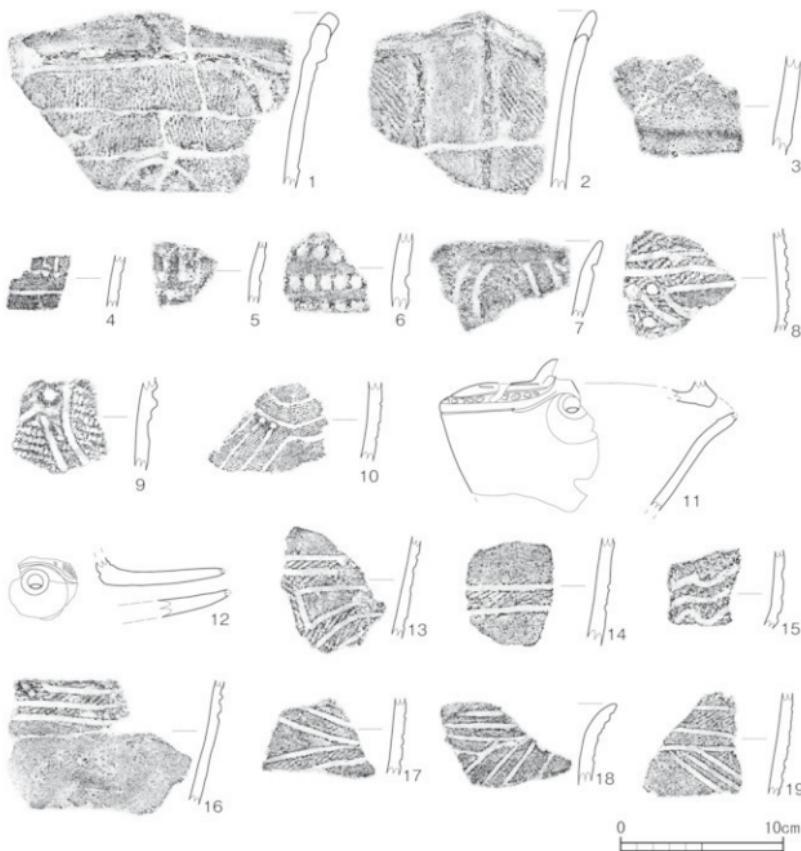
遺構外出土の土偶は、形態・文様の特徴から、この包含層に帰属すると考えられる。SE1については、近世の陶磁器片が出土してはいるが、詳しい年代は不明である。

参考文献

- 仙台市教育委員会 2007『川内A遺跡－仙台市高速鉄道東西線関係遺跡発掘調査報告書I－』
仙台市文化財調査報告書第312集
大宮市立博物館 2007年『縄文人の顔』

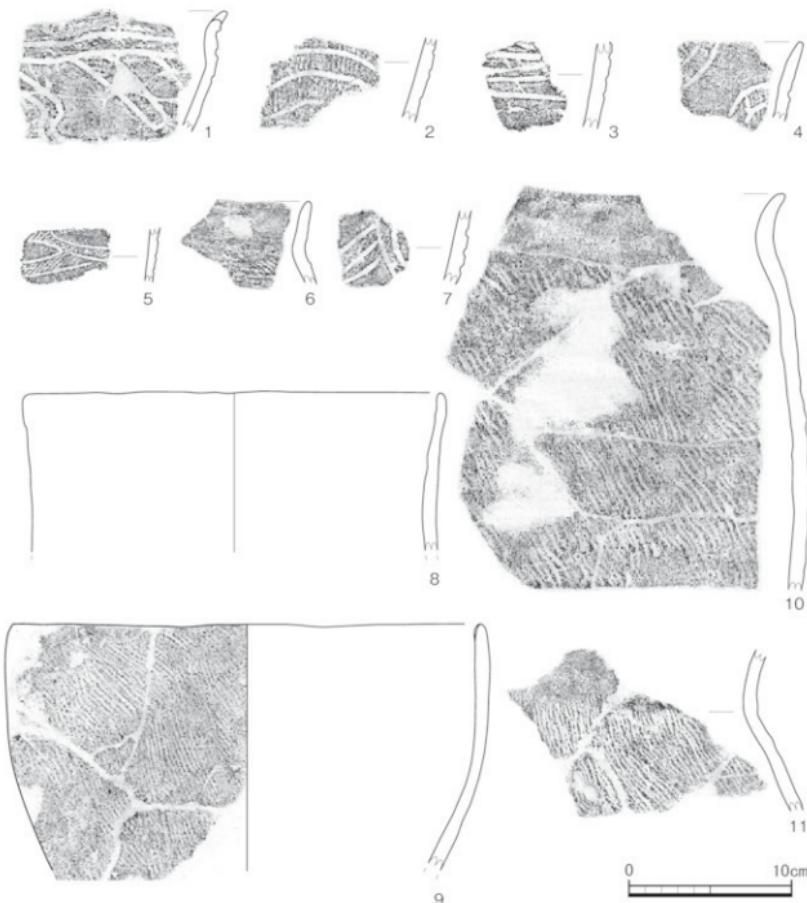


第3図 川内C遺跡、全体図、断面図



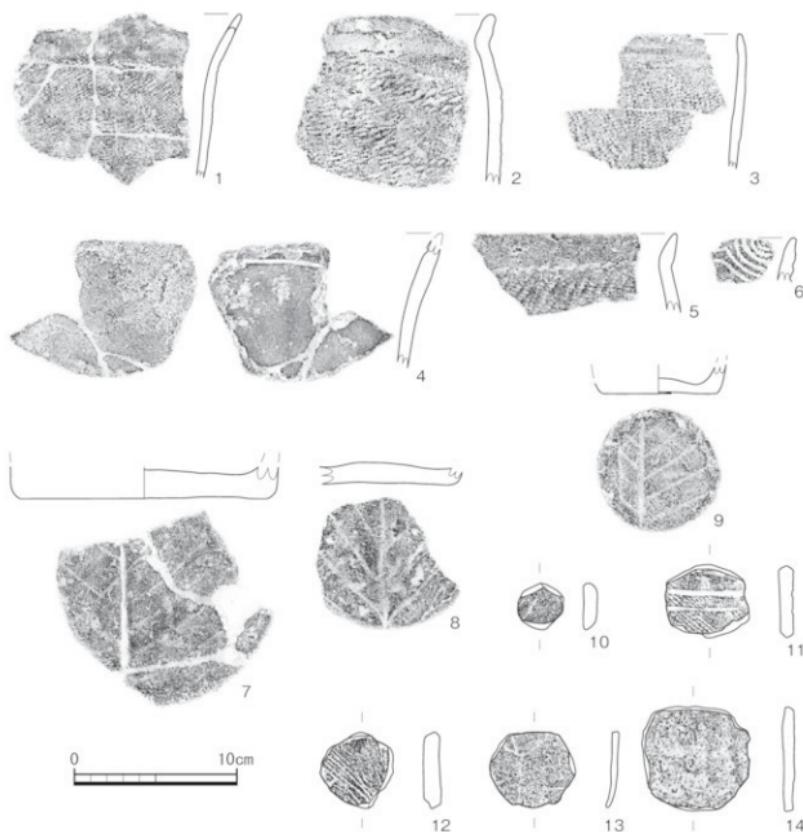
掲載番号	写真 図版 番号	登録 番号	出土 場所	出土地 種類	器種	残存 部	法量 (cm)	備考	
							口径 横径	底径 縦径	器高
1	I-2	A-12	包含層	縄文土器	深鉢	一部	-	-	109 +
2	I-3	A-13	包含層	縄文土器	深鉢	一部	-	-	111 +
3	I-4	A-32	包含層	縄文土器	深鉢	一部	-	-	方形区画文
4	I-5	A-30	包含層	縄文土器	深鉢	一部	-	-	方形区画文
5	I-6	A-37	包含層	縄文土器	深鉢	一部	-	-	平行沈織文
6	I-7	A-31	包含層	縄文土器	深鉢	一部	-	-	平行沈織文
7	I-8	A-14	包含層	縄文土器	深鉢	一部	-	-	平行沈織文
8	I-9	A-20	包含層	縄文土器	深鉢	一部	-	-	平行沈織文
9	2-1	A-39	標品	縄文土器	深鉢	一部	-	-	平行沈織文
10	2-2	A-38	標品	縄文土器	鉢	一部	-	-	平行沈織文
11	2-3	A-1	包含層	縄文土器	口付土器	一部	-	-	94 +
12	2-4	A-2	包含層	縄文土器	口付土器	一部	-	-	74 +
13	2-5	A-21	包含層	縄文土器	深鉢	一部	-	-	沈織文 LR 織文
14	2-6	A-22	包含層	縄文土器	深鉢	一部	-	-	横位平行沈織文
15	2-7	A-28	包含層	縄文土器	深鉢	一部	-	-	平行する曲面文
16	2-8	A-15	包含層	縄文土器	深鉢	一部	-	-	横位平行沈織文
17	2-9	A-24	包含層	縄文土器	深鉢	一部	-	-	平行沈織文
18	2-10	A-26	包含層	縄文土器	深鉢	一部	-	-	平行沈織文
19	2-11	A-25	包含層	縄文土器	深鉢	一部	-	-	平行沈織文

第4図 第1次調査出土遺物（1）



掲載番号	写真版	登録番号	出土遺構	出土層位	種別	器種	残存	法量(cm)			備考
								C1径	底径	脚高	
1	2-12	A-16	追加層	I層	繩文土器	深鉢	一部	-	-	7.5+	平行沈綱文 繩文
2	2-13	A-18	追加層	I層	繩文土器	鉢か	一部	-	-	-	沈綱文 捜索文L
3	2-14	A-23	追加層	I層	繩文土器	鉢	一部	-	-	-	沈綱文
4	2-15	A-17	追加層	I層	繩文土器	深鉢	一部	-	-	4.9+	平行沈綱文 捜索文L
5	2-16	A-19	追加層	I層	繩文土器	深鉢か	一部	-	-	-	沈綱文 LR綱文
6	2-17	A-11	追加層	I層	繩文土器	深鉢か鉢	一部	-	-	4.9+	波状口縁小 口縁部無文帯 LR綱文
7	2-18	A-27	追加層	I層	繩文土器	深鉢	一部	-	-	-	平行沈綱文 捜索文(單節か)
8	2-19	A-3	追加層	I層	繩文土器	深鉢	一部	26.0	-	9.9+	外面無文
9	2-20	A-4	追加層	I層	繩文土器	深鉢	一部	(29.5)	-	10.3+	捜索文R
10	2-22	A-5	追加層	I層	繩文土器	深鉢	一部	-	-	7.4+	口縁部無文帯 捜索文R
11	2-21	A-6	追加層	I層	繩文土器	深鉢	一部	-	-	-	捜索文R

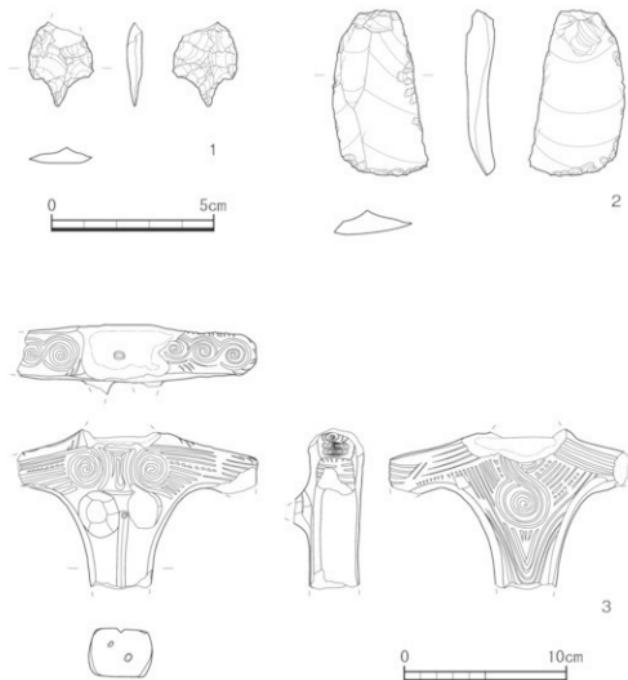
第5図 第1次調査出土遺物(2)



規範番号	写真番号	登録番号	出土遺構	出土層位	種別	器種	残存	法量(cm)			備考
								口径	底径	厚さ	
1	3-1	A-7	瓦筒	I層	礎文土器	深鉢	一部	-	-	9.9+	波状口縁 LR 縞文
2	3-2	A-10	瓦筒	I層	礎文土器	深鉢	一部	-	-	10.5+	LR 縞文 (0段多条)
3	3-3	A-9	瓦筒	I層	礎文土器	深鉢	一部	-	-	8.3+	(口縁)瓦文帯 RL 縞文
4	3-4	A-33	瓦筒	I層	礎文土器	深鉢	一部	-	-	-	(口縁)瓦文帯 口縁部内面に沈継文
5	3-5	A-8	瓦筒	I層	礎文土器	深鉢	一部	-	-	4.8+	格子彫り組文 口縁部無文帯 縞文
6	3-6	A-29	瓦筒	I層	礎文土器	深鉢	一部	-	-	2.8+	波状口縁 多条沈継文
7	3-9	A-36	瓦筒	I層	礎文土器	深鉢	一部	-	(15.4)	-	底面:木質痕
8	3-10	A-35	瓦筒	I層	礎文土器	深鉢	一部	-	-	-	底面:木質痕
9	3-7	A-34	瓦筒	I層	礎文土器	深鉢	一部	-	(7.5)	1.8+	底面:木質痕

規範番号	写真番号	登録番号	出土遺構	出土層位	種別	器種	残存	法量(cm)			備考
								長径	短径	厚さ	
10	3-11	P-6	瓦筒	I層	上製品	円盤	完形	3.4	2.8	0.8	器面磨滅 重量: 7.4g
11	3-8	P-4	瓦筒	I層	上製品	円盤	完形	5.1	4.5	0.9	尤綻文 縞文 重量: 22.5g
12	3-12	P-5	瓦筒	I層	上製品	円盤	完形	4.7	4.5	1.1	器面磨滅 重量: 22.8g
13	3-13	P-3	瓦筒	I層	上製品	円盤	完形	5.3	4.6	0.4	器面磨滅 重量: 11.6g
14	3-14	P-2	瓦筒	I層	上製品	円盤	完形	6.5	6.4	0.7	器面磨滅 重量: 33.0g

第6図 第1次調査出土遺物(3)

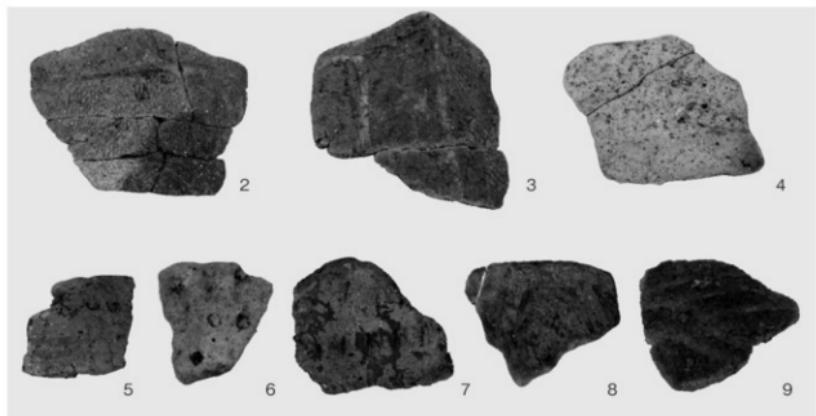


第7図 第1次調査出土遺物（4）

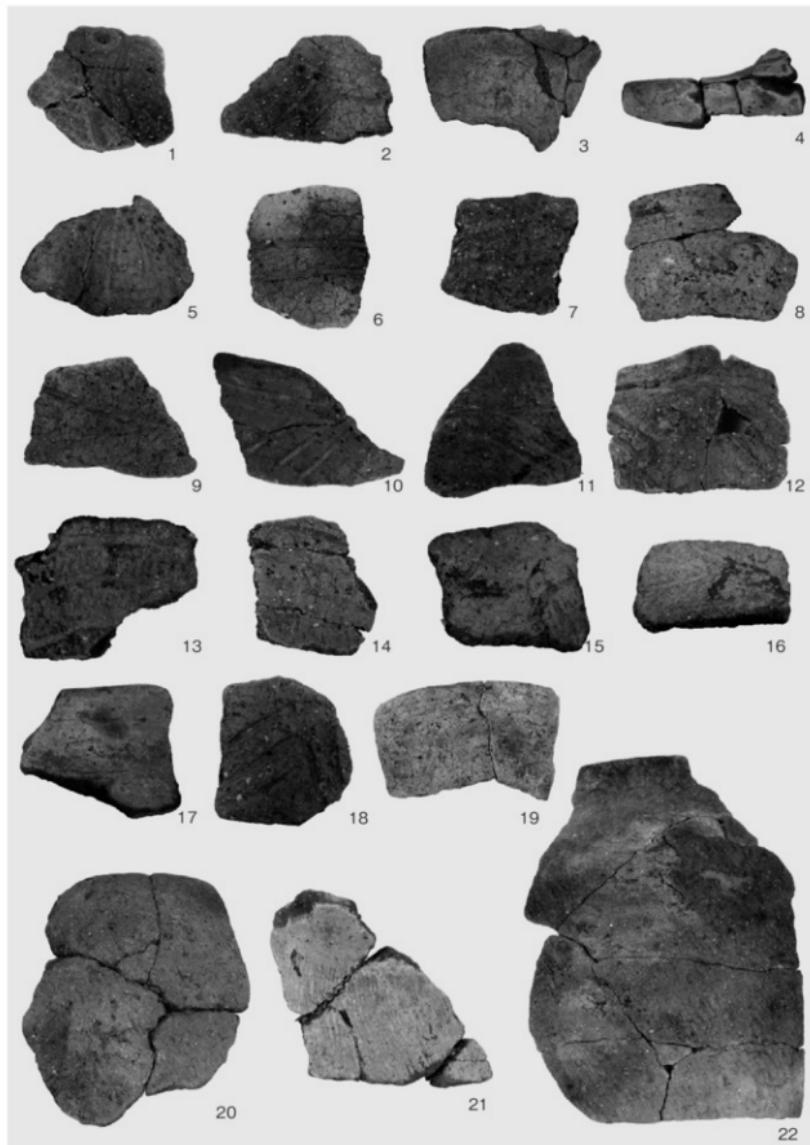
掲載 番号	写真 図版	登録 番号	出土 遺構	出土 層位	種別	器種	残存	寸法量 (cm)			備考
								長さ	幅	厚さ	
1 3-15	K-1		複数	石器	石器	一部	22 +	1.7	0.4	石材：珪質頁岩 先端部を欠損	
2 3-16	K-2		複数	石器	スクレイバー	完形	5.1	3.0	0.9	石材：珪質頁岩 內側縁に微細剝離	
3 3-17	P-1		複数	土製品	土偶	一部	9.8 +	14.7 +	4.3 +	渦巻文 平行沈線文	



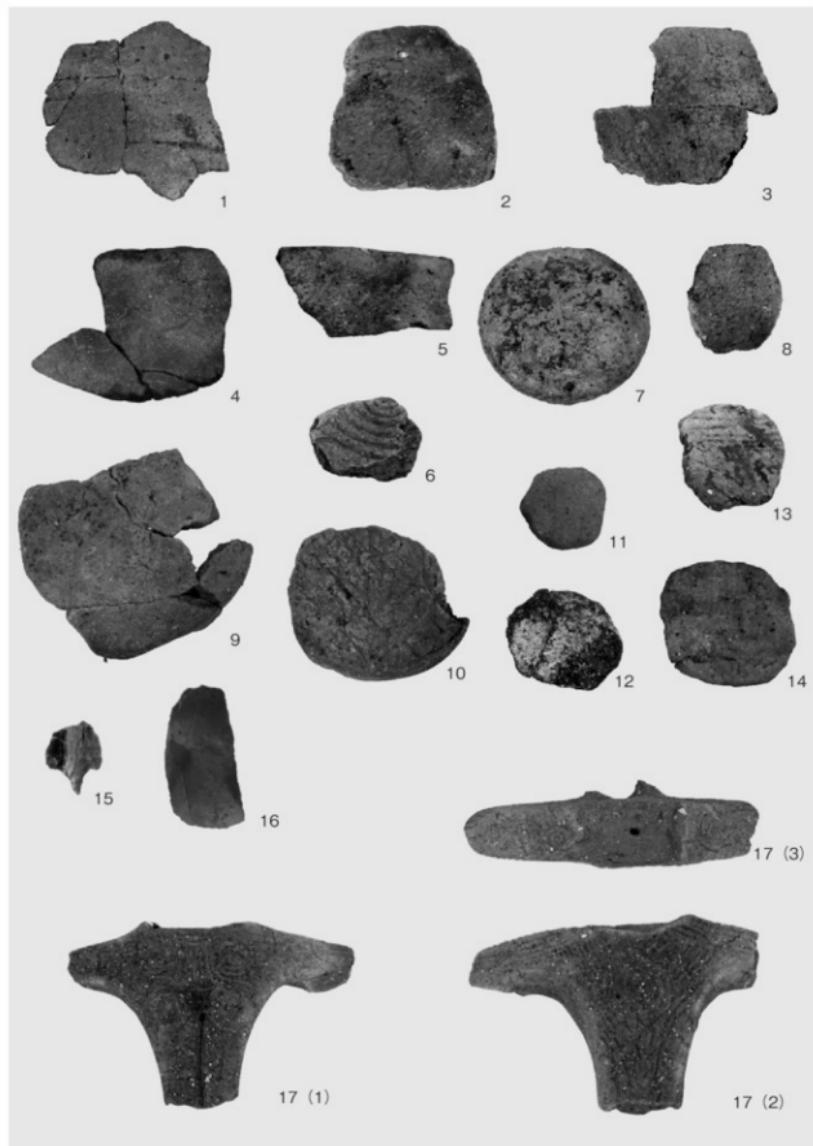
1 2 トレンチ調査区全景（西から）



写真図版1 川内C遺跡2トレンチ、出土遺物（1）



写真図版2 第1次調査出土遺物(2)



写真図版 3 第1次調査出土遺物 (3)

第2節 仙台城跡扇坂地区

I 遺跡の概要

仙台城は、慶長5（1600）年に伊達政宗によって城の繩張りが開始される。今回の調査対象となる扇坂は、筋造橋と大手門を結ぶ道から仙台城跡二の丸裏口である台所門に至る登城路であることが、「正保絵図」などの仙台城関連の絵図資料からわかる。扇坂の南に位置する大手門は、藩主の出入りや儀式に用いられた門であり、この扇坂や二の丸北側に位置する千貫橋が通常の登城路とされていた。扇坂の詳細をみると、天和2（1682）年制作の「奥州仙台城并城下絵図」には、経路を示す朱線に直行して、短い平行線が描かれている。このような表記が認められるのは、扇坂の他には、大手門の前、中門から本丸詰門にかけて、清水門から沢門の3箇所がある。いずれも比較的急峻な斜面であり、表現方法などから石段あるいは石敷きの舗装を表記したもの可能性がある。このような表記は、天和以降の絵図のすべてで確認することができるものではないが、それ以前に描かれた「正保絵図」や「寛文絵図」では認められない。また、「仙台領奥州街道絵図」にも同様の表記があり、扇坂に石段あるいは石敷きが存在したことを示すものとみられる。

II 扇坂地区の調査

1. 調査要項

遺跡名	仙台城跡（宮城県遺跡登録番号 01033）	調査地点	仙台市青葉区川内40
調査期間	平成25年10月21日～11月6日	調査対象面積	161.2m ²
調査面積	39.3m ² （1トレーナ：11.8m ² 、2トレーナ：6.0m ² 、3トレーナ：5.3m ² 、4トレーナ：8.2m ² 、5トレーナ：6.7m ² 、6トレーナ：0.6m ² 、7トレーナ：0.7m ² ）		
調査原因	歩行者通路新設工事		
調査主体	仙台市教育委員会	調査担当	仙台市教育局生涯学習部文化財課調査調整係
担当職員	主事 小泉博明、黒田智章、鈴木隆	文化財教諭	早坂純一、佐藤高陽、千葉悟、千葉靖彦

2. 調査に至る経過と調査方法

平成25年9月25日付で申請者である仙台市長より、「旧扇坂整備計画と埋蔵文化財のかかわりについて（協議）」が提出された。対象地となる扇坂は、仙台城跡内における主要な登城路のひとつと考えられること、史跡地に隣接する地区であることから、宮城県文化財保護課の指導を受けて確認調査を実施することとなった（平成25年10月9日付教文第253-20号で伝達）。

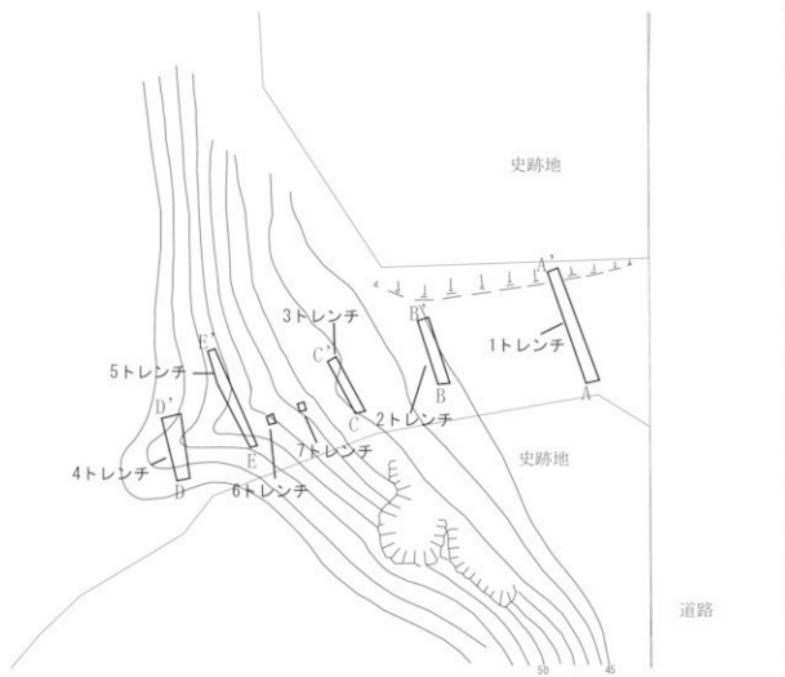
対象地は、その形状から「扇坂」と称される西から東に向かって傾斜する丘陵斜面で、対象地中央部をコンクリート製の浅い排水溝が東西方向に縱断している。確認調査は平成25年10月21日に着手した。調査では、対象地内に4箇所の調査区を設定し、丘陵斜面下部からト



番号	道路名	種別	立地	時代
1	川内C道路	敷布地	段丘	縄文・近世
2	川内A道路	敷布地・屋敷跡	段丘	縄文・近世
3	川内B道路	敷布地・屋敷跡	段丘	縄文・近世
4	仙台城跡	城館跡	丘陵・段丘	古墳・近世

第8図 仙台城扇坂地区と周辺の遺跡

レンチ1、レンチ2…と調査区番号を付した。調査では、対象地が傾斜地であること、調査区が狭小ことから、表土掘削を人力で行った。その結果、地点により削平の影響や調査区の立地が異なることなどから、基本層は共通していないが、いずれの調査区も後世の改変の影響を大きく受けていることが判明した。丘陵斜面の最も上位に位置する4トレンチは、コンクリートと玉石で構築された現排水路内に位置することから、当初、予定していた調査を実施することができなかった。これを受け、平成25年10月28日に現地で調査方法の検討を行い、4トレンチを調査区南側の斜面側へ拡張することとなった。また、3トレンチと4トレンチの間に、新たに調査区を設定することとなった。この調査区には、5トレンチと調査区番号を付し、10月29日から調査を開始した。ここまででの調査で、1~3トレンチでは、既に削平を受け、遺構が残存していないことが明らかになった。一方、丘陵斜面上位から中位に位置する4トレンチおよび5トレンチでは、詳細な時期は不明であるが、表土下に入為的な積土が確認され、仙台城跡に関わる可能性が指摘された。11月5日に再度、調査方法について検討を行い、仙台城跡に関連するとみられる盛土の分布範囲を明らかにすることを目的に、この積土が残存しない3トレンチと残存する5ト



第9図 1~7トレンチ配置図

レンチの間に、2箇所の小規模な調査区を設定することになった。丘陵斜面上位から6トレンチ、7トレンチと調査区番号を付して調査を行い、いずれの調査区でも、表土下に同様の積土を確認した。今回の調査では、必要に応じて、平面図および断面図を作製し、デジタルカメラを用いて記録写真を撮影した。調査区の埋め戻しは人力で行い、11月6日に調査器材の撤収を含む、今回の確認調査が終了した。

3. 基本層序

調査区は、立地が地点によって異なることや削平や盛土など、後世の影響が大きいことから、それぞれの調査区によって異なる様相を示している。このことから、基本層については、調査区ごとに報告する。

4. 1トレンチの調査

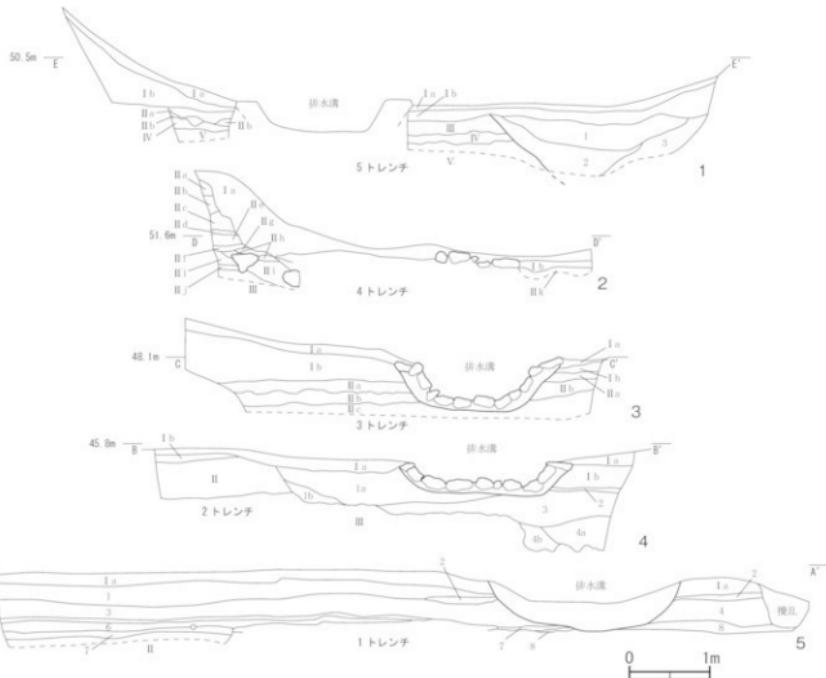
1トレンチは丘陵斜面下位に位置し、比較的平坦である。標高は43.5m程度である。調査面積は約11.8m²である。遺構は検出されなかったが、遺物は表土や盛土から瓦類などが出土している。

(1) 基本層序

基本層は、表土を含めて2層である。調査地点南半部では、表土直下からコンクリート層と亜炭主体層を挟んで、8層の盛土がある。最下層にあたる凝灰岩層は、均質で基盤層とみられる。

I層：黒褐色を呈するシルトである。しまりがなく、瓦類などを含む表土である。

II層：にぶい黄色を呈する凝灰岩で、今回調査の地山層である。しまりが強く、均質である。



第10図 1～5トレンチ断面図

(2) 発見遺構と出土遺物

本調査区で検出した遺構はない。盛土の状況から、調査区は既に削平を受けており、遺構が残存していないものと考えられる。遺物は、現表土や盛土層から瓦類7点などが出土している。また、盛土からは「SINAGAWA」と型押しされたレンガが出土している。

5. 2トレンチの調査

2トレンチは丘陵斜面下位に位置し、丘陵斜面の勾配が変換する地点にある。現標高は約45.7mである。調査面積は6.0m²である。遺構は検出されなかったが、遺物は表土や盛土層から瓦類などが出土している。

(1) 基本層序

調査区で確認した基本層は、表土を含めて大別3層である。調査地点北半部では、現表土直下から自然堆積とみられる堆積層を挟んで4層の盛土がある。

I層：瓦などを含む表土で、2層に細別される。上層は対象地全域に分布する黒褐色のシルトである。下層は排水路よりも古い堆積層で、暗褐色を呈するシルトである。瓦類などのほかに小礫を含む。排水路南側に分布が認められる。

II層：にぶい黄褐色を呈する砂質シルトで、凝灰岩をブロック状に含む。III層崩落土の可能性がある。

III層：灰黄色を呈する凝灰岩ブロック層で、今回調査の地山層である。

(2) 発見遺構と出土遺物

本調査区で検出した遺構はない。盛土の状況から、調査区は既に削平を受けており、遺構が残存していないものと考えられる。調査区北半部に位置する落ち込みは、今回の調査では、その範囲や性格を明らかにすることはできなかったが、堆積土にあたる盛土層から瓦類1点が出土しており、近世以降と考えられる。遺物は、表土や盛土層から瓦類30点程が出土している。

6. 3トレンチの調査

3トレンチは丘陵斜面中位に位置している。現標高は約48.1～48.6mである。調査面積は5.3m²である。遺構は検出されなかったが、遺物は表土から瓦類が出土している。

(1) 基本層序

調査区で確認した基本層は、表土を含めて大別2層である。表土直下から段丘疊層とみられるしまりのある砂礫層が、調査区全域に分布している。

I層：瓦類などを含む表土である。2層に細別される。上層は黒褐色のシルトで、現表土である。調査区全域に分布する。下層は排水路よりも古い堆積層で、暗褐色を呈するシルトである。瓦などのほかに小礫を含む。調査区全域に分布し、丘陵斜面に接近する調査区南側で層厚が増し、層厚は最大で約0.45mである。

II層：灰黄褐色およびにぶい黄褐色を呈するしまりのある砂礫層で、3層に細別される。調査区全域に分布し、段丘疊層とみられる。

(2) 発見遺構と出土遺物

本調査区で検出した遺構はない。状況から、調査区は既に削平を受けており、遺構が残存していないものと考えられる。遺物は、表土から瓦類56点などが出土している。

7. 4トレンチの調査

4トレンチは丘陵斜面上位に位置している。また、南北方向の丘陵斜面が、西側に広がる丘陵平坦面に変換する地点の直下にある。現標高は約51.4～52.4mである。調査面積は約8.2m²である。本調査区は、大半が玉石とコンクリートで構築された排水路に覆われていることから、今回の調査は調査区南側の丘陵斜面を中心に行った。その結果、現在の地形を形成する水平方向に堆積する盛土層を確認した。遺物は、表土や盛土層から瓦類などが出土

している。

(1) 基本層序

調査区で確認した基本層は、表土を含めて大別3層である。調査地点南端部では、表土直下から盛土層と考えられる基本層II層が確認された。最下層にあたる基本層III層は、しまりのある砂礫層で、段丘礫層とみられる。

I層：瓦類などを含む表土である。2層に細別される。上層は調査区全域に分布する黒褐色のシルトである。下層は排水路よりも古い堆積層で、暗褐色を呈するシルトである。瓦類などの他に小礫を含む。排水路北側に分布する。

II層：調査区南端部で確認した現地形を形成する堆積土で、調査区南側に位置する丘陵斜面と連続する。II層に細別され、にぶい黄褐色や灰黄褐色などのシルトおよび砂質シルトを主体とする。5トレンチの積土と比較して、黒味が強く、礫や地山を含むなど様相が異なっている。しかし、水平方向に堆積し、地山をブロック状に含むことから、盛土層とみられる。

III層：調査区南端部で確認したにぶい黄褐色を呈する砂礫層である。しまりがあり、段丘礫層とみられる。

(2) 発見遺構と出土遺物

本調査区では、調査区南端部と調査区北西部の排水路直下に盛土層とみられる堆積層（基本層II層）が確認された。部分的な調査ではあるが、水平に堆積する状況などから、仙台城跡に関連する遺構の可能性がある。詳細な時期を明らかにすることはできなかったが、基本層II層から出土した瓦から、近世以降と考えられる。遺物は、表土や盛土層（基本層II層）から瓦類16点などが出土している。

8. 5トレンチの調査

5トレンチは丘陵斜面上位に位置している。現標高は約499～510mである。調査面積は6.7m²である。調査区の北半部は擾乱の影響を受けている。本調査区では、調査区南半部で表土直下ににぶい黄褐色粘土と灰黄褐色粘土の混合層を確認し、盛土層と判断された。遺物は、表土や積土から瓦類が出土している。

(1) 基本層序

調査区で確認した基本層は、大別5層である。調査地点南端部では、表土直下から盛土層と考えられる基本層II層が確認された。基本層III層およびIV層は、層の状況が大きく異なっているが、基本層II層と同様に盛土層の可能性がある。最下層である基本層V層は、しまりのある砂礫層で、段丘礫層とみられる。

I層：瓦などを含む表土である。2層に細別される。上層は調査区全域に分布する黒褐色のシルトである。下層は排水路よりも古い堆積層で、暗褐色を呈するシルトである。調査区全域に分布し、瓦類などの他に小礫を含む。

II層：調査区南半部に分布するにぶい黄褐色粘土と灰黄褐色粘土の混合層である。2層に細別され、下層は、上層と比較して黒味が強い。いずれも礫を含まず、ごく少量の瓦片が混入する。層厚は0.30mほどである。部分的な調査ではあるが、様相から盛土層と考えられる。

III層：調査区北半部に分布する暗灰黄色を呈する砂質シルトである。礫を多く含む。層厚は0.20mほどである。

IV層：調査区南半部に分布する黒褐色を呈する粘土で、礫を多く含む。部分的な調査ではあるが、盛土層の可能性がある。

V層：暗灰黄色を呈する砂礫層で、しまりが強い。段丘礫層と考えられる。

(2) 発見遺構と出土遺物

本調査区では、調査区南半部に盛土層が確認された（基本層II層）。また、その積土下に分布する基本層III層およびIV層の2層についても、盛土層の可能性がある。これらの盛土層は、仙台城跡に関連する遺構に伴う可能性がある。詳細な時期を明らかにすることはできなかったが、基本層II層から出土した瓦から、近世以降と考えられる。遺物は、表土や盛土層（基本層II層）から瓦類74点などが出土している。

9. 6・7トレンチの調査

6・7トレンチは丘陵斜面上位に位置し、3トレンチと5トレンチの間に位置する。5トレンチで確認された盛土層の範囲を確認する目的で設定し、調査を実施した。現標高は6トレンチが約49.4～49.8mで、7トレンチが約49.1～48.5mである。調査面積は、6トレンチが0.6m²、7トレンチが0.7m²である。いずれの調査区でも、表土直下にぶい黄褐色粘土と灰黄褐色粘土の混合層を確認し、特徴から盛土層と推定される。遺物は、表土から瓦類が出土している。

(1) 基本層序

調査区で確認した基本層は、大別2層である。表土直下から盛土層と考えられる基本層Ⅱ層が確認され、5トレンチで検出された盛土層が斜面下方に分布することが明らかとなった。

I層：瓦などを含む表土である。2層に細別される。上層は調査区全域に分布する黒褐色のシルトである。下層は排水路よりも古い堆積層で、暗褐色を呈するシルトである。調査区全域に分布し、瓦類などの他に小礫を含む。

II層：調査区南半部に分布するぶい黄褐色粘土と灰黄褐色粘土の混合層である。様相から盛土層と考えられる。

(2) 発見遺構と出土遺物

本調査区の調査では、表土下にぶい黄褐色粘土と灰黄褐色粘土の混合層が確認された。5トレンチの調査成果から、盛土層とみられる。これらの積土は、仙台城跡に関連する遺構に伴う可能性があり、5トレンチで検出された盛土層が斜面下方に分布することが明らかとなった。詳細な時期を明らかにすることはできなかったが、類似した5トレンチの基本層Ⅱ層から瓦類が出土しており、近世以降の可能性がある。遺物は、表土から瓦類35点などが出土している。

10.まとめ

調査地点は、仙台城跡二の丸に至る登城路にある。調査は、対象地内に7箇所の調査区を設定して行い、以下のことが明らかとなった。

1 丘陵斜面上位から中位に位置する4トレンチから7トレンチで、二の丸へ接続する登城路に伴う可能性がある積土が確認された。しかし、積土上面は後世の削平の影響を受けて、路面は残存していないものと判断され、前述した絵図に記載された表記を検討する資料は得られなかった。また、登城路に伴う側溝や路面下に敷設された暗渠などの施設は検出されず、明確に仙台城跡および登城路に関連すると判断される遺構は検出されなかった。積土の詳細な時期は不明であるが、積土にごく少量の瓦類が含まれている。したがって、対象地内で確認された積土は近世以降と考えられる。

2 丘陵斜面中位から下位にかけて位置する1トレンチから3トレンチの調査では、大きく削平を受け、丘陵斜面下位では、さらに盛土が行われていることが明らかになった。これらの改変により、丘陵斜面中位から下位では、遺構は残存していない。丘陵斜面全体に及ぶとみられる改変の時期を示す遺物は少ないが、丘陵斜面下位の調査区では、盛土中にレンガやコンクリートが認められることから、概ね近現代と考えられる。

3 遺物には、瓦類がある。主に表土からの出土である。瓦類は比較的多量に出土し、遺物の性格から、仙台城跡に関連するとみられる。丘陵斜面西側の仙台城二の丸が位置する平坦面などから、対象地の表土に混入したと考えられ、対象地周辺に存在した遺構の性格を反映すると推定される。

引用・参考文献

江戸遺跡研究会編 2001『国説 江戸考古学事典』柏書房

仙台市市史編さん委員会 2006「I. 仙台城、II. 仙台城の様相、III. 外郭線と城門」『仙台市史』特別編7城館



1. 1 トレンチ調査区全景（北から）



2. 2 トレンチ調査区全景（北から）



3. 3 トレンチ調査区全景（北から）



4. 4 トレンチ調査区全景（北から）



5. 5 トレンチ全景（北北東から）



6. 6 トレンチ調査区全景（北東から）



7. 7 トレンチ調査区全景（北東から）



8. 5 トレンチ南半部 西壁断面（東から）

写真図版 4 仙台城局板地区

第3章 若林区内の調査

第1節 沖野城跡

I. 遺跡の概要

沖野城跡は、宮城県若林区沖野七丁目に所在する。JR仙台駅の南東約6.8kmに位置し、広瀬川左岸の標高6.0mほどの自然堤防上に立地する。遺跡の範囲は、東西約340m、南北約250mである。遺跡は、東西方向に延びる自然堤防の先端にあたり、西側を除く三方には沖積低地が広がっている。宅地化が進んだ現状では、城館の様相を把握することは困難ではあるが、一部に土壘状の高まりや細長い宅地や畠地の形状から、堀跡と推定される箇所もある。明治時代中期の地籍図をみると、遺跡の周辺は広範囲が水田であるのに対して、沖野城跡の範囲は宅地や畠地となっており、それを取り囲むように細長い水田が連続して認められる。また、昭和14年(1939年)頃に作製された『六郷村沖野館屋敷図』でも宅地を囲む「元堀」と記載された細長い区画や一部に上手も記されている。文献上の沖野城跡については、「仙台領古城書立之覚」や「藤原姓栗野家譜」などがあり、城の規模や城主などについて記載がある。

沖野城跡では、これまで第14次にわたる発掘調査の他、個人住宅や宅地造成などに伴う調査が断続的に行われている。これらの調査では、主に区画施設とみられる溝跡が検出されているが、沖野城跡に関わる建物跡、井戸跡などの施設は検出されていない。

II. 第15次調査

1. 調査要項

遺跡名 沖野城跡(宮城県遺跡登録番号01234) 調査地点 仙台市若林区七丁目303-6他

調査期間 平成25年5月9日～

16日

調査対象面積 1304.0m²

調査面積 194.0m²

1トレンチ: 229m²

2トレンチ: 105.0m²

3トレンチ: 66.0m²

調査原因 宅地造成工事

調査主体 仙台市教育委員会

調査担当 仙台市教育局生涯

学習部文化財課

調査調整係

担当職員

主事 小泉博明、黒田智章

文化財教諭 佐藤高陽

早坂純一、千葉悟、

千葉靖彦



番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	沖野城跡	城館跡	自然堤防	中世
2	南小泉道路	集落跡・屋敷跡	自然堤防	礎文～近世
3	法源塚古墳	円墳	自然堤防	古墳
4	蛇塚古墳	円墳?	自然堤防	古墳
5	鶴塚古墳	円墳?	自然堤防	古墳
6	兼種園道跡	城館跡	自然堤防	古代～近世
7	保春院前遺跡	集落跡	自然堤防	古代～近世
8	若林城跡	城館跡・円墳・集落跡	自然堤防	古墳～近世
9	仙台東郊冬里跡	条里遺構	自然堤防	古代
10	中在家南造跡	集落跡・河川跡	自然堤防	弥生～中世
11	遠見塚古墳	前方後円墳	自然堤防	古墳
12	神櫛遺跡	官衙関係	自然堤防	古代
13	砂押1号跡	散居地	自然堤防	古代～近世

第11図 沖野城跡と周辺の遺跡

2. 調査に至る経過と調査方法

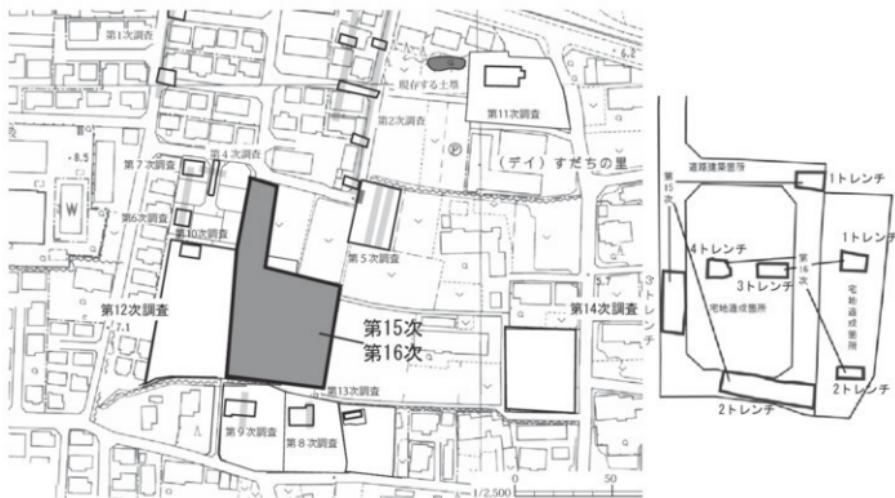
今回の調査は、平成25年4月24日付で申請者より提出された宅地造成工事に伴う「埋蔵文化財発掘の届出について」(平成25年5月2日付H25教生文第124-16号で回答)に基づき実施した。調査は、平成25年5月9日に着手した。申請者側が表示した新設される道路敷設範囲内に3箇所の調査区を設定し、遺構検出面までの基本層I層の除去は重機を用いて行った。調査区番号は、調査を行った順に1トレンチから3トレンチまで付した。対象地の北東部に位置する1トレンチでは、現畑耕作土直下から多量の礫、ビニールやプラスチック片などを含む堆積層が調査区全域に広がることを確認した。調査区の位置から、溝跡堆積土の可能性も考えられたが、調査区壁面の観察の結果、搅乱と判断し、遺構検出面および遺構堆積土を確認することができなかった。対象地南部に位置する2トレンチでは、南北方向の溝跡3条が検出され、対象地西部に位置する3トレンチでは、ピット5基が検出された。これを受けて、確認調査から記録保存を目的とした本発掘調査に移行した。今回の調査では、埋設管の掘削深度の都合から、遺構の底面まで精査が及んでいないものが大半である。また、必要に応じて、平面図および断面図を作製し、デジタルカメラを用いて記録写真の撮影を行った。調査は平成25年5月16日に終了し、申請者との協議により、2・3トレンチの調査区の埋め戻しは行わずに現場を引き渡した。

3. 基本層序

第15次・第16次調査は、同一の対象地内で隣接することから、基本層は概ね共通している。確認された基本層は、現畑耕作土を含めて大別6層である。

I層：現畑地耕作土を含む表土、旧畑耕作土、盛土などを一括して層位番号を付した。対象地全域に分布する。地
点により細別され、最大で5層に分けられる。褐色、灰褐色、にぶい黄褐色を呈するシルトで、一部は窪
地状に残存したSD2溝跡に堆積した自然堆積土および人為的埋土の可能性がある。

II層：黒褐色を呈する粘土でしまりがあり、褐灰色の粘土を斑状に含む。地点により黒味が強い。第15次調査では、



第12図 第15・16次調査区位置図、設定図

本層がS D 3溝跡およびS X 1性格不明遺構を複い、S D 1溝跡およびS D 2溝跡が本層上面から掘り込まれていることを確認している。

III層：褐灰色を呈する粘土である。

IV層：褐灰色を呈する粘土である。III層よりも黒味を帯びる。

V層：黒褐色を呈する粘土で、層下部にVI層起源の黄褐色を呈する砂質シルトを含む。

VI層：しまりのない黄褐色を呈する砂質シルトおよび細砂である。第15次・16次調査における遺構検出面である。

4. 発見遺構と出土遺物

遺構は、溝跡3条、性格不明遺構1基、ピット5基を検出した。遺物は、2トレンチの基本層、遺構堆積土から、土器、陶器、磁器、木製品が出土している。以下に、調査区ごとに概要を記述する。

(1) 1トレンチ

調査区全域が荒廃の影響を受けている。遺構検出面の確認には至らず、遺構および遺物は発見されなかった。

(2) 2トレンチ

本調査区では、溝跡3条、性格不明遺構1基を検出した。今回の調査では、基本層VI層上面で遺構検出を行っているが、調査区裏面の観察で、基本層II層上面でS D 1溝跡およびS D 2溝跡が、基本層V層およびVI層上面でS D 3溝跡およびS X 1性格不明遺構が、検出されている。

SD1溝跡

調査区東部で検出した南北方向の溝跡である。他の遺構との重複はない。検出長は約4.80mで、さらに調査区外南北へ延びる。部分的な検出ではあるが、規模は上端幅2.00m以上、下端幅0.75m以上で、検出面からの深さは0.20mほどである。断面形は皿状を呈するものとみられる。堆積土は2層に細別され、黄褐色の砂質シルトを含む黒褐色および暗褐色のシルトと粘土である。いずれも自然堆積土とみられる。

遺物は出土していない。

SD2溝跡

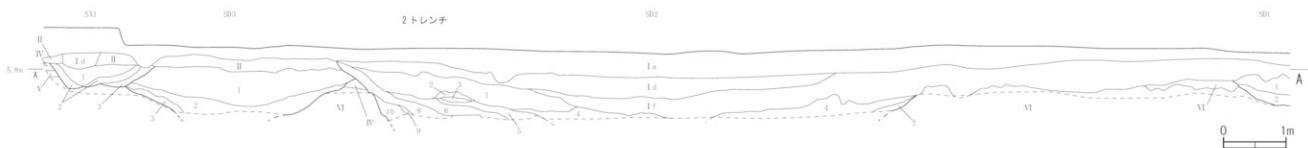
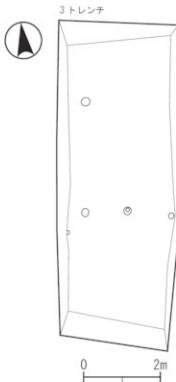
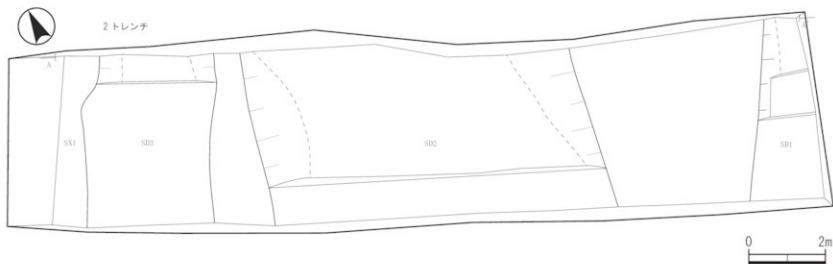
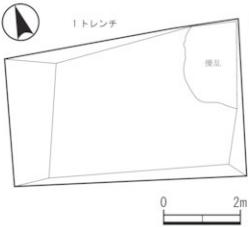
調査区中央部で検出した南北方向の溝跡である。他の遺構との重複はない。検出長は約4.20mで、さらに調査区外南北へ延びる。部分的な調査ではあるが、規模は上端幅約8.50～8.60mで、検出面からの深さは0.50m以上である。断面形は不明である。堆積土は10層に細別され、窪地状の地形に堆積した近現代のものを含む陶器、磁器、瓦を含む自然堆積層および人為的埋土を含めた上層と植物遺存体を含む黒褐色などの粘土を主体とする下層に大別される。

遺物は土器師、陶器、磁器、木製品が出土している。陶器には、美濃産灰釉皿（第14図2）、肥前產皿（第14図1）、灰釉碗（第14図3）、大堀相馬產掛分碗（第14図4）、灰釉片口、堤產なまこ釉甕、岸窯系鉄釉鉢もしくは水注、在地產鉄釉擂鉢・鉄釉小型甕、堤とみられる鉄釉土鍋がある。磁器には、肥前產染付皿（第14図8）・染付徳利（瓶）、青磁香炉、瀬戸美濃產染付小壺（第14図6）、瀬戸美濃とみられる徳利（第14図5）、產地不明色絵徳利（第14図7）がある。木製品には、漆器椀（第15図1・2・3）、桶の側板（第15図7）、曲物の蓋板もしくは底板（第15図11・12）、栓（第15図4・5・6）、自在鉤（第15図10）、札状木製品（第15図8・9）、箱物容器蓋の可能性がある板材、杭がある。

b. 基本層V層およびVI層上面検出遺構

SD3溝跡

調査区西部で検出した南北方向の溝跡である。S X 1性格不明遺構と重複し、これよりも古い。検出長は約4.50mで、さらに調査区外南北へ延びる。部分的な調査ではあるが、規模は上端幅約3.00～3.30mで、検出面からの深さは0.30m以上である。断面形は上部が開く逆台形を呈するとみられる。堆積土は3層に細別され、人為的埋



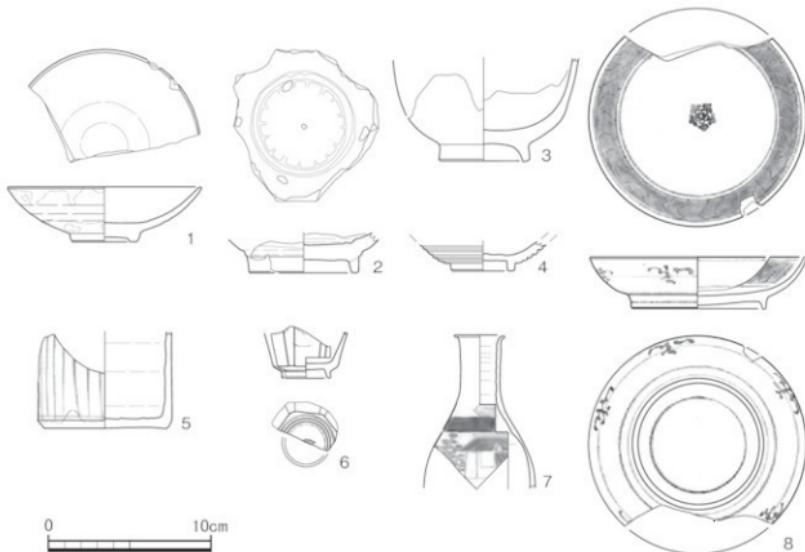
層位	土色	土質	備考
1	10YR3-3暗褐色	シルト	黒褐色 (10YR2-1) 粘土を粒状にごく少量含む
2	10YR3-2黒褐色	粘土質シルト	黒褐色 (10YR3-1) 粘土を粒状に少量含む

層位	土色	土質	備考
1	3Y4-3暗オリーブ色	シルト	炭化物を粒状に多く含み、植物遺存体をごく少量含む
2	2.5Y4-3暗オリーブ褐色	粘土質シルト	粘土質シルトを粒状に少量化
3	3Y4-2深オリーブ色	粘土質シルト	炭化物を粒状に少量含む
4	2.5Y4-3オリーブ褐色	粘土	黒褐色 (10YR3-1) 粘土と植物遺存体を含む
5	3Y4-3暗オリーブ色	粘土	黒褐色 (10YR3-1) 粘土と植物遺存体を多く含む
6	3Y4-2深オリーブ黑色	粘土	植物遺存体を若干含む
7	2.5Y4-2深褐色	粘土	黒褐色 (2.5YR5-3) 紗質シルトを斑状に含む
8	2.5Y4-2褐色	粘土	黒褐色 (2.5YR5-3) 紗質シルトを斑状に含む
9	3Y4-2深オリーブ色	粘土	黒褐色 (2.5YR5-3) 紗質シルトを斑状に含む
10	2.5Y3-2黒褐色	粘土	植物遺存体を含む

層位	土色	土質	備考
1	2.5Y3-2黒褐色	粘土	黒褐色 (2.5Y3-2) 粘土とにじむ黄褐色 (10YR5-3) 粘土の互層 人為的理土
2	10YR3-3にじむ黄褐色	粘土	
2	2.5Y3-1黒褐色	粘土	黄褐色 (2.5YR5-3) 紗質シルトを斑状に少量含む
3	2.5Y3-3深オリーブ褐色	粘土	黄褐色 (2.5YR5-3) 紗質シルトを斑状に少量含む

層位	土色	土質	備考
1	10YR3-3暗褐色	シルト	黒褐色 (10YR3-1) 粘土を粒状に含む
2	10YR3-3暗褐色	シルト	黒褐色 (10YR3-1) 粘土を粒状にごく少量含む
3	10YR3-4暗褐色	シルト	黒褐色 (10YR3-1) 粘土を粒状にごく少量含む

第13図 第15次調査平面・断面図



第14図 第15次調査出土遺物(1)

土である上層の黒褐色の粘土とにぶい黄褐色の粘土の互層と自然堆積土である下層の基褐色の砂質シルトを含む黒褐色および暗オリーブ褐色粘土に大別される。

遺物は出土していない。

SX1 性格不明遺構

調査区西部北壁で検出した性格不明遺構である。SD3溝跡と重複し、これよりも新しい。大部分が調査区外のため平面形は不明であるが、規模は上端幅約1.70m、下端幅約0.90mで、基本層Ⅳ層上面からの深さは約0.35mである。断面形は逆台形を呈する。堆積土は3層に細別され、黒褐色の粘土を含む暗褐色のシルトである。自然堆積土とみられる。

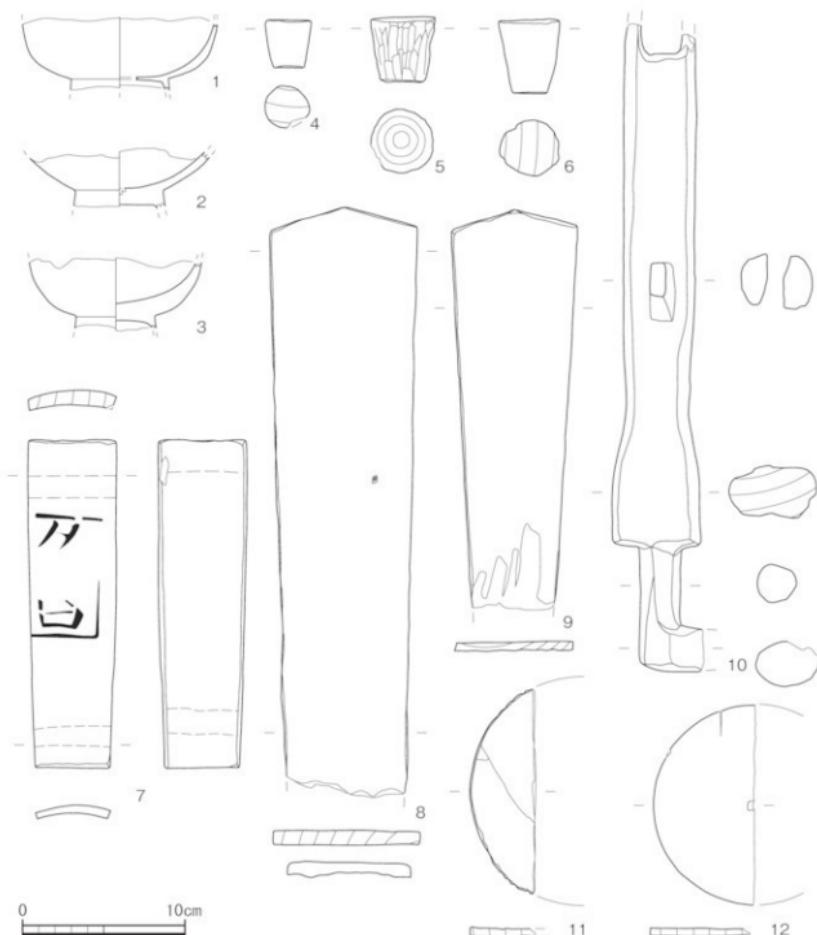
遺物は出土していない。

(3) 3トレンチ

調査区内で検出したピットは5基である。柱痕跡が確認されたものはない。平面形は径0.15～0.40mほどの円形を呈する。平面精査に留まることから、深さは不明である。堆積土はにぶい黄褐色の粘土を含む黒褐色の粘土質シルトである。

基本層および遺構から、遺物は出土していない。

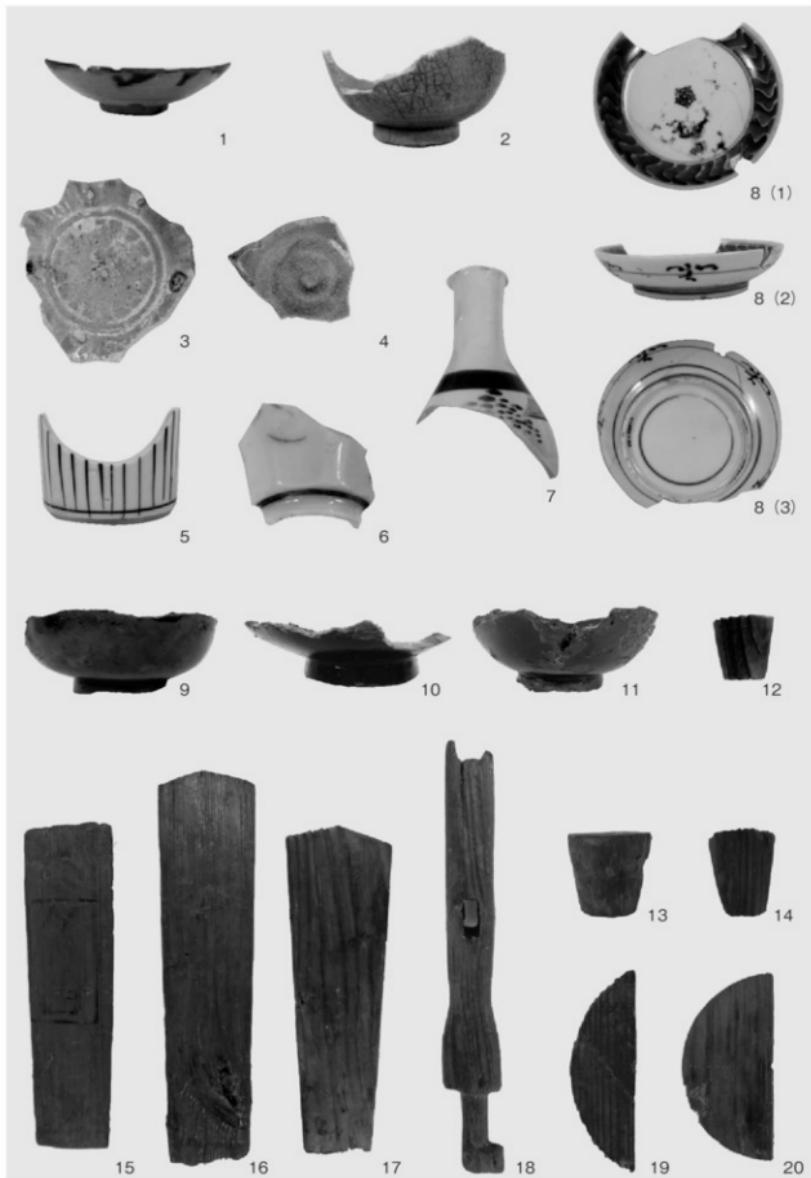
掲載番号	写真	図版	登録番号	出土遺構	出土層位	種別	器種	残存	法量(cm)			備考
									口径	底径	器高	
1 5-1	I-4	SD2		陶器	甌	1/3	(11.9)	(4.0)	34			肥前 内面：縦線（見込み：蛇の目調査）17C後半～
2 5-3	I-5	SD2		陶器	甌	一部	-	6.8	2.5+			美濃 灰釉 見込み：日跡3箇所 印花文 17C前葉～中葉
3 5-2	I-3	SD2		陶器	甌	一部	-	5.5	6.4+			肥前 灰釉 17C後半～
4 5-4	I-2	SD1		陶器	甌	一部	-	3.8	1.8+			大垣相馬 捕分縫 灰釉 鉄釉（骨付のみ無釉）18C
5 5-5	I-1	I解		陶器	甌	一部	-	7.6	5.9+			瀬戸・美濃小 19C後葉
6 5-6	I-8	SD2	確認済	陶器	甌	甌付小甌	一部	63.0	32+			瀬戸・美濃 型打波形 展唇二重腹文 直口 瓢箪 19C後葉
7 5-7	I-7	SD2		陶器	甌	一部	31	-	9.5+			产地不明（奈良・赤堀焼か）色绘陶利 19C前葉か
8 5-8	I-6	SD2		陶器	甌付甌	4.5	13.3	8.2	3.2			肥前 流水文様 こんなやく印判（五瓣花）17C末～18C前半



掘戻 番号	写真 図版	登録 番号	出土 遺構	出土 層位	種別	器種	残存	法量(cm)			備考
								口径	底径	器高	
1 5.9	L.10	SD2	漆器	桶	1/2	-	-	4.5+	-	内外面：赤色漆	
2 5.10	L.11	SD2	漆器	桶	一部	-	-	3.7+	-	外表面：黒色漆、内面：赤色漆	
3 5.11	L.12	SD2	漆器	桶	一部	-	-	4.5+	-	内外面：黒色漆	
4 5.12	L.8	SD2	木製品	栓	ほぼ完形	3.0	2.9	2.6	-	分割材	
5 5.13	L.7	SD2	木製品	栓	ほぼ完形	4.0	3.9	4.0	-	芯材	
6 5.14	L.6	SD2	木製品	栓	完形	4.5	3.7	3.5	-	分割材	

掘戻 番号	写真 図版	登録 番号	出土 遺構	出土 層位	種別	型種	残存	法量(cm)			備考
								長さ	幅	厚さ	
7 5.15	L.3	SD2	木製品	桶	側板	20.3	+ 5.5	1.0	-	-	外表面：側面[...], 桶の底面 内面：蓋板・底板の底面、板目材
8 5.16	L.4	SD2	木製品	木札	一部	36.3	+ 9.1	1.0	-	-	板目材
9 5.17	L.2	SD2	木製品	木札	一部	24.5	+ 7.8	0.6	-	-	板目材
10 5.18	L.9	SD2	木製品	自在鉤	一部	39.8	+ 5.5	3.3	-	-	分割材
11 5.19	L.5	SD2	木製品	曲げ物	1/4	12.5	+ 4.1	0.6	-	-	蓋板もしくは底板 板目材
12 5.20	L.1	SD2	木製品	曲げ物	1/2	12.4	-	0.5	-	-	蓋板もしくは底板 板目材

第15図 第15次調査出土遺物(2)



写真図版 5 第 15 次調査出土遺物



1. 2トレンチ調査区全景（西から）

写真図版6 第15次調査

III. 第16次調査

1. 調査要項

遺跡名 沖野城跡（宮城県遺跡登録番号01234） 調査地點 仙台市若林区七丁目303-36他

調査期間 平成25年8月21日～9月6日 調査対象面積 673.0m²

調査面積 76.2m²（1トレンチ：22.0m² 2トレンチ：14.8m² 3トレンチ：19.8m²

4トレンチ：19.6m²）

調査原因 建売住宅10棟新築工事

調査主体 仙台市教育委員会 調査担当 仙台市教育局生涯学習部文化財課調査調整係

担当職員 主事 小泉博明、黒田智章 文化財教諭 早坂純一、佐藤高陽、千葉悟、千葉靖彦

2. 調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、平成25年5月30日付で申請者より提出された建売住宅建築工事に伴う「埋蔵文化財の取扱いについて」（平成25年6月6日付H25教生文第124-24号で回答）に基づき実施した。調査は建築が予定される建売住宅10棟のうち、今年度、実施した宅地造成に伴う新設道路部分を対象にした第15次調査の成果に基づき、4棟について確認調査を行った。調査は、平成25年8月21日から、対象となる4棟の住宅の建築範囲内にそれぞれ調査区を設定して、重機による表土掘削に着手した。当初、4棟分について、並行して調査を行う予定であったが、宅地造成工事の進捗状況から、対象地の東部の2棟分から調査を開始した。なお、4箇所の調査区の調査区番号は調査を行った順に1トレンチから4トレンチまで付し、検出した遺構番号は、道路部分で検出された遺構と一連の遺構であると考えられた場合には踏襲して用いている。対象地の東部に位置する1トレンチと2トレンチでは、現地表面から面上に最大0.80mの掘削を行った。畑耕作土直下から近現代の陶磁器などを含む堆積層が調査区全域に広がることを確認し、調査区南壁際に設定した深掘区の調査の結果、堆積土の状況から、S D 1溝跡の上部に堆積した自然堆積層と判断した。1トレンチならびに2トレンチの調査は8月27日に終了し、8月30日に調査区の埋め戻しを申請者側が行った。対象地中央部および西部に位置する3トレンチおよび4トレンチの調査は、宅地造成工事が完了した9月2日から開始した。いずれも現地表面から面上に最大0.80mの掘削を行った。対象地中央部に位置する3トレンチでは、畑耕作土下から近現代の陶磁器などを含む堆積層が調査区全域で確認され、調査区北壁際に設定した深掘区の調査の結果、位置や堆積土の状況から、第15次調査で検出した南北方向のS D 2溝跡と一連の遺構と判断した。また、対象地西部に位置する4トレンチでは、ピット1基を検出した。調査では、適宜、

平面図および断面図を作製し、デジタルカメラを用いて記録写真の撮影を行った。調査器材撤収を含めたすべての調査は、平成25年9月6日に終了し、申請者との協議により、調査区の埋め戻しは行わずに申請者側に現場を引き渡した。

3. 基本層序

第15次調査の「3. 基本層序」と同じである。

4. 発見遺構と出土遺物

遺構は、溝跡3条、ピット1基を検出した。検出した溝跡は、位置や堆積土の状況などから、第15次調査で確認した溝跡と一連と考えられる。今回の調査で検出したいずれの遺構も、基本層Ⅰ層上面が遺構検出面とみられる。遺物は遺構堆積土から土器、陶器、磁器、瓦、石製品などが出土している。以下に、調査区ごとに概要を記述する。

(1) 1トレーナー・2トレーナー

対象地東部に位置する1トレーナーおよび2トレーナーでは、同一の南北方向とみられる溝跡1条を検出した。位置や規模、堆積土の特徴などから、第15次調査で検出したSD1溝跡と一連の溝跡と考えられる。遺物は土器、陶器、磁器、瓦質土器、瓦が出土している。

SD1 溝跡

いずれの調査区も全城がSD1溝跡内に位置する。現畑耕作土である基本層Ⅰ層に覆われるが、調査区内で基本層が認められないことから、掘り込み面は不明である。現畑耕作土である基本層Ⅰ層に覆われる。部分的な調査ではあるが、規模は東西5.80m以上で、基本層Ⅰ層下面からの深さは0.80m以上である。断面形は不明であるが、1トレーナー西端部で溝跡西壁の一部を確認した。確認した溝跡西壁の傾斜は非常に緩やかである。堆積土は1トレーナーで7層、2トレーナーで14層を確認した。上部のしまりのない溝跡の窪地に堆積した自然堆積土および人為的理土とみられる粘土質シルトなどと下部の植物遺存体を含む粘土層に大別される。

遺物は上部堆積土から土器、近現代を含む陶器、磁器、瓦質土器、瓦、ガラス片などが出土している。土器には土師器壺がある。胴部の破片資料で、長胴型を呈するものとみられる。陶器には常滑産窯、大堀相馬産白濁釉碗・鉄釉徳利・船釉徳利・白濁釉仏飯器、堤産鉄釉小甕（第17図3）・なまこ釉大甕・鉄釉焙烙、岸窓系擂鉢（第17図4）、產地不明灰釉片口鉢がある。磁器には肥前産染付蓋・染付碗（第17図2）・染付小环・染付筒型碗、瀬戸美濃産染付皿・染付型押皿・染付碗・染付小环（型打成形）・白磁角小皿（第17図1）、肥前産とみられる青磁鉄絵花瓶、瀬戸美濃産とみられる銅版刷色絵小皿、地方窯とみられる染付爛徳利・染付変形皿、產地不明染付急須がある。瓦質土器には在地産火消壺蓋・火鉢とみられるものがある。瓦はすべて焼し瓦で、菊丸瓦・棧瓦がある。

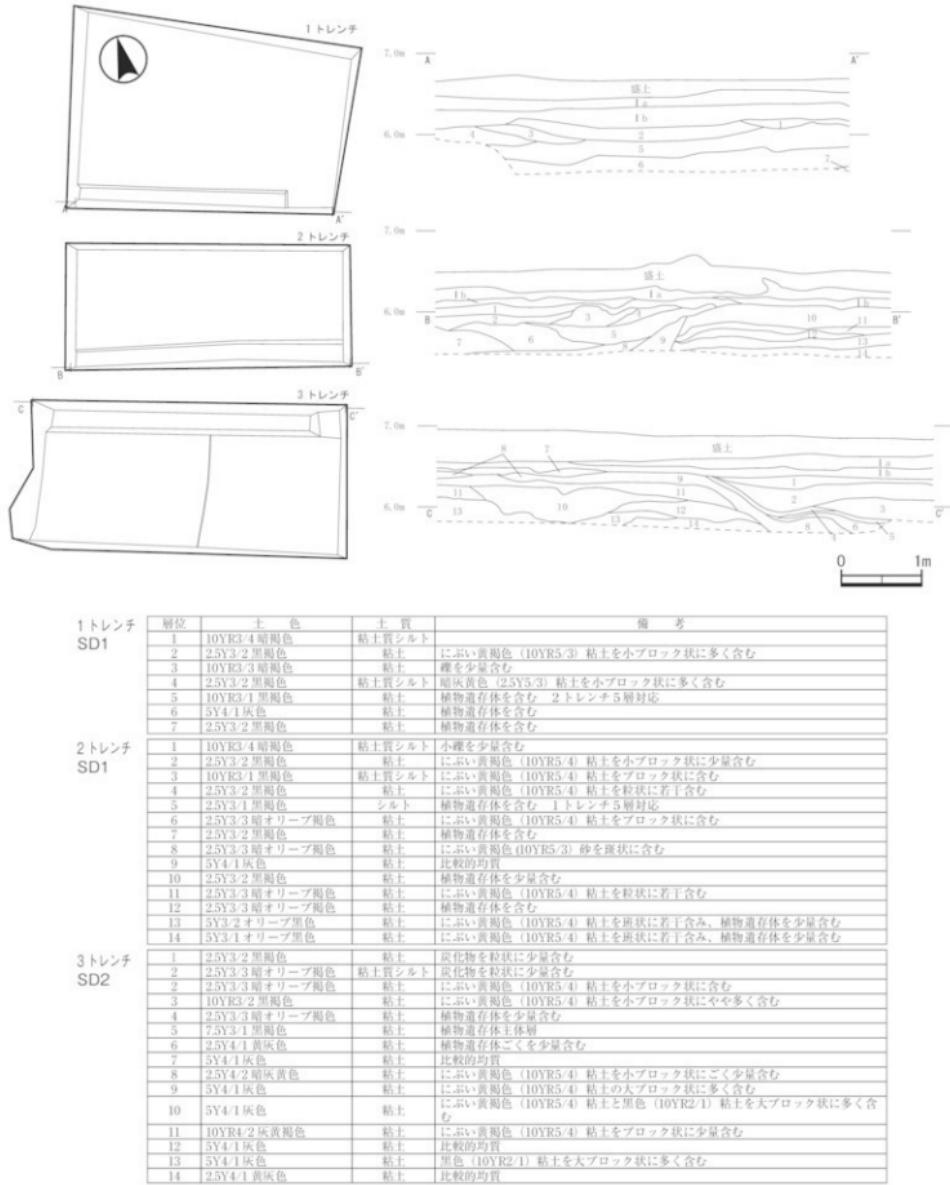
(2) 3トレーナー

対象地の中央部に位置する本調査区では、南北方向とみられる溝跡1条を検出した。位置や規模、堆積土の特徴などから、第15次調査で検出したSD2溝跡と一連の遺構と考えられる。遺物は基本層Ⅰ層およびSD2から近現代を含む陶器、磁器、瓦、石製品があり、ガラス瓶なども混入している。

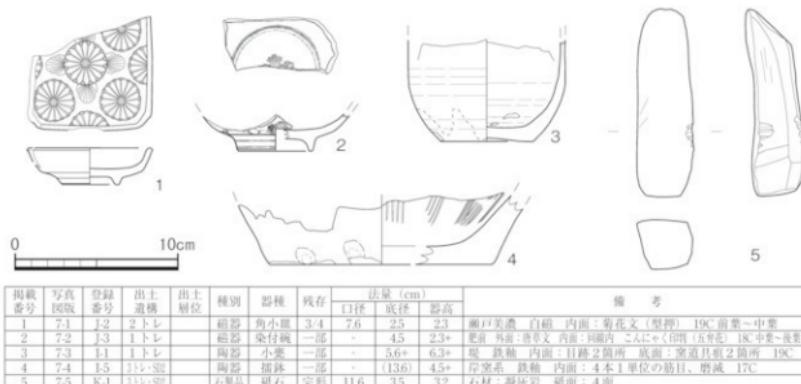
SD2 溝跡

調査区全城がSD2溝跡内に位置する。堆積土の状況から、南北方向とみられる溝跡である。現畑耕作土である基本層Ⅰ層に覆われる。部分的な調査ではあるが、規模は上端幅6.10m以上で、基本層Ⅰ層下面からの深さは0.70m以上である。断面形は不明である。堆積土は14層を確認した。上層は窪地状の地形に堆積した植物遺存体を含む黒褐色などの粘土質シルトなどである。下層は基本層をブロック状に含む人為的埋土と比較的均質な暗褐色などの粘土である。

遺物は陶器、磁器、石製品、瓦、ガラス瓶などが出土している。陶器には、大堀相馬産灰釉碗・灰釉仏飯器・白濁釉端反碗・白濁釉片口・小野相馬産灰釉皿・岸窓系鉄釉擂鉢、磁器には肥前産染付皿・瀬戸美濃産染付碗・染付



第16図 第16次調査1～3トレンチ平面・断面図



第17図 第16次調査出土遺物

端反碗・色絵碗がある。石製品には砾石（第17図5）がある。瓦は焼し瓦で、棟瓦がある。

（3）4トレンチ

対象地西部に位置する本調査区では、掘削深度の都合から、基本層II層上面で遺構検出作業を行った。調査区南半部は擾乱の影響を受けている。本調査区では、ピット1基を調査区北壁で確認した。平面形および規模は不明であるが、東西0.25m、深さ約0.35mである。堆積土は単層で、基本層II層起源とみられる黒色の粘土をブロック状に含む褐色の粘土である。柱痕跡は確認されなかった。遺物は出土していない。

5.まとめ

対象地は、沖野城跡の中央部西寄りに位置する。障壁を伴う南北方向の大規模な溝跡を検出した第5次調査区の南西側に隣接し、南北方向の溝跡を検出した第2次調査区の南側にあたるなど、周辺では沖野城跡に関わるとみられる遺構が多く検出されている。

①宅地造成に伴う新設道路工事に伴う第15次調査では、溝跡3条、性格不明遺構1基、ピット5基を検出した。また、第16次調査は、住宅建築箇所を調査対象として、沖野城跡に関わる可能性がある南北方向の溝跡の検出が想定された地点4箇所で調査を実施し、溝跡3条、ピット1基を検出した。

②対象地東部および中央部で検出したSD1溝跡とSD2溝跡は、位置や規模から、対象地北側で行われた平成4年度第2次調査で検出した2条の溝跡とそれぞれ一連の遺構である可能性がある。SD1溝跡は、今回の調査地点の南に位置する平成23年度第8次調査で検出した溝跡と同一の遺構であった場合、第2次調査で検出した部分を含めると南北方向の総長が200.0m以上となり、大規模な区画施設と推定される。SD2溝跡は、第15次調査と第16次調査の成果を併せると、南北方向に総長30.0m以上と推定される。北側延長線上には、平成4年度第2次調査で検出した溝跡が位置し、SD1溝跡と近似した総長におよぶ可能性がある。これらの溝跡を検出した地点は、昭和14年頃に作図された『六郷村沖野館屋敷割図』で、「元堀」と記載された南北に細長い水田にあたり、いずれの溝跡も堆積土の状況や出土遺物から、ごく近年まで窪地状に残存していたものと考えられる。また、「元堀」は明治時代中期の地籍図では、南北方向に細長い畑地とそれを挟む水田に細分されて記載されている。SD1溝跡とSD2溝跡は、それぞれがこの細長い水田に対応している可能性がある。

③第15次調査2トレンチで検出したSD3溝跡は、第16次調査3トレンチの調査では検出されなかった。重複す

るSD2溝跡に上部を壊されている可能性がある。SD3溝跡は、今回の調査地点南側にあたる平成23年度第9次調査で検出した溝跡と位置や規模、断面形状、堆積土の状況、基本層との関係が類似し、同一の溝跡とみられる。

④第15次調査の成果から、SD1溝跡およびSD2溝跡は基本層II層上面から掘り込まれ、SD3溝跡は基本層II層に覆われることが判明している。このことから、SD1溝跡およびSD2溝跡とSD3溝跡には、基本層II層を挟んで時期差が存在することは明らかである。これらの溝跡が沖野城跡に伴う遺構の場合、区画施設には何時期かの変遷があることが想定される。

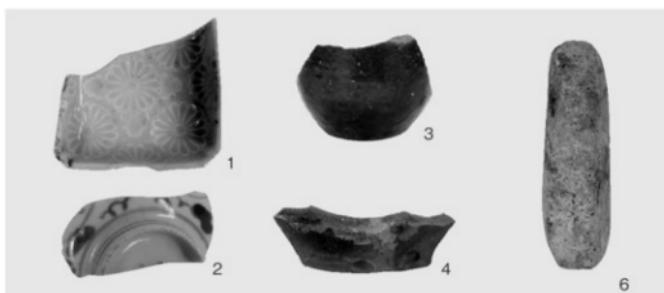
⑤出土遺物には、土器、陶器、磁器、瓦、石製品、木製品がある。主体は陶磁器類で、SD1溝跡およびSD2溝跡からの出土が大半を占める。肥前産、瀬戸美濃産の磁器、堤産、大堀相馬産の陶器を組み合わせがみられ、高級品や嗜好品と比較して、日用雑器が主体である。これらの年代をみると、17世紀代から20世紀代にわたり、中心となるのは18世紀後半から19世紀末にかけてのものである。また、菊丸瓦を含む瓦類が数点出土し、荷札とみられる木製品も出土している。これら出土品の性格や出土状況から、近世末から明治時代にかけて、対象地の周辺に、有力農民層などの居住者が所有する屋敷地の存在が想定される。一方、SD1溝跡およびSD2溝跡の出土遺物には、ガラス瓶をはじめ、近現代に属するものも含まれている。したがって、SD1溝跡およびSD2溝跡が、近世初頭と推定される沖野城廃絶後も、近年まで窪地状の地表顕在遺構として残存していたと考えられる。

第15次調査でSD2溝跡から出土した磁器に色絵徳利がある。形状から徳利とみられる。絵は上絵付けで上下2段に人物、家、樹木、菱形文様が描かれている。これは仙台市博物館所蔵の「奈良屋徳利」に非常に類似し、同一文様の可能性もある。奈良屋は、仙台城下国分町の呉服屋で、京都を本店とし、創業が近世初期に遡ると言われている。この奈良屋が正月2日の初売りの際、得意先に配ったとされるものが、前述した博物館所蔵の徳利である。今回の調査で出土した徳利の産地は明らかではないが、絵の特徴から奈良絵の可能性がある。奈良絵が描かれたものは、現在のところ、奈良県に所在する赤膚焼のみが知られ、年代は、生産された窯の操業時期から、19世紀前葉の可能性がある。今回の調査地点は、当該地で肝入を務めたとされる有力者の所有地内もしくは隣接する土地であり、赤膚焼などの可能性がある色絵徳利が出土したことは、当時の流通や販路、客層などの一端が明らかとなる貴重な事例である。

引用・参考文献 仙台市教育委員会 1986「沖野城跡」『年報7』仙台市文化財調査報告書第94集

仙台市教育委員会 1993「沖野城跡」『年報14』仙台市文化財調査報告書第176集

菅野正道 2010「仙台城下『町人列伝』⑪」「飛翔」仙台商工会議所月報 No.286



写真図版7 第16次調査出土遺物



1. 1 トレンチ調査区全景（西から）



2. 1 トレンチ南壁断面（北東から）



3. 2 トレンチ調査区全景（北西から）



4. 2 トレンチ南壁断面（北東から）



5. 3 トレンチ調査区全景（東から）



6. 3 トレンチ北壁断面（南東から）



7. 4 トレンチ調査区全景（西から）



8. 4 トレンチ北壁断面（南東から）

第2節 南小泉遺跡

I. 遺跡の概要

南小泉遺跡は、仙台市の東部、JR 仙台駅から東南約3.5kmの地点に位置する。広瀬川と名取川の合流地点より北へ約3kmの場所にあり、「宮城野海岸平野」と呼ばれる沖積平野の自然堤防上に立地する。標高は、遺跡西側で約13m、東側で約7.5mで、緩やかに東側に向かって低くなっている。遺跡の範囲は東西約2km、南北約1kmに及んでおり、仙台市内でも最大級の規模を持つ遺跡である。遺跡内には遠見塚古墳を含み、また、西部では若林城跡、北西部で義種園遺跡と接している。周辺には法領塚古墳、蛇塚古墳、猫塚古墳などが分布している。本遺跡は、これまでに71次の調査が実施されており、绳文時代から近世にかけての複合遺跡であることが判明している。特に、古墳時代中期（南小泉式ないし引田式期）では、60軒以上の堅穴住居跡の検出例があり、カマドが設けられた住居跡の他、カマドを持たない住居跡も発見されている。

II. 第72次調査

1. 調査要項

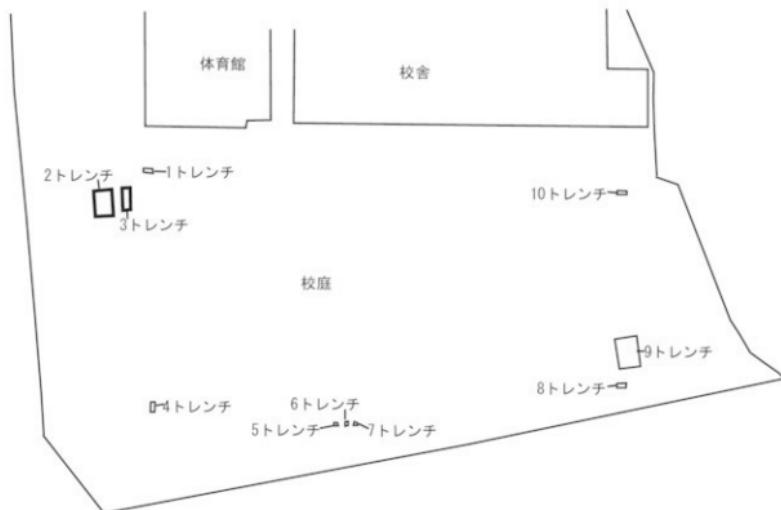
遺跡名	南小泉遺跡（宮城県遺跡登録番号 01021）
調査地点	仙台市若林区遠見塚一丁目 22-1 地内
調査期間	平成25年10月23日～12月6日
調査対象面積	153.60m ²
調査面積	103m ² (1トレンチ2.6m ² 、2トレンチ37m ² 、3トレンチ17m ² 、4トレンチ2.6m ² 5トレンチ2m ² 、6トレンチ2m ² 7トレンチ2m ² 、8トレンチ2.6m ² 、9トレンチ33m ² 10トレンチ2.6m ²)
調査原因	仙台市立遠見塚小学校校庭整備事業
担当職員	文化財教諭 千葉悟 文化財教諭 千葉靖彦

2. 調査に至る経過と調査方法

調査対象地は遺跡の中央部に位置し、遠見塚古墳の南西側にあたる（第11図参照）。今回の調査は、平成25年7月11日付で提出された、「埋蔵文化財発掘のかかわりについて（協議）」（平成25年8月27日付H25教生文第251-11号で伝達）に基づき、平成25年10月23日に着手した。10箇所の施設の設置範囲内にそれぞれの調査区を設定し、重機により盛土および基本層Ⅰ層～Ⅳ層を除去し、調査を開始した。遺構検出作業は基本層V層上面で行い、9トレンチで遺構を確認した。また、1トレンチからは遺構面の確認はできなかつたが、石庭丁が1点出土した。トレンチごとに調査終了後埋戻しを行い、12月6日に調査を終了した。

3. 基本層序

- I層：10YR3/2 黒褐色シルト。厚さ15cm～20cmである。
- II層：10YR3/3 暗褐色粘土質シルト。厚さ10cm～15cmである。径約5mm～30mmのV層ブロックを多量、炭化物を少量含む。
- III層：10YR5/4 にぶい黄褐色粘土質シルト。厚さ10cm～25cmである。
- IV層：10YR5/4 黑褐色粘土質シルト。厚さ約25cmである。径約10mm～20mmのV層ブロックを少量含む。
- V層：10YR6/6 明黄褐色粘土質シルト。遺構検出面である。



第18図 第72調査区設定図 (1/1000)

4. 発見遺構と出土遺物

9トレンチのV層上面で溝跡1条、土坑6基、ピット3基を検出した。

(1) 溝跡

SD1 溝跡

調査区北側で検出された東西方向に延びる溝跡である。確認した長さは約3.6mで、北壁がは調査区外のため幅は不明である。SK5を切っている。堆積土は暗褐色粘土質シルトである。堆積土中より土師器片が出土している。

(2) 土坑

SK1 土坑

調査区北東側で検出した楕円形の土坑である。大きさは75×55cm、深さ約10cm、断面形は浅い「U」字形で底面はほぼ平坦である。堆積土は黒褐色粘土質シルトであり、堆積土中から土師器片が出土している。

SK2 土坑

調査区南東側で検出した楕円形の土坑である。大きさは70×60cm、深さ約5~6cmである。断面形は逆台形で底面は中央がやや窪む。堆積土はV層土をブロック状に含む黒褐色粘土質シルトであり、堆積土中から土師器片が出土している。

SK3 土坑

調査区中央で検出した楕円形の土坑である。大きさは70×60cm、深さ約20cmである。断面形は逆台形で底面はほぼ平坦である。堆積土は、黒褐色、褐灰色の粘土質シルトであり4層に分層できる。遺物は検出されていない。

SK4 土坑

調査区北東側で検出した楕円形の土坑である。大きさは85×80cm、深さ約20cmである。断面形は逆台形で底面は南側が低い。堆積土は黒褐色粘土質シルトであり、堆積土中から土師器片が出土している。

SK5 土坑

調査区北端で検出した。直径約40cmの円形で深さは約10cmである。断面形は「U」字形で、底面はほぼ平坦である。SK6を切っており、SD1に切られている。堆積土は黒褐色シルトである。

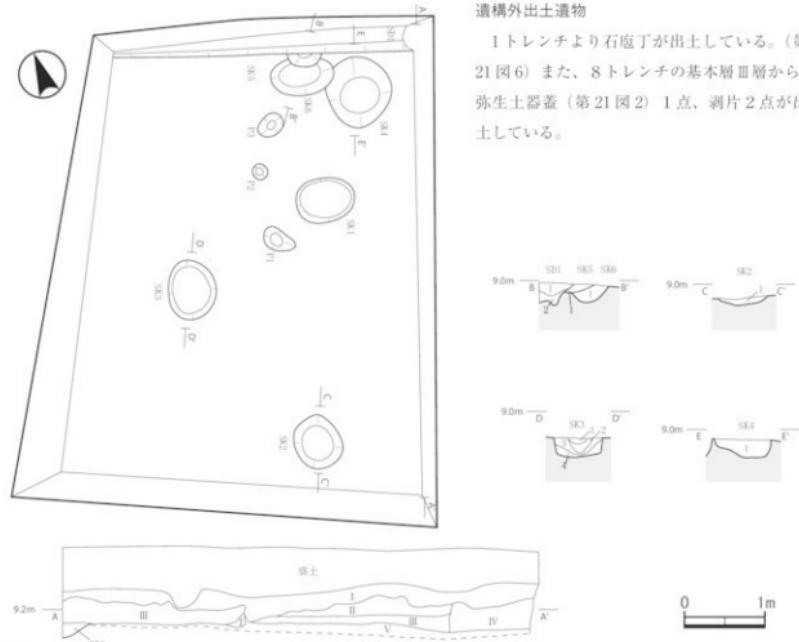
SK6 土坑

調査区北端で検出した。大きさは50×80cmの楕円形で深さは約20cmである。断面形は「U」字形で底面はほぼ平坦である。SK5に切られている。堆積土は灰黄褐色砂質シルトである。

ピット

調査区北側で3基のピットを確認した。堆積土は黒褐色粘土質シルトである。柱痕跡を確認できたものはない。P1より約20点の土師器片が出土した。

國化できたのは土師器壺（第21図3）、甕（第21図4）、瓶（第21図5）である。P2から土師器壺13点、P3から弥生土器（第21図1）1点、土師器壺1点が出土している。いずれも小破片が主体で、国示できるものは少ない。



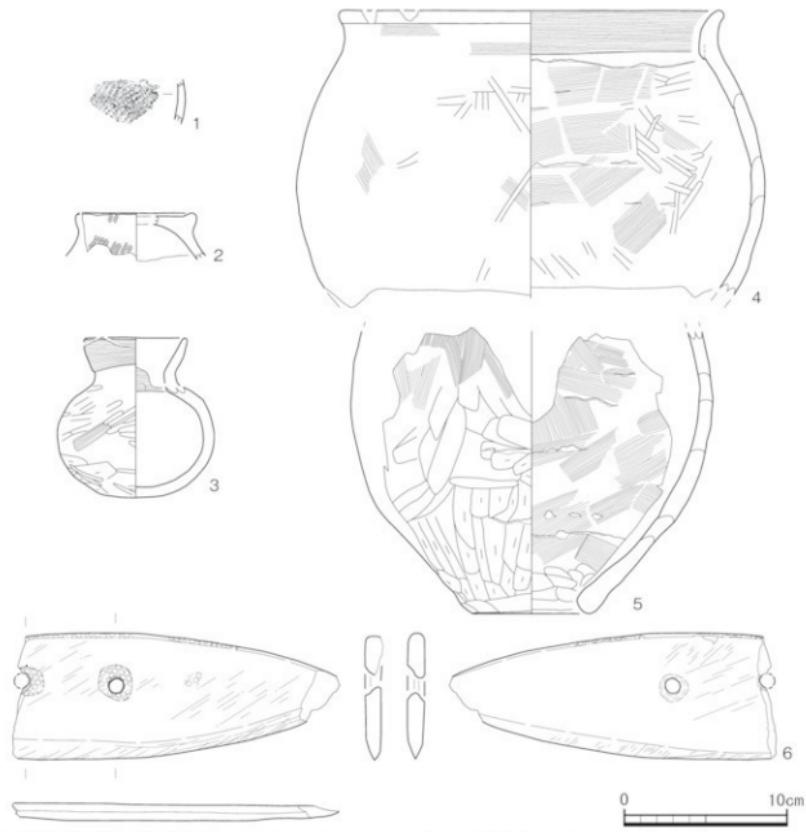
SD1

SK3

SK7

層位	土 色	土 質	備 考
1	10YR3/3 黒褐色	粘土質シルト	炭化物を粒状にごく少量含む
2	10YR3/3 黒褐色	粘土質シルト	明黄褐色 (10YR6/6) 粘土質シルトをブロック状に含む
1	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	炭化物を粒状にごく少量含む
2	10YR5/1 地灰色	粘土質シルト	
3	10YR3/3 黒褐色	粘土質シルト	黄褐色 (25YR5/3) シルトをブロック状に多く含み、炭化物を粒状にごく少量含む
4	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	明黄褐色 (10YR6/6) 粘土質シルトをブロック状にごく少量含む
1	10YR3/4 黑褐色	粘土質シルト	明黄褐色 (10YR6/6) 粘土質シルトをブロック状にごく少量含む
層位	土 色	土 質	備 考
1	10YR4/1 地灰色	粘土質シルト	炭化物を粒状に少量含む

第19図 9トレンチ平面・断面図



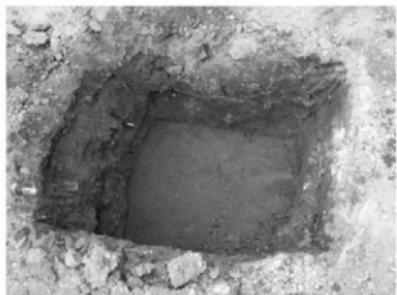
掲載番号	写真 図版	登録 番号	出土 遺構	出土 層位	種別	器種	残存	法量 (cm)			備考
								口徑	底径	器高	
1	11-2	B-1		P3	弥生土器	甌	一部	-	-	-	LR 織文
2	11-3	B-2	8トレン	圓筒 弥生土器	甌	一部	(7.4)	-	2.9+		LR 織文
3	11-4	C-1		P1	土師器	甌	(は)ズ穴形	(6.3)	-	9.8	
4	11-5	C-2		P1	土師器	甌	土平1.3	(13.5)	-	18.2+	
5	11-6	C-3		P1	土師器	甌	下手部	-	(7.2)	17.3+	

掲載番号	写真 図版	登録 番号	出土 遺構	出土 層位	種別	器種	残存	法量 (cm)			備考
								長さ	幅	厚さ	
6	11-7	K-1	1トレン	通鑿	石製品	石硁丁	3.5	23.6+	5.2	0.7	石材: 粘板岩 縦孔2箇所穿孔 (厚 0.6cm)

第20図 第72次調査出土遺物

5.まとめ

調査地点は、南小泉遺跡の中央、遠見塚古墳の西に位置する。対象地区周辺では、これまでの調査により古墳時代中期を中心とした竪穴住居跡・溝跡・土坑などが検出されている。今回の調査では、9トレンチより溝跡1条、土坑6基、ビット3基を検出し、土師器が平箱2箱出土した。これらの土器類は古墳時代中期の南小泉式期を中心とする土器群と考えられる。また、弥生時代の水田耕作に関わる遺物として、1トレンチから石硁丁が1点出土した。



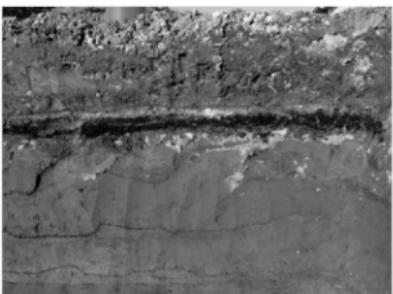
1. 1 レンチ調査区全景



2. 1 レンチ石包丁出土状況



3. 3 レンチ調査区全景



4. 3 レンチ東壁断面



5. 10 レンチ全景

写真図版 9 第 72 次調査 (1)



5. 9トレンチ完掘状況



6. 9トレンチSD1溝跡断面（東から）



7. 9トレンチSK3土坑断面（西から）

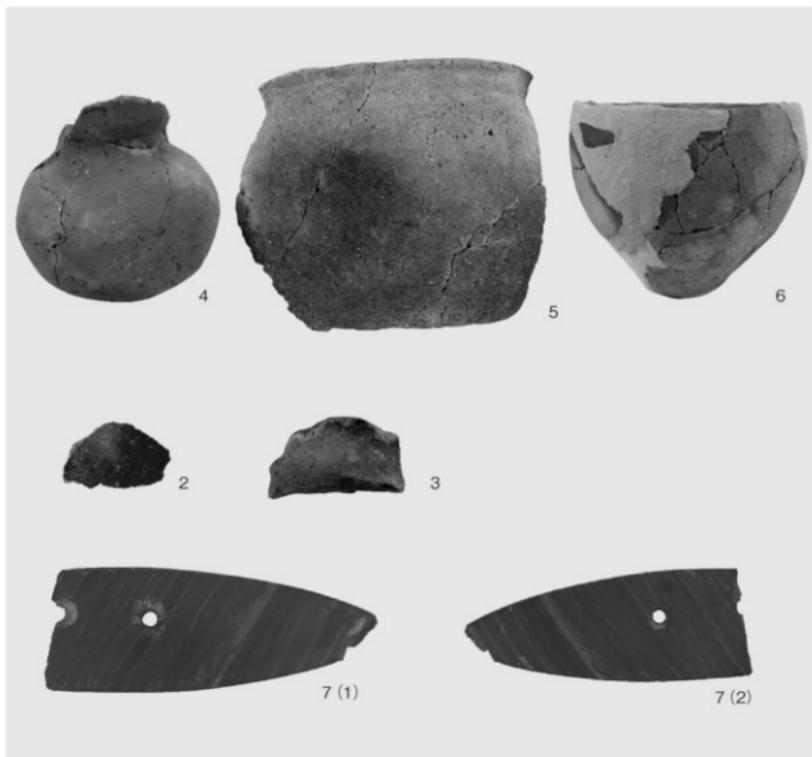


8. 9トレンチP1土器出土状況



9. 9トレンチ東壁断面

写真図版 10 第72次調査（2）



写真図版 11 第 72 次調査出土遺物

第3節 荒井広瀬遺跡

I. 遺跡の概要

荒井広瀬遺跡は仙台市若林区荒井字広瀬に所在する。仙台駅から南東約6km、仙台東部道路の仙台東インターチェンジから南西約1kmに位置する。仙台平野中部、東流する名取川とその支流の広瀬川によって形成された、自然堤防や後背湿地に遺跡は立地している。遺跡の範囲は南北約150m、東西約80mで、標高は約3.0～4.0mである。現在の海岸線からは約4km内陸側に位置する。荒井広瀬遺跡の東隣には、津波堆積物に覆われた弥生時代の水田跡が検出された杏形遺跡がある。

荒井広瀬遺跡は、平成22年に行われた杏形遺跡隣接地における試掘・確認調査の際に、自然流路跡や溝跡が検出され、弥生時代中期から古墳時代前期・中期にかけての遺物が出土したことから、平成24年10月12日に新規登録された遺跡である。

II. 第1次調査

1. 調査要項

遺跡名	荒井広瀬遺跡（宮城県遺跡登録番号 01570）
調査地点	仙台市若林区荒井字広瀬122-1・123-1の一部
調査期間	平成25年5月13日～7月5日
調査対象面積	270m ²
調査面積	270m ²
調査原因	仙台市荒井東土地区画整理事業（6m道路建設）
調査主体	仙台市教育委員会
調査担当	仙台市教育局生涯学習部文化財課調査調整係



番号	道筋名	種別	立地	時代
1	荒井南道跡	水田路	後背湿地	弥生
2	荒井北画道跡	河川路	後背湿地	弥生・古墳
3	杏形道跡	生産道路	自然堤防	弥生・古墳・古代・中世
4	荒井船跡	城館跡	自然堤防	中世
5	荒井畠中東道跡	盆地地	自然堤防	古墳
6	荒井畠中西道跡	散布地	自然堤防	古墳・古代・中世
7	押口道跡	河川路・水田路・盆地地	自然堤防・後背湿地	古墳・古墳・古代・中世・近世
8	高尾赤道跡	散布地	自然堤防	古墳・古代
9	長音城跡	城館跡	自然堤防	中世
10	仙台東部塙里跡	塙里跡	後背湿地	古代
11	中在家南道跡	上部柏葉・土坑墓・方形則溝墓・河川路・水田路	自然堤防・後背湿地	弥生・古墳・平安・中世・近世
12	中在家道跡	盆地地	自然堤防	平安
13	南小京道跡	集落跡・戸敷跡	自然堤防	弥生・古墳・古代・中世・近世
14	遠見塙古墳	前方後円墳	自然堤防	古墳

第21図 荒井広瀬遺跡と周辺の遺跡

担当職員 主査 平間亮輔 主事 小泉博明、黒田智章 文化財教諭 佐藤高陽、早坂純一、千葉悟、千葉靖彦

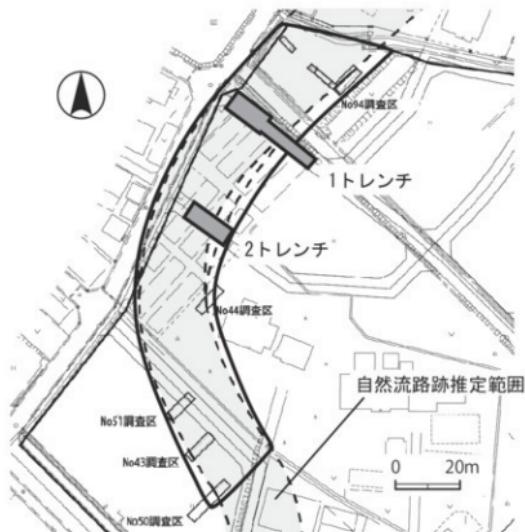
調査協力 仙台市荒井東土地区画整理組合 五洋建設株式会社 松本秀明（東北学院大学）
板垣泰之（多賀城市埋蔵文化財調査センター）

2. 調査地点と調査経過

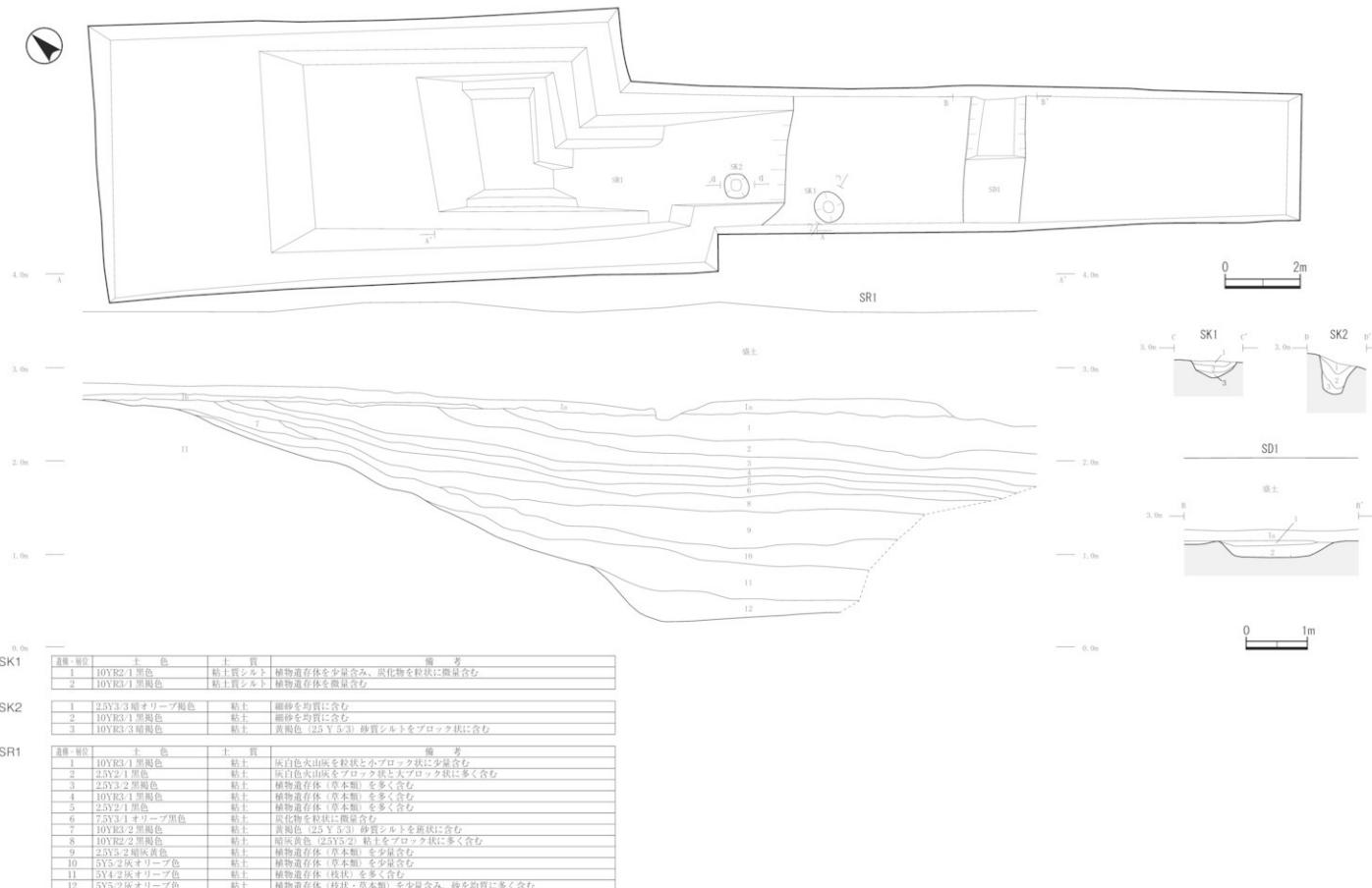
今回の調査は、平成25年5月1日付で提出された、仙台市荒井東土地区画整理事業の道路建設に係る「埋蔵文化財の取り扱いについて（協議）」（H25教生文第124-23号）に基づき、平成25年5月13日～7月5日に実施した。対象地は遺跡の北部に位置する。調査区は南北2箇所において、申請者側が設定した建築範囲内に設定した。

まず北側の1トレンチでは、重機により盛土および基本層1層を掘削した後、II層（平成23年度試掘調査結果の基本層7a層に対応）上面において自然流路跡・溝跡・土坑を検出した。6月3日から南側の2トレンチの調査に入り、重機により盛土および基本層1層を掘削した後、II層上面において自然流路跡・溝跡を検出した。溝跡については、底面から地割れ状の痕跡を検出したが、地震痕跡の可能性があるため、6月6日に東北学院大学の松本秀明氏による調査が行われた。その結果、地震による地割れ跡であるとの見解を得た。また、埋設管設置箇所について、地割れ跡にかかる部分を対象にサブトレンチを設定し、地割れ跡の深度等を確認した。7月1日には、地割れ跡部分の土層剥ぎ取り作業を断面と平面で行なった。

なお、5月31日には仙台市立七郷小学校の4年生・6年生（計約300人）による見学会が実施され、1トレンチの調査状況等について文化財課職員が説明を行った。6月26日には2トレンチ検出の地震痕跡について報道発表を行い、6月30日には一般向けの見学会を実施した。



第22図 第1次調査区設定図



第23図 1 トレンチ平面・断面図

3. 基本層序

調査区内の盛土は、1トレンチが約0.8m、2トレンチが約0.4mで、盛土以下の基本層は3層確認した。

I a層 黒褐色（10YR3/1）粘土質シルト 現代の水田耕作土

I b層 黒褐色（10YR3/1）粘土質シルト 現代の水田耕作土（I aに比べしまり強い）

II層 黄褐色（25Y5/3）砂質シルト 植物遺存体を少量含む。下部はグライ化。

III層 オリーブ灰色（25GY5/1）砂 グライ化。

4. 発見遺構と出土遺物

今回の調査では、自然流路跡1条、溝跡2条、土坑2基、および地割れ跡を検出した。遺物は、主に自然流路跡から土師器や木製品、2トレンチ検出の溝跡からは弥生土器が出土している。

以下に調査区ごとの概要を記述する。

1 トレンチ

自然流路跡1条、溝跡1条、土坑2基を検出した。

(1) 自然流路跡

SR1 自然流路跡

調査区西部で検出した自然流路跡である。規模は検出長約6.7mで、幅は約18.0m以上、検出面からの深さは約2.2mである。断面は逆台形を呈するとみられるが、西側における底面からの立ち上がりの状況は、調査区範囲の制約のため確認できていない。堆積土は12層に細別され、植物遺存体を含む泥炭質の黒褐色粘土が主体を占める。底面ではオリーブ灰色の砂からなる基本層Ⅲ層を確認している。遺物は、確認面から土師器壺破片20点、3層から土師器壺破片1点・壺破片42点・須恵器壺破片1点・木製盤1点、5層から土師器壺破片6点、6層から土師器高环破片4点・壺破片22点・壺破片1点、8層から土師器壺破片25点・台付壺破片1点が出土している。このうち、6点を図示した。第27図12は壺の体部、13は台付壺の台部、14～16は高環の脚部である。これらは器形や調整の特徴から、古墳時代中期の土器（南小泉式～引田式）と考えられる。

(2) 溝跡

SD1 溝跡

調査区東部で検出した南北方向に延びる溝跡である。他の遺構との重複は無い。調査区外南北へ延びており、検出長は3.4mである。上端幅1.40～1.65m、下端幅0.8～1.0mで、検出面からの深さは約0.2mである。断面形は緩やかな弧状を呈し、堆積土は2層に細別され、黒色および黒褐色の粘土質シルトである。いずれも自然堆積土である。遺物は出土していない。

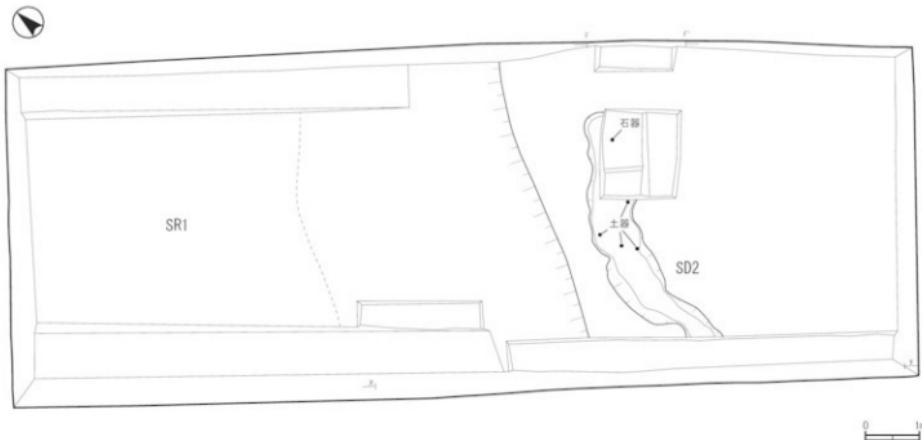
(3) 土坑

SK1 土坑

調査区中央部南壁際で検出した土坑である。他の遺構との重複は無い。平面形は円形を呈する。規模は径約0.8mで、深さ約0.28mである。断面形はU字状を呈する。堆積土は3層に細別され、細砂を均質に含む黒褐色および暗オリーブ褐色の粘土と、基本層Ⅱ層ブロックを含む灰色粘土である。いずれも自然堆積土である。遺物は土器細片が1点出土したのみである。

SK2 土坑

調査区中央部で検出した土坑である。SR1自然流路跡と重複し、これより新しい。平面形は不整円形を呈する。規模は径約0.6mで、深さ約0.5mである。断面形は逆台形を呈する。堆積土は3層に細別され、基本層Ⅱ層ブロックを含む暗褐色の粘土質シルトと、暗褐色および黄灰色の粘土である。いずれも自然堆積土である。遺物は出土していない。



3.0m

3.0m

3.0m

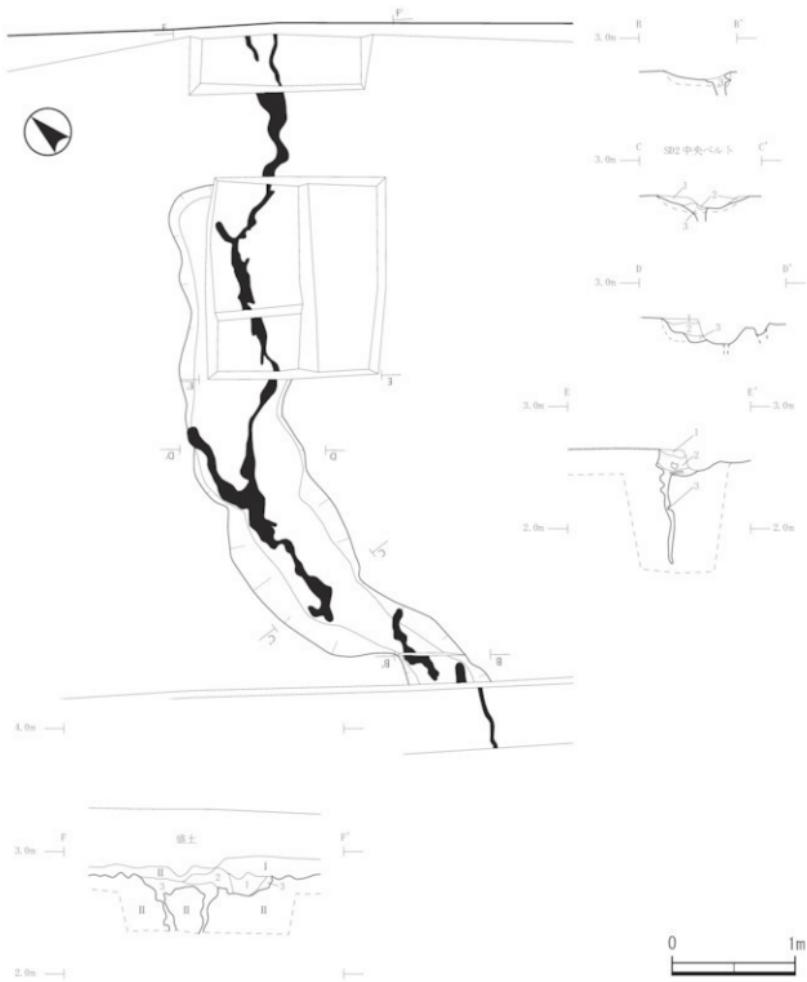
SD2

遺構・部位	土色	土質	備考
1	25Y 5/3 黄褐色	砂質シルト	基本層と別土層（地山崩落土）
2	10YR3/1 黑褐色	粘土質シルト	細線を多く含む
3	25Y3/1 黑褐色	粘土	基本層下部を小ブロック状とブロック状に多く含む（地山崩落土）

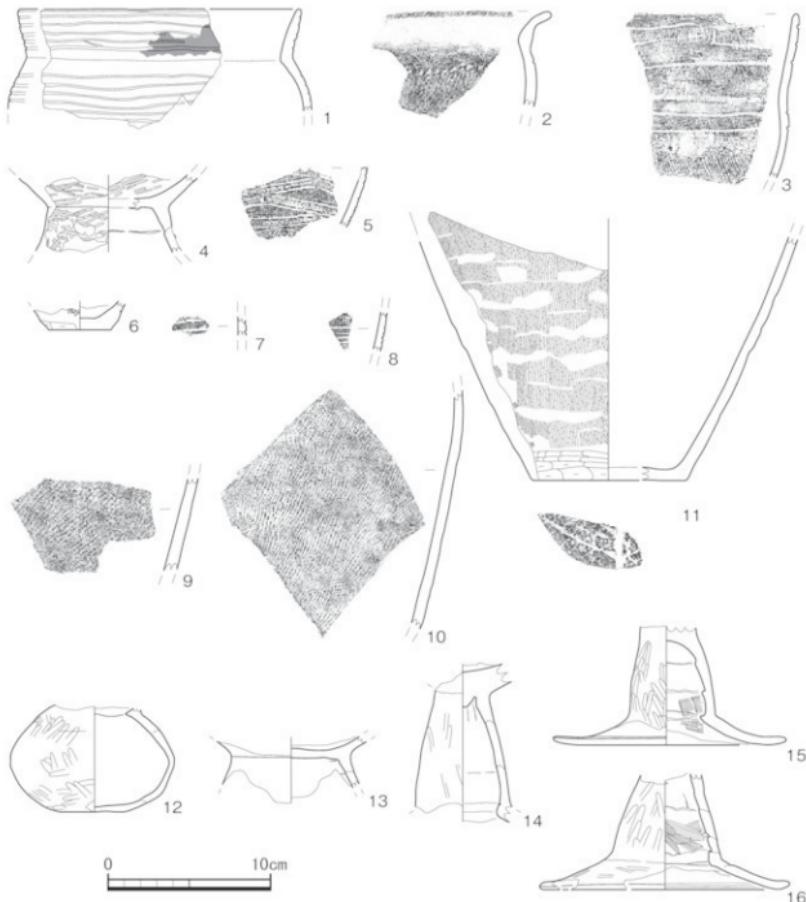
SR1

遺構・部位	土色	土質	備考
1	10YR2/1 黑色	粘土	小粒を微量含む（1トレンチ SR 1 1層に対応）
2	10YR2/1 黑色	粘土	灰白色火山灰をブロック状に含み、植物遺存体を多く含む（1トレンチ SR の2層に対応）
3	10YR3/2 黑褐色	粘土	植物遺存体（草本類）を多く含む（1トレンチ SR 1 3層に対応）
4	10YR3/1 黑褐色	粘土	植物遺存体（草本類）を多く含む（1トレンチ SR 1 4層に対応）
5	10YR2/1 黑色	粘土	植物遺存体（草本類）を多く含む（1トレンチ SR 1 5層に対応）
6	10YR2/1 黑色	粘土	植物遺存体（草本類）を多く含み、炭化物を粒状に微量含む（1トレンチ SR の6層に対応）
7	10YR2/1 黑色	粘土	植物遺存体（草本類）を多く含む
8	10YR2/2 黑褐色	粘土	植物遺存体（草本類）を多く含む（1トレンチ SR 1 8層に対応）
9	25Y4/1 黄灰色	粘土質粘土	炭化物を粒状にごく少量含む
10	25Y3/1 黑褐色	砂	黄褐色（25Y5/3）砂質シルトを粒状に少量含む 津液用植物
11	25Y5/3 黑褐色	砂質シルト	炭化物を粒状に微量含む

第24図 2トレンチ平面・断面図



第25図 地震痕跡平面・断面図



掲載番号	写真 図版	登録 番号	出土 道構	出土 部位	種別	器種	残存	法量(cm)			調整			備考
								口径	底径	基高	外面	内面	底面	
1	15-1 B-1			2刷 兔生土器	素	一部	(17.2)	-	-	7.4	-	-	-	沈綱文 内外面：炭化物付着
2	15-2 B-2			2刷 兔生土器	素	一部	-	-	-	-	-	-	-	LR綱文(付加条)列点文
3	15-3 B-9	SR1		8刷 兔生土器	素	一部	-	-	-	-	-	-	-	綱繩文
4	15-4 B-3	SD2		2刷 兔生土器	高环	一部	-	-	4.8	+ ハラミガキ	ハラミガキ	-	-	
5	15-5 B-11	SD2		2刷 兔生土器	鉢	一部	-	-	-	-	-	-	-	坂根磨削変形工字文
6	15-6 B-10	SR1		8刷 兔生土器	素	一部	-	-	-	3.8	-	-	-	縦文、沈綱文
7	15-7 B-7	SD2		2刷 兔生土器	素か	一部	-	-	-	-	-	-	-	平行沈綱文
8	15-8 B-4	SD2		2刷 兔生土器	素か	一部	-	-	-	-	-	-	-	綱繩文、沈綱文
9	15-9 B-5	SD2		2刷 兔生土器	素	一部	-	-	-	-	-	-	-	LR綱文(付加条)
10	15-10 B-6	SD2		2刷 兔生土器	素	一部	-	-	-	-	-	-	-	LR綱文
11	15-11 B-8	SD2		3刷 兔生土器	素	一部	-	(9.4)	-	16.1	+ ハラミガキ	-	-	本集瓶 出田綱文、擬綱文、LR綱文
12	15-12 C-1	SR1		8刷 土師器	素	一部	-	3.8	-	7.2	+ ハラミガキ	-	-	No.2
13	15-13 C-5	SR1		8刷 土師器	台付类	一部	-	-	-	-	-	-	-	ハラチテ
14	15-14 C-3	SR1		6刷 土師器	高环	一部	-	-	9.7	+ ハラミガキ	-	-	-	No.3
15	15-15 C-4	SR1		6刷 土師器	高环	一部	-	(14.4)	7.4	+ ハラミガキ	ハラチテ	-	-	No.5
16	15-16 C-2	SR1		土師器	高环	一部	-	(15.3)	7.0	-	-	-	-	

第26図 第1次調査出土遺物(1)

2 トレンチ

自然流路跡 1 条、溝跡 1 条、溝跡底面内から地割れ跡を検出した。

(1) 自然流路跡

SR1 自然流路跡

調査区西部で検出した自然流路跡である。1 トレンチで検出した SR1 自然流路跡の南側の延伸方向に位置するため、同一の流路跡であると考えられる。検出長は 5.7m 以上、幅は 10.5m 以上、検出面からの深さは 0.8m 以上である。底面までの調査は行っていない。堆積土は 11 層に細別され、植物遺存体を含む泥炭質の黒褐色粘土が主体を占める。また、10 層は砂層で、松本氏により津波堆積物との見解を得ている。出土遺物は、堆積土 5 層から木製の田下駄 1 点・紋状岩製の石鏡 1 点、8 層から古墳時代の土師器の破片 1 点と弥生土器の壺破片 1 点・鉢底部または蓋の破片 1 点が出土している。第 27 図 3 は壺の口縁部から体部の破片で、地文の植物茎回転文に四角文が施され、四角文の内部は繩文を施し、それ以外は磨り消している。第 29 図は田下駄で、平面形が隅丸方形を呈する。表面に足跡があり、紐通しの孔が確認できる。裏面には滑り止めと考えられる菱形の突起が 4 つ作り出されている。このような、足跡や菱形突起を有する田下駄は、秋田県男鹿市飯森遺跡（8～9世紀）・五城目町中谷地遺跡（9世紀前半頃）・福島県会津若松市門田条里制跡（9～10世紀後半）に類例がある。本遺跡出土資料に関しては、年代が決定できるような土器が伴わないと詳細な年代は不明だが、出土層位や形態的特徴から奈良・平安時代のものと考えられる。

(2) 溝跡

SD2 溝跡

調査区東部で検出した北東から南西方向にやや屈曲しながら延びる溝跡である。検出長約 47m、幅約 0.4～0.9m である。断面形はやや凸凹をもつが皿状を呈する。底面には地割れ状痕跡を検出した。堆積土は 3 層に細別され、1 層は基本層 II 層主体の黄褐色砂質シルト、2 層は細砂が多く含む黒褐色粘土、3 層は II 層ブロックを含む黒褐色粘土質シルトである。3 層は溝の自然堆積土とみられるが、溝跡底部で検出された地割れ跡の内部にまで落ち込んでいる。2 層に含まれる細砂に関しては、東北学院大学の松本秀明氏により津波堆積物との見解を得ている。出土遺物は、2 層から弥生土器の壺破片 6 点・鉢破片 1 点・高坏破片 1 点、3 層中から弥生土器の壺破片 1 点が出土している。第 27 図 1 は深鉢の口縁部から体部の破片で、横位直線文が多条に施されている。2 は壺の破片で体部上端に列点刺突文が施されている。4 は高坏または蓋の破片である。5 は高坏の环部の破片で、外面には複線磨消変形工字文が施されている。7・8 は並行沈縞文、9・10 は繩文が施された壺体部の破片である。11 は壺の体部から底部の破片で、体部には撲糸文：植物茎回転文が施され、底部には木葉痕が残る。これらの時期は、弥生時代中期中葉（在家中南式期）と考えられる。

(3) 地割れ跡

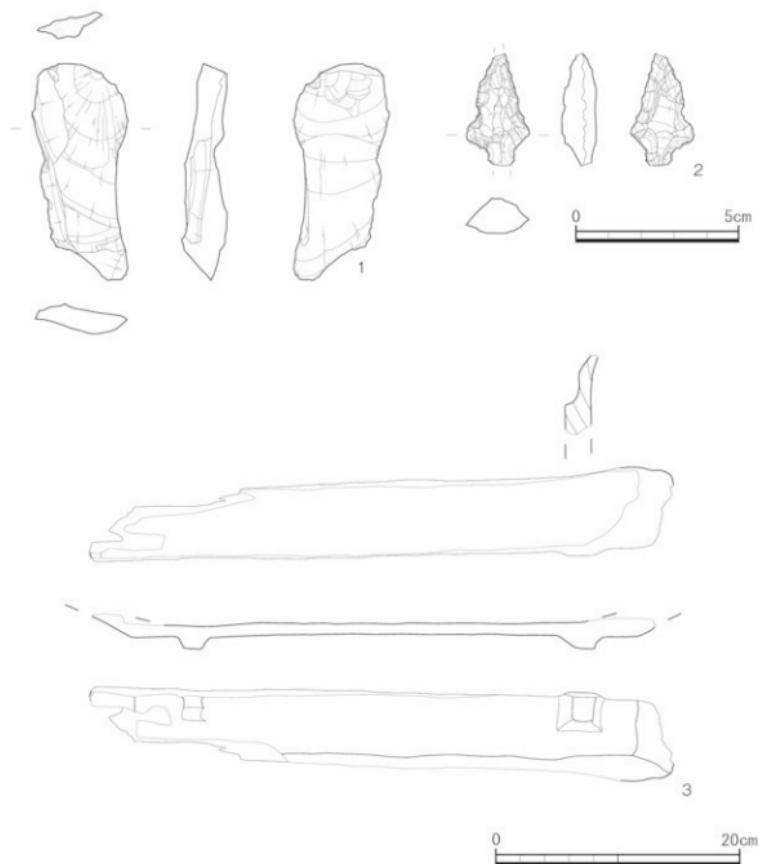
溝跡底面で地割れ状の痕跡を検出した。この地割れ状痕跡に関して松本氏から、地震による地割れ跡であるとの見解を得ている。地割れ跡は、途中で枝分かれ等しつつ断続的に調査区北壁から南壁にかけて続いており、さらに調査区外南北に延びていくことが予想される。地割れ跡の幅は約 0.05～0.20m で、深さは約 0.6～0.8m である。堆積土は 2 号溝跡の 3 层と同じである。部分的に基本層 II 層をブロック状に含むが、これは地割れを引き起こした地震動による崩壊土とみられる。地割れ跡内部からは流紋岩製の調片が 1 点出土している（第 28 図 1）。

(4) 遺構外出土遺物

基本層 I 層から、弥生土器壺が 1 点出土している。体部の小破片で、図化可能な資料ではない。

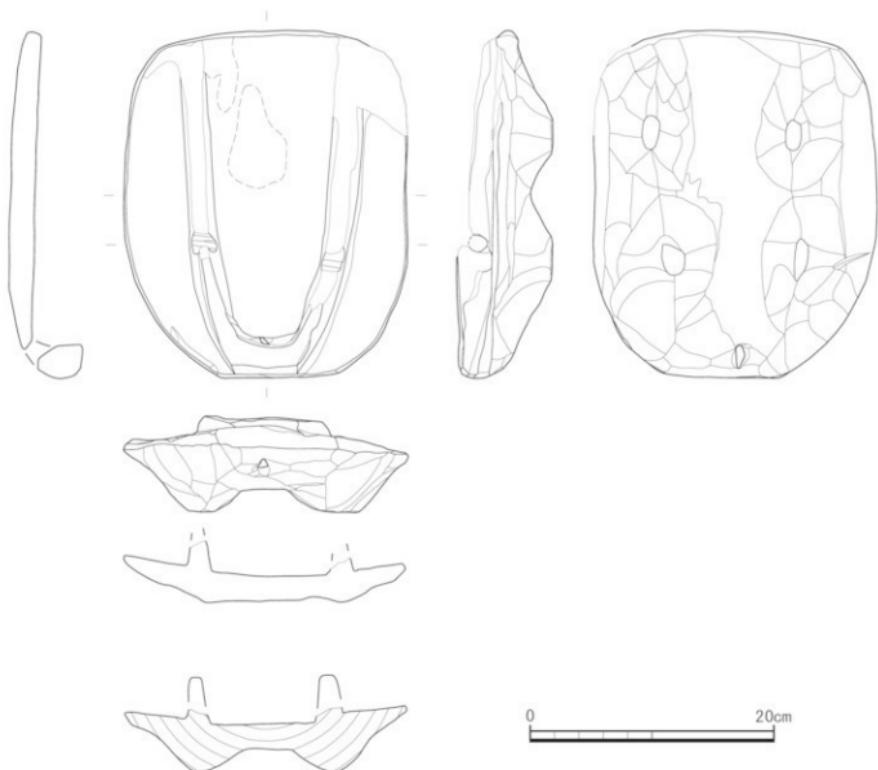
5.まとめ

今回の調査地点は、荒井広瀬遺跡の北部に位置する。当遺跡では、平成 23 年度に実施した試掘調査により、蛇行しながら南北方向に流れる自然流路跡が検出されている。今回の調査にあたり、この自然流路跡の検出、および



掲載番号	写真番号	登録番号	出土遺構	出土層位	種別	器種	残存	法量(cm)			備考
								長さ	幅	厚さ	
1	15-18	K-2	SD2	3層	石器	画片		6.7	30	1.4	石材：流紋岩
2	15-17	K-1	SR1	5層	石器	石鏹	一部	35+	20	1.1	石材：流紋岩 先端部、基部を欠損
3	16-2	L-1	SR1	2層	木製品	盤	一部	45.5+	6.7+	2.9+	

第27図 荒井広瀬遺跡第1次調査出土遺物（2）



掲載番号 図版	写真 登録番号	出土遺構 層位	出土層位	種別	器種	残存	法量(cm)			備考
							長さ	幅	厚さ	
1	16-1 L-2	SR1	2層	本製品	田下駄	ほぼ完形	28.5	23.3	7.9	足棒の裡部と幫板に各1箇所穿孔

第28図 荒井広瀬遺跡第1次調査出土遺物(3)

その堆積土中からの土器や木製品等の遺物の出土が想定された。

調査の結果、自然流路跡1条、溝跡2条、土坑2基、および地割れ跡を検出した。

自然流路跡は、1トレンチの調査により、幅は約18m以上、検出面からの深さは約2.2mであることが明らかとなった。平成23年度に行われた試掘調査のNo.43調査区で確認された自然流路跡(SRI)の深さ(検出面から約2m)とも近似した値が得られた。1トレンチおよび2トレンチでは、6~8層で古墳時代中期(南小泉式~引田式期)の土器器(壺・壺・高杯)が出土している。2トレンチでは、十和田a火山灰を含む層の直下にあたる5層で、木製の田下駄が1点出土した。この田下駄は裏面に菱形突起を有するが、この特徴は他遺跡では8~10世紀の資料に類例があることから、奈良・平安時代のものである可能性が考えられる。

2トレンチ検出の溝跡では、底面に地割れ状痕跡を発見した。この地割れ状痕跡は、東北学院大学の松本秀明氏による調査により、地震によってできた地割れ跡であるとの見解を得ている。溝跡底面付近から地割れ跡内部にかけては、弥生土器や石器を含む溝跡堆積土とみられる粘土層があり、その上を自然流路跡10層に類似した砂を大量に含む黒色土が覆っている。この砂は、松本氏により津波堆積物と判断されている。地震動により地割れが大きく開閉を繰り返すことにより、溝の堆積土と遺物が地割れ内部に吸い込まれるように充填され、その上を津波により運ばれた砂を含む黒色土が堆積したことが想定される。

この地割れ跡の年代については、以下の3点から弥生時代中期中葉であると考えられる。

- ① SD2溝跡は古墳時代中期(南小泉式期)の遺物を包含する自然流路跡SRIの8層に覆われていること。
 - ② SD2溝跡の2層およびSRI自然流路跡の10層で検出された砂が、菱形遺跡で検出された弥生時代中期中葉の水田を覆う津波堆積物と同じと考えられること。
 - ③ SD2溝跡の堆積土2層と3層から弥生時代中期中葉の土器が出土し、地割れ跡内部からおよび仙台平野で弥生時代に広く用いられた流紋岩の剥片が出土しており、古墳時代の遺物が出土していないこと。
- 平成19年度における菱形遺跡の調査では、弥生時代の水田を覆う津波堆積物は発見されていたが、その津波に対応する地震の直接的な痕跡は確認されていなかった。今回検出された地震痕跡・津波堆積物は、弥生時代中期中葉(中在家南式期)の土器や石器を伴うことから、この時代に津波を伴う大規模な地震が日本海溝周辺で発生した事が明らかになった。文字による記録が残される以前の自然災害痕跡として、地震と津波の両方の痕跡を確認し、その時代について特定することができた貴重な例であると言える。

参考文献

秋田県教育委員会 2001『中谷地遺跡』(秋田県文化財調査報告書第316集)

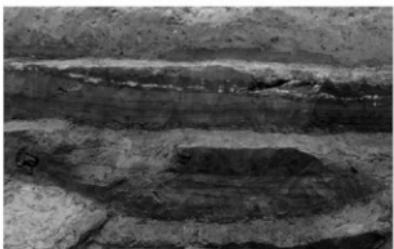
仙台市教育委員会 2000『高田B遺跡 第2分冊』仙台市文化財調査報告書第242集

仙台市教育委員会 2012『菱形遺跡第2・3次調査』仙台市文化財調査報告書第397集

仙台市教育委員会 2013『仙台市荒井広瀬遺跡発掘調査遺跡見学会資料』



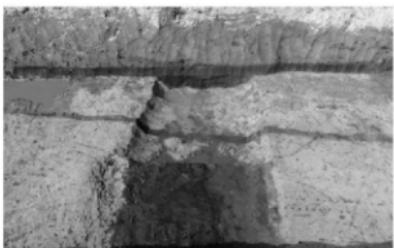
1. 1トレンチ SR1 (北東から)



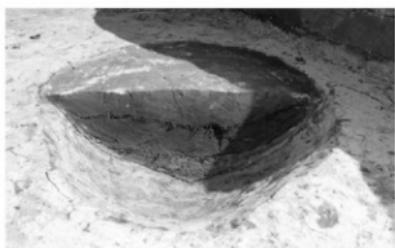
2. 1トレンチ SR1 南壁断面 (北から)



3. 1トレンチ SR1 遺物出土状況



4. 1トレンチ SD1 (南から)



5. 1トレンチ SK1 断面 (北から)



6. 1トレンチ SK2 断面 (北から)

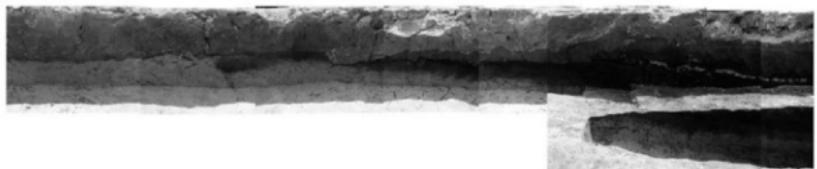


7. 2トレンチ全景 (西から)



8. 2トレンチ SR1 田下駄出土状況 (南東から)

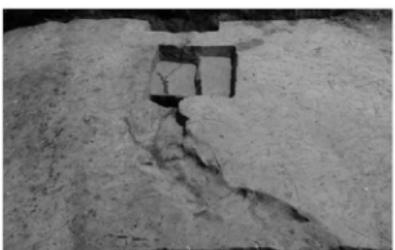
写真図版 12 第1次調査 (1)



1. 2トレンチ南壁断面合成写真



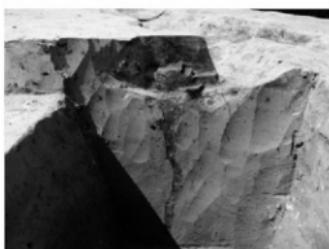
2. 2トレンチSD2検出状況（南から）



3. 2トレンチSD2（南から）



4. 2トレンチ中央サブトレンチ断面地割れ踏深さ確認状況（北から）



5. 2トレンチ中央サブトレンチ断面遺物出土状況（北から）



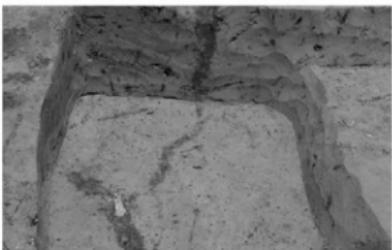
6. 2トレンチ中央サブトレンチ断面遺物出土状況（アップ）



7. 2トレンチSD2遺物出土状況（3層中・地割れ直上）



1. 2トレンチSD2遺物出土状況（2層中）



2. 2トレンチ中央サブトレンチ地割れ跡露出状況（南から）



3. 2トレンチ中央サブトレンチ地割れ跡内石器出土状況（北から）



4. 2トレンチ中央サブトレンチ地割れ跡出土器压痕確認状況



5. 2トレンチ南側サブトレンチ地割れ跡確認状況（北から）



6. 東北学院大学松本秀明氏現地調査

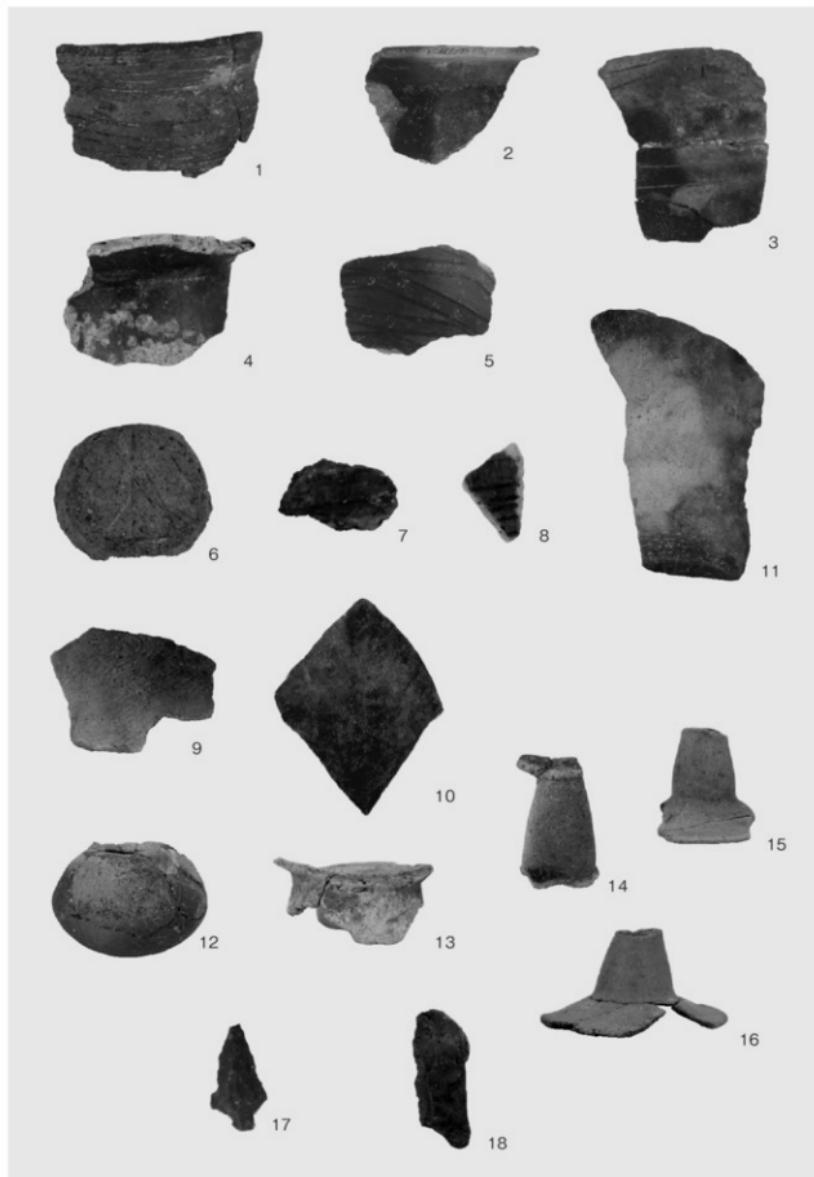


7. 市立七郷小学校児童見学風景

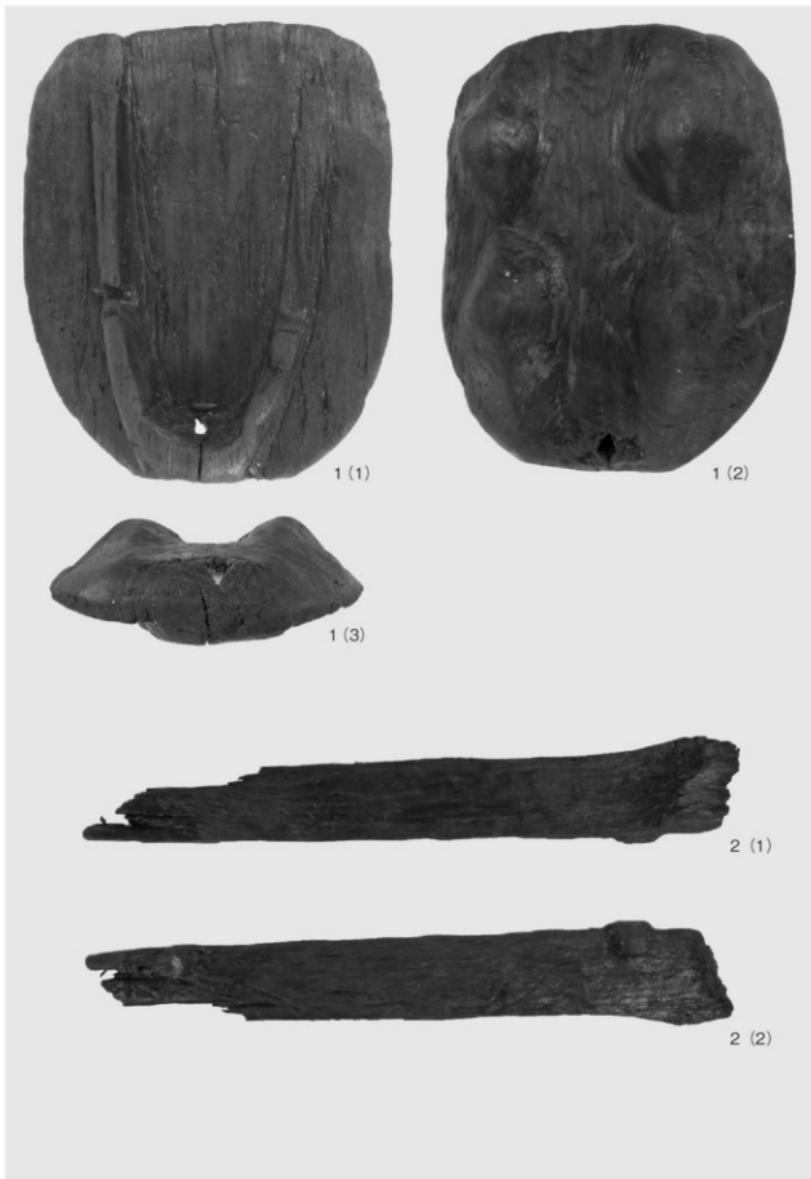


8. 遺跡見学会風景

写真図版 14 第1次調査（3）



写真図版 15 第1次調査出土遺物 (1)



写真図版 16 第1次調査出土遺物 (2)

第4節 荒井南遺跡

I. 遺跡の概要

荒井南遺跡は仙台市若林区長喜城字宮前他に所在し、仙台駅より南東方向に約6km、仙台東部道路西側に隣接する地点に位置する。現海岸線からの距離は3.5km～4.0kmである。遺跡は、河原町から東に延びる自然堤防と、その南側の後背湿地上に立地している。遺跡の範囲は南北約450m、東西約250～500mに及ぶ。当遺跡は、平成24年に実施された仙台市荒井南土地区画整理事業に伴う試掘により新規登録された遺跡である。弥生時代の水田跡およびそれを覆う津波堆積物が検出され、石庖丁、大型板状石器、礫石器などの石器類が出土している。なお、今回の調査により遺跡範囲が拡大されることになった。

II. 第2次調査

1. 調査要項

遺 跡 名	荒井南遺跡(宮城県遺跡登録番号01571)
調 査 地 点	仙台市若林区長喜城字宮前～荒井字遠藤西地内
調 査 期 間	平成25年6月12日～7月16日
調 査 面 積	138nf
調 査 原 因	東部市街地排水路(掘削幅15m、掘削深度2.8～3.1m)建設工事
調 査 主 体	仙台市教育委員会
調 査 担 当	仙台市教育委員会生涯学習部文化財課調査調整係
担 当 職 員	主査 平間亮輔 主事 小泉博明、黒田智章 文化財教諭 千葉悟、千葉靖彦、早坂純一、佐藤高陽

2. 調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、平成24年5月28日付で申請者より提出された「東部排水路計画と埋蔵文化財のかかわりについて(協議)」(平成25年6月18日H25教生文253-6号で伝達)に基づき実施した。この調査は、当初荒井南遺跡隣接地試掘調査として行った。調査の結果、一部のトレンチにおいて遺構が検出されたため、引き続き本発掘調査を実施した。

重機により盛土および基本層Ⅰ・Ⅱ層を除去後、基本層Ⅲ層以下で人力により遺構検出作業を行った。その結果、水田耕作土とそれに伴う畦畔を検出した。

適宜、平面・断面図を作製し、デジタルカメラを用いて記録写真を撮影した。

3. 基本層序

- I層：10YR3/2 黒褐色粘土である。層厚20～30cmで、現代の水田耕作土である。
- II層：10YR5/6 黄褐色シルトである。層厚5～10cmで、部分的に遺存する。十和田a火山灰である。
- IIIa層：10YR3/1 黒褐色泥炭層である。層厚約10～30cmで、植物遺存体を多量に含む。
- IIIb層：10YR2/1 黒色泥炭層である。層厚約10cmで、植物遺存体を多量に含む。
- IV層：10YR4/2 灰黄褐色細砂である。層厚2～5cmで、3トレンチと4トレンチで確認された。弥生時代の津波堆積物と推定される。
- Va層：10YR3/2 黑褐色粘土である。層厚2～5cmで、5トレンチで確認された。IV層細砂粒を多量に含み、細砂は部分的に層状あるいは径3～5cmのブロックになる。Vb層(津波堆積物)とVb層(水田耕作土)が混じった様相を呈しており、津波によってIV層とVb層が搅拌されて形成されたと推定される。

V b層: 10YR2/1 黒色泥質粘土である。層厚5~10cmで、下面には凹凸がある。弥生時代の水田耕作土と推定される。

M a層: 10YR3/1 黑褐色泥炭質粘土である。層厚10~25cmで、洪水堆積層と推定される。

M b層: 5Y4/1 灰色粘土である。層厚10~25cmで、洪水堆積層と推定される。

M c層: 10YR7/4 にぶい黄橙色粘土である。層厚20cm以上で洪水堆積層と推定される。

4. 発見遺構と出土遺物

1・2トレンチより水田耕作層と推定される層を検出し、4・5トレンチより水田耕作土を検出した。また、4トレンチにおいて水田跡、5トレンチでは水田耕作土の下面で溝跡を検出した。また、1トレンチから弥生土器片2点が出土している。

(1) 1トレンチ

本調査区では、水田耕作層と推定される層を検出した(V b層)。部分的にIV層(細砂、津波堆積物)に覆われている。畦畔などは検出されなかった。遺物は、V b層より弥生土器片2点が出土している。2点共体部破片で、外面には撲糸文Rが施されている。

(2) 2トレンチ

本調査区では、水田耕作層と推定される層を検出した(V b層)。部分的にIV層(細砂、津波堆積物)に覆われている。畦畔などは検出されなかった。

(3) 3トレンチ

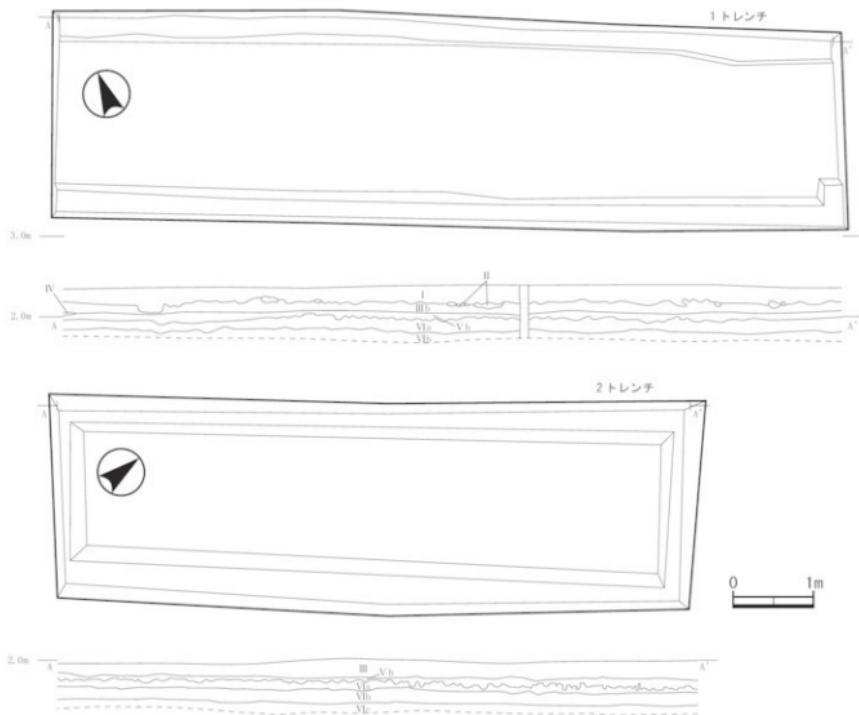
本調査区では、水田耕作土と推定される層は検出されなかった。

(4) 4トレンチ

本調査区では、水田耕作土V b層とそれに伴う畦畔を検出し、荒井南遺跡の水田跡の広がりを確認した。



第29図 第2次調査区設定図



第30図 1・2 トレンチ平面・断面図

V b 層水田跡

i. 檢出・遺存状況

III層下部において畦畔1条を確認した。遺存状況は比較的良好である。

ii. 耕作土

耕作土は基本層V b層である。層厚は5~15cmで、下面是起伏がある。

iii. 畦畔

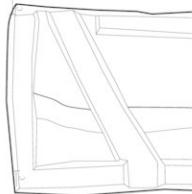
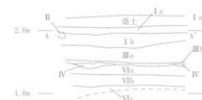
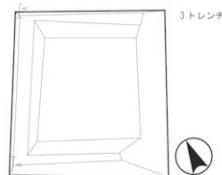
畦畔は耕作土を盛り上げて造られており、北西~南東方向のものを1条(畦畔1)検出した。検出長は約6.5mで、上端幅約1.2m、下端幅約1.8m、高さは5cmである。大畦畔と推定される。調査区を西側に拡張し、畦畔の延長部分を検出した。

iv. 水田区画

部分的な検出のため規模は不明である。

v. 出土遺物

遺物等は出土していない。

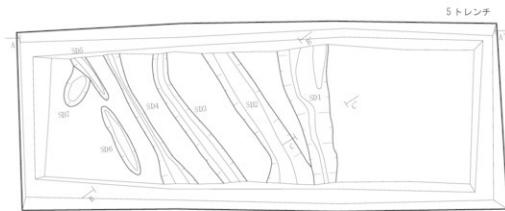
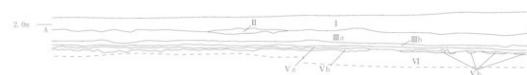
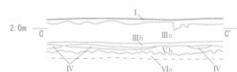
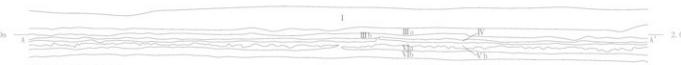


4 トレンチ

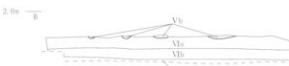


— 3.0m

— 3.0m



5 トレンチ



第31図 3～5トレンチ平面・断面図

(5) 5トレンチ

本調査区では、水田耕作土（V b層）を検出した。水田面はV a層によって覆われている。畦畔は検出されなかつたが、V b層の下面より溝状の落ち込みを5条検出した。北西～南西方向、上端幅40cm～1m、下端幅10cm～50cm、深さは5cm程度である。

周辺の畦畔との関係から水田区画に平行して溝が走っていることから、水田耕作に伴う痕跡である可能性はあるが、鈫・鋤痕等は認められなかった。

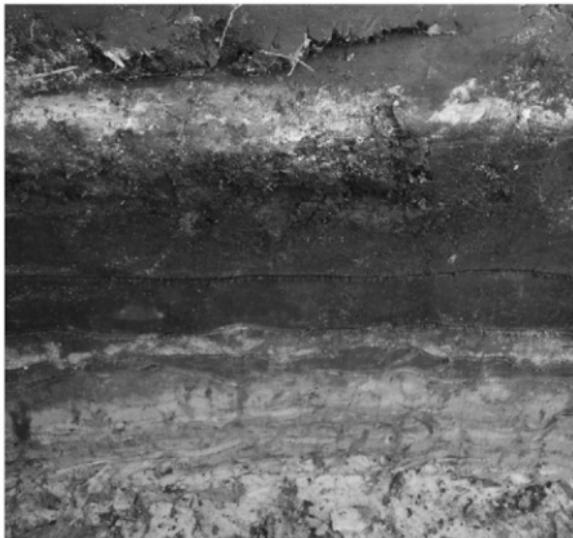
遺構出土遺物

1トレンチ基本層I層より土師器壺1点、瓦片1点、磁器2点、陶器3点が出土している。時期については近世の肥前産染付皿、19世紀代の瀬戸美濃産染付皿、陶器については16世紀末～17世紀初頭の唐津産鉄釉皿、18世紀～19世紀の大堀相馬産白濁釉碗と胎釉土瓶である。また、基本層III層より土師器壺1点が出土している。

5.まとめ

今回の調査地点は、1トレンチ、2トレンチで水田耕作層と推定される層、4トレンチ、5トレンチで弥生時代の水田耕作土を確認し、4トレンチでは畦畔を検出した。このことにより、3トレンチの範囲を除く東西の部分において、荒井南遺跡の水田城の南側への広がりが判明した。また、1トレンチからは弥生土器片が出土している。

また、5トレンチでは、水田耕作土下に溝状の落ち込みを5条検出した。これらの溝は、水田耕作に伴う痕跡の可能性はあるが、自然的な要因も含め、類例の増加を待って検討していく必要があろう。

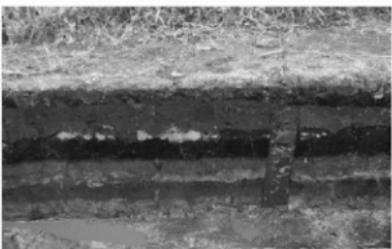


5トレンチ断面（拡大）

写真図版 17 第2次調査（1）



1. 1 ドレンチ調査区全景



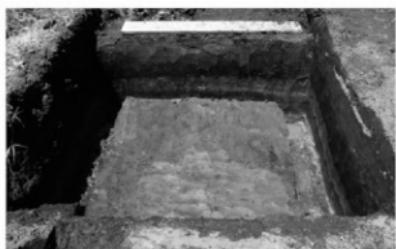
2. 1 ドレンチ南壁断面



3. 2 ドレンチ調査区全景



4. 2 ドレンチ北壁断面



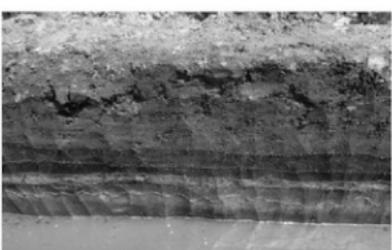
5. 3 ドレンチ調査区全景



6. 3 ドレンチ北壁断面



7. 4 ドレンチ調査区全景



8. 4 ドレンチ北壁断面

写真図版 18 第2次調査 (2)



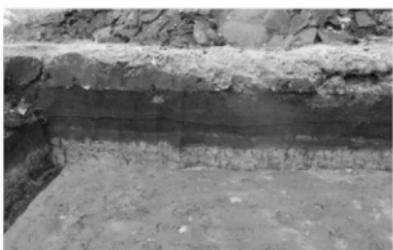
1. 4 トレンチ大畦畔確認状況



2. 4 トレンチ大畦畔検出状況



3. 5 トレンチ落ち込み部分完掘



4. 5 トレンチ南壁断面



5. 5 トレンチ水田耕作土除去作業

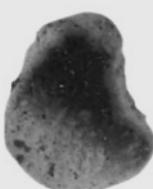


6. 5 トレンチ溝状の落ち込み

写真団版 19 第2次調査 (3)



1



2

写真団版 20 第2次調査出土遺物

第4章 太白区内の調査

第1節 中田南遺跡

I. 遺跡の概要

中田南遺跡は、仙台市の南東部、JR 南仙台駅の南 0.8 km に位置し、遺跡の南側には名取市が接する。名取川やその支流によって形成された標高 7 ~ 8 m 前後の自然堤防上に立地している。遺跡の広がりは東西 500 m、南北 200 m である。周辺の遺跡には前田館跡、壇腰遺跡、中田北遺跡、上余田遺跡などがある。

発掘調査は、平成 4 年から行われており、古墳時代から中世にかけての遺構が多数確認されている。堅穴住居跡は古墳時代後期 3 軒、古墳時代末から奈良時代 30 軒前後、平安時代 2 軒が確認され、掘立柱建物跡は、古墳時代末から奈良時代 2 棟以上、平安時代 4 棟以上などが確認されている。他にも平安時代の鍛冶遺構、中世の井戸跡、屋敷を囲む堀跡、火葬墓などが発見されている。奈良時代の遺構からは、銅の鋳造用の土器などが出土している。また、中世の屋敷跡や堀跡が発見されている他、溝跡からは土師質土器皿や陶磁器などが出土している。

II. 第5次調査

1. 調査要項

遺 跡 名 中田南遺跡（宮城県遺跡登録番号 01272） 調査地点 仙台市太白区中田七丁目 108-1 の一部外

調査期間 平成 25 年 4 月 22 日 ~ 23 日 調査対象面積 32.03m²

調査面積 20.20m² (1 レンチ : 9.70m²、2 レンチ : 5.90m²、3 レンチ : 4.60m²)

調査原因 污水排水施設設置工事

調査主体 仙台市教育委員会 調査担当 仙台市教育局生涯学習部文化財課調査調整係

担当職員 主事 小泉博明 黒田智章 文化財教諭 佐藤高陽 千葉悟 早坂純一 千葉靖彦

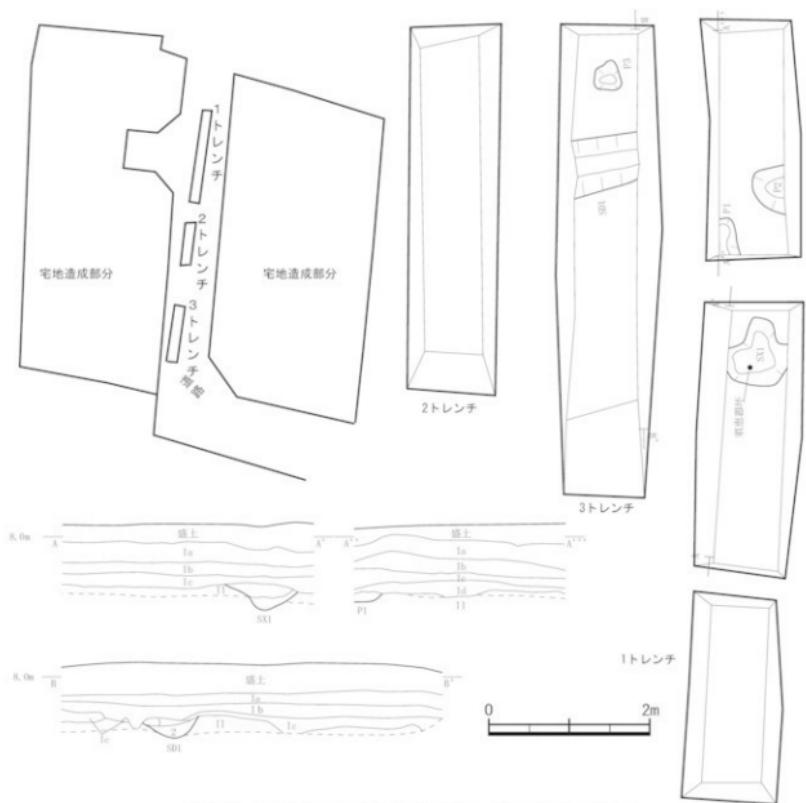
2. 調査に至る経緯と調査方法

今回の調査は、平成 25 年 4 月 8 日付で申請者より提出された、宅地造成工事に伴う「埋蔵文化財発掘の届出に



番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	中田南遺跡	集落跡・屋敷跡	自然堤防	縄文・弥生・古墳・古代・中世
2	壇腰遺跡	散布地	自然堤防	古代
3	前田館跡	城郭跡	自然堤防	中世
4	中田北遺跡	散布地	自然堤防	古代
5	中田神社裏遺跡	散布地	自然堤防	古墳・古代
6	安久道跡	集落跡	自然堤防	縄文・弥生・古代・中世
7	安久東道跡	集落跡・方形周溝墓	自然堤防	弥生・古墳・古代・中世・近世
8	前沖中道跡	散布地	自然堤防	古墳・古代
9	後河原道跡(前沖道跡)	水田跡	自然堤防 後背湿地	弥生・古代・中世・近世

第32図 中田南遺跡と周辺の遺跡、調査区位置図



第33図 第5次調査区設定図(1/500)、調査区平面・断面図

について」(H25教生文第123-21号で回答)に基づき実施した。調査は平成25年4月22日によ着し、対象地内に2箇所の調査区を設定して、1トレンチから2トレンチまで調査区番号を付した。1トレンチは既設建物に伴う基礎が残存していたことから、調査区を北・中央・南の3箇所に分割して調査を実施した。表土掘削は、重機を用いて盛土および基本層Ⅰ層を除去し、遺構検出作業は基本層Ⅱ層上面で行った。1トレンチで検出したSX1性格不明遺構堆積土からは、完形の須恵器壺1点が出土した。これを受けた行なった検討の結果、1トレンチと2トレンチの間に、新たに3トレンチを設定することとなった。平成25年4月23日に3トレンチの調査を行ったが、遺構および遺物の発見には至らなかった。調査では、必要に応じて、平面図および断面図を作製し、デジタルカメラを用いて記録写真的撮影を行った。調査は平成25年4月23日に終了した。

3. 基本層序

今回の対象地内の宅地化に伴う盛土の層厚は、調査開始時点で約0.30～0.40mであるが、路盤掘削が終了していたことから、本来は0.70m前後であったと考えられる。今回の調査で盛土下に確認した基本層は、大別2層である。Ⅰ層：宅地化に伴う盛土以前の表土もしくは畑耕作土で、4層に細別される。近現代に属すると推定される。Ⅰa

層およびI b層はプラスチック、ガラス片などを多く含むしまりのないシルトである。I c層、I d層は基本層Ⅱ層起源とみられるにぶい黄褐色砂質シルトを含む黒褐色、暗褐色のシルトおよび粘土質シルトである。

II層：均質なにぶい黄褐色の砂質シルトで、層上面に漸移的な変化が認められる。今回の遺構検出面である。

4. 発見遺構と出土遺物

今回の調査では、溝跡1条、性格不明遺構1基、ピット3基を検出した。遺物は基本層I層、遺構堆積土から、完形の須恵器环1点を含む土師器、ロクロ土師器、須恵器が少量出土している。

1 トレンチ

SX 1 性格不明遺構 調査区中央の北部で検出した。他の遺構との重複はない。平面形は不整形を呈する。規模は東西0.70m以上、南北約0.80mで、深さ約0.30mである。断面形は逆台形を呈するが、底面には窪みが認められ、底面から立ち上がる壁の状況も一樣ではない。堆積土は2層に細別され、にぶい黄褐色の砂質シルトを含む暗褐色の粘土質シルトである。遺物は完形の須恵器环1点の他、土師器壺2点、須恵器2点が出土している。須恵器环(第35図1)を図示したが、体部が直線的に外形する器形で底部は回転系切り無調整である。

ピット 調査区北の南部で2基のピットを検出した。いずれも他の遺構との重複はなく、柱痕跡は確認されなかつた。平面形は楕円形を基調としたものとみられ、深さは約0.25mである。堆積土はⅡ層起源のにぶい黄褐色砂質シルトを含む暗褐色の粘土質シルトである。遺物は出土していない。

2 トレンチ

SD1 溝跡 調査区北部で検出した東西方向の溝跡である。他の遺構との重複はない。検出長は約0.80mである。規模は上端幅約0.60～0.70m、下端幅約0.20mで、深さは0.20m程度である。断面形は上部が大きく開く「U」字形を呈する。堆積土は2層に細別され、炭化物やⅡ層起源の黄褐色砂質シルトを含む暗褐色の粘土質シルトである。遺物は出土していない。

ピット 調査区北部で検出したピットである。他の遺構との重複はなく、柱痕跡は確認されなかつた。遺物は出土していない。

3 トレンチ

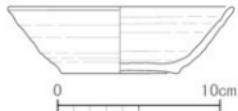
遺構は検出されなかつた。遺物は、基本層I層から土師器壺が1点出土している。胴部の小破片である。

遺構外出土遺物

1 トレンチの遺構堆積土上面から、土師器壺2点、須恵器环2点が出土している。いずれも小破片である。

5.まとめ

今回の調査地点は、中田南遺跡の西部に位置する。今回の調査では、溝跡1条、性格不明遺構1基、ピット3基を検出した。遺構の分布密度は希薄で、調査区が狭小であることから一部の検出に留まり、検出した遺構の性格を明らかにすることはできない。出土遺物には、土師器、ロクロ土師器、須恵器がある。断片的な破片資料が主体を占め、量的にも少量である。したがって、出土遺物から遺構の年代を明らかにすることはできない。一方、SX 1性格不明遺構から出土した須恵器环は、器形等から平安時代に属するものとみられる。このことから、SX 1性格不明遺構の年代が該期まで遡る可能性や周辺に古代の遺構が分布することを反映しているものと考えられる。



掲載番号	写真図版	登録番号	出土遺構	層位	種別	器種	残存	法量(cm)			調 整			備考
								口径	底径	器高	外面	内面	底面	
1	E-1	SX1	底面	須恵器環	完形			14.0	7.1	4.1	ロクロナデ	ロクロナデ	回転系切り無調整	

第34図 第5次調査出土遺物



1. 1 トレンチ調査区全景（北から）



2. 1 トレンチ SX1 遺物出土状況（東から）



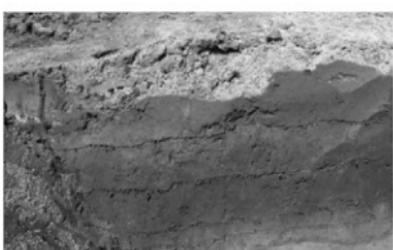
3. 2 トレンチ調査区全景（南から）



4. 2 トレンチ SD1 溝跡断面（東から）



5. 3 トレンチ調査区全景（北から）



6. 3 トレンチ西壁断面（東から）

写真図版 21 第5次調査



7

写真図版 22 第5次調査出土遺物

第2節 西台畠遺跡

I. 遺跡の概要

西台畠遺跡は仙台市南東部、太白区郡山二丁目に位置する绳文時代～中世の遺跡である。広瀬川と名取川に挟まれた沖積地（郡山低地）の東側、標高約11mの自然堤防上に立地している。本遺跡の東には、多賀城以前の陸奥国府と考えられ、平成18年に国史跡の指定を受けた郡山遺跡が接している。また、南南西には長町駅東遺跡が近接し、本遺跡と共に郡山遺跡の官衙に関する集落と考えられる。

なお、本遺跡周辺の歴史的環境詳細は、『西台畠遺跡第1・2次調査』（仙台市教委2010）を参照されたい。

II. 第10次調査

1 調査要項

遺 跡 名	西台畠遺跡(宮城県遺跡登録番号01005)	
調 査 地 点	仙台市太白区あすと長町26街区5画地2の一部、4画地の一部	
調 査 期 間	平成25年9月9日～9月17日	
調査対象面積	1404.72m ²	
調 査 面 積	114.49m ² (1トレンチ: 17.64m ² 2トレンチ: 20.64m ² 3トレンチ: 76.21m ²)	
調 査 原 因	共同住宅新築建築工事および駐車場新設工事	
調 査 主 体	仙台市教育委員会	調査担当 仙台市教育局生涯学習部文化財課調査調整係
担 当 職 員	主事 小泉博明、黒田智章	文化財教諭 早坂純一、佐藤高陽、千葉悟、千葉靖彦

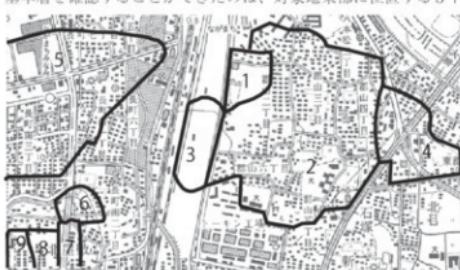
2 調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、平成25年6月19日付で申請者より提出された共同住宅建築工事に伴う「埋蔵文化財発掘の取扱いについて（協議）」（平成25年6月24日付H25教生文第124-34号で回答）に基づき実施した。以前に行われた確認調査において、対象地は広く擾乱を受けていることが判明していたため、本調査区は3箇所に限定した。調査は平成23年9月9日に着手した。重機を用いて盛土を除去し、人力により遺構検出作業を行った。

その結果、対象地の西部に位置する1トレンチおよび2トレンチは、擾乱の影響により遺構検出面が残存していないことが判明した。対象地の東部に位置する3トレンチは擾乱の影響を大きく受けているものの、竪穴住居跡等の遺構を検出できた。竪穴住居跡が検出されたため調査区の拡張を行い、住居跡北辺を確認した。調査では、必要に応じて、平面・断面図（S = 1/20, S = 1/40）を作製し、デジタルカメラを用いて記録写真を撮影した。1トレンチおよび2トレンチは9月10日までに、3トレンチは9月17日に埋め戻しを含めた野外調査の一切を終了した。

3 基本層序

基本層を確認することができたのは、対象地東部に位置する3トレンチのみである。3トレンチでは、遺構検出までの掘削深度が約0.80mで、盛土下に4層の基本層を確認した。



番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	西台畠遺跡	官衙関連・集落跡	自然堤防	縄文～中世
2	郡山遺跡	官衙跡・引取跡	自然堤防・地形湖沼	縄文～中世
3	長町駅東遺跡	官衙関連・集落跡	自然堤防・地形湖沼	縄文～中世
4	北日城跡	城郭・集落跡	自然堤防	縄文～古世
5	宮沢遺跡	混合型・集落跡	後背湿地	旧石器～古世
6	元聚落跡	集落跡	自然堤防	奈良・平安
7	大野田遺跡	墓地	自然堤防	縄文・弥生
8	前谷遺跡	集落跡・官衙関連	自然堤防	縄文～平安
9	大野田官衙道跡	官衙路	自然堤防	古墳・奈良

第35図 西台畠と周辺の遺跡



第36図 第10次調査区位置図・設定図

I層：灰黄褐色を呈する粘土質シルトで、上面が擾乱の影響を受けている。今回の調査における遺構検出面である。

II層：にぶい黄褐色を呈する砂質シルトで、均質である。

III層：暗褐色を呈する粘土である。

IV層：黄褐色を呈する砂質シルトである。

4 発見遺構と出土遺物

今回の調査で検出した遺構には、竪穴住居跡1軒、溝跡1条がある。遺物は、遺構堆積土から土師器、石製品が出土している。

(1) 竪穴住居跡

SI1 竪穴住居跡

3トレンチ中央部に位置する竪穴住居跡である。SD1に切られている。擾乱とSD1溝跡の影響から、平面形は不明であるが、方形を基調としたものとみられる。規模は南北約3.45m、東西2.60m以上である。床面は掘り方埋土を床面とし、住居跡南半部に残存している。壁は床面からほぼ垂直に立ち上がる。壁高は最も残りのよい住居跡南壁で床面から8cmほどである。堆積土は2層に細別され、上層は炭化物と黄褐色の砂質シルトを含む暗褐色の粘土質シルトである。下層は住居跡南半部の床面直上に分布する炭化物主体層である。柱穴、カマド、周溝などは検出されなかったが、住居跡南壁際の床面上で6点のまとまった出土が認められた。

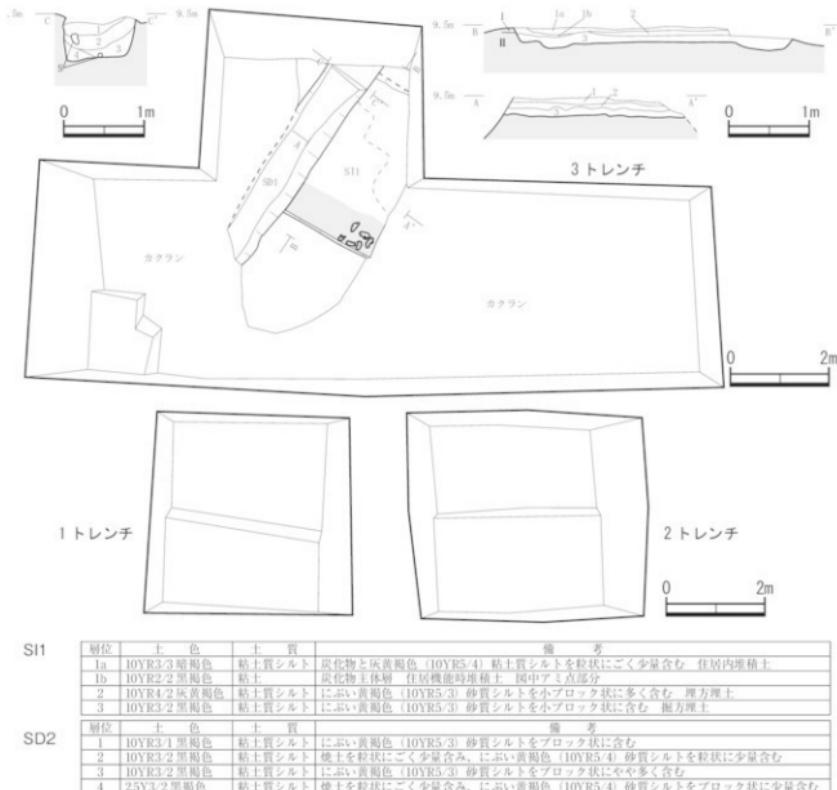
遺物は、堆積土上層から、非クロクロ調整の土師器壺・甕など30点、砥石1点が出土している。砥石（第39図1）は、断面形がU字状を呈する幅約17mmの使用痕跡が顕著に認められ、玉類の製作などに用いられた可能性がある。堆積土下層からは、非クロクロ調整の土師器甕片17点が出土している。掘方埋土からは土師器片6点、コハク製の管玉類1点（第39図3）が出土している。土師器甕には頸部に段をもつものがある。

(2) 溝跡

SD1 溝跡

南北方向の溝跡である。SI1を切っている。検出長約5.00mで、さらに南北へ延びる。擾乱によって大きく壊されているが、規模は上端幅約0.95m、下端幅約0.45～0.70mで、深さ約0.50mである。断面形は底面から壁が急に立ち上がる箱状を呈する。堆積土は4層に細別され、黄褐色の砂質シルトを含む黒褐色の粘土質シルトである。

遺物は、土師器壺3点・甕119点、ロクロ土師器の可能性がある壺1点、須恵器甕2点・壺1点が出土している。図示できるものはないが、土師器壺は、外面に段を持つものと持たないものがあり、土師器甕の外面調整は緩



第37図 第10次調査平面・断面図

方向の粗いハケメとヘラケズリが見られる。

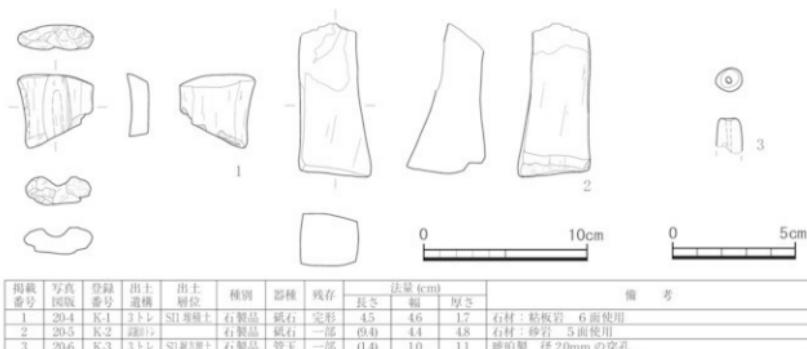
遺構出土遺物

遺構確認面から、砥石（第39図2）、土師器壊1点、甕19点、須恵器壺3点が出土している。

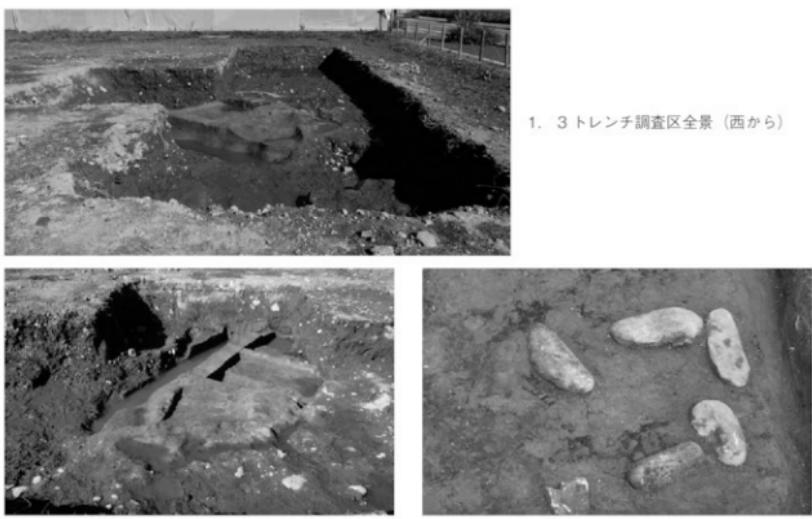
5まとめ

調査地点は、西台畠遺跡の南部に位置する。対象地は、以前に行われた確認調査で広範囲に擾乱が及んでいることが判明しており、今回の調査は、その中で遺構面が部分的に残されていた範囲を対象として行われ、竪穴住居跡1軒、溝跡1条を検出した。

砾のまとまった出土については、周辺の調査においても、類似した調査事例が認められる。いわゆる「編物石」の可能性があり、集落内の生業に関わる遺物と推定される。SIIは出土遺物から年代を限定することはできないが、古墳時代後期から奈良時代の可能性がある。砥石は、使用痕跡の特徴から、玉類の製作などが推定され、本竪穴住居跡が工房であった可能性や周辺に同様の施設が存在していたことが想定される。



第38図 第10次調査出土遺物



2. 3トレンチ調査区全景（南東から）

2. 3トレンチ SI1 遺物出土状況（東から）



写真図版 23 第10次調査、出土遺物

第3節 裏町古墳

I. 遺跡の概要

裏町古墳は、仙台市太白区西多賀一丁目に所在する。JR仙台駅の南西約4.1Kmに位置し、三神峯丘陵裾部に立地する。裏町古墳では、これまで測量調査の他に、2次にわたる調査が行われている。特に昭和48年（1973年）に行われた第2次調査の結果、裏町古墳は墳丘上に葺石と埴輪列を伴い、後円部に堅穴式石室を有する前方後円墳であることが明らかとなった。その規模は、主軸長約50.0m、後円部径約38.0m、前方部長15m余りであると推定されている。また、出土遺物から、古墳の築造は5世紀中頃と考えられている。なお、墳丘上部は、第2次調査後に行われた宅地造成工事のために大きく削平され、現在は平坦な地形となっている。

II. 第3次調査

1. 調査要項

遺跡名 裏町古墳（宮城県遺跡登録番号01040） 調査地点 仙台市太白区西多賀一丁目214-1の一部

調査期間 平成25年9月19日～9月24日

調査面積 245.36m²（A区：116.50m²、B区：128.86m²）

調査面積 55.68m²（A区：33.18m²、B区：22.50m²）

調査原因 長屋住宅建築工事

調査主体 仙台市教育委員会 調査担当 仙台市教育局生涯学習部文化財課調査調整係

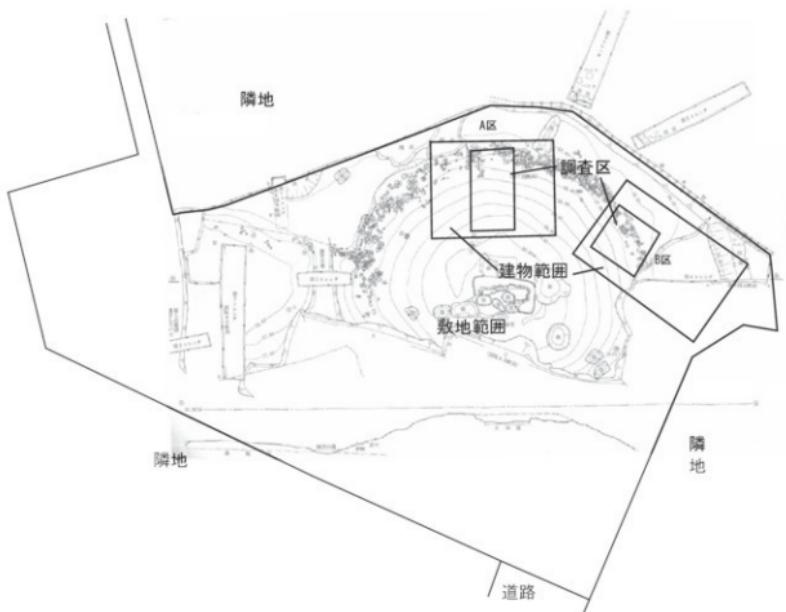
担当職員 主事 小泉博明、黒田智章 文化財教諭 早坂純一、佐藤高陽

2. 調査に至る経過と調査方法

今回の調査は、平成25年4月8日付で申請者より提出された2件の共同住宅建築工事に伴う「埋蔵文化財発掘の取扱いについて（協議）」（H25教生文第1247号およびH25教生文第1249号で回答）に基づき実施した。前者をA区、後者をB区として、平成25年9月19日に着手し、並行して調査を実施した。対象地は、前方後円墳である裏町古墳の後円部北部と北東部にあたる。建築範囲内に調査区を設定し、重機を用いて、現表土を除去した。

番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	裏町古墳	前方後円墳	丘陵麓	古墳
2	裏町采石跡	散布地	丘陵麓	平安
3	神峯道跡	集落跡	丘陵	縄文・平安
4	古ノリ道跡	集落跡	丘陵	縄文・弥生・古代
5	原道跡	散布地	丘陵麓	弥生・古墳・古代
6	西台里跡	窓跡	丘陵麓	古代
7	土手内横穴墓群B地点	横穴墓	丘陵斜面	古墳
8	土手内道跡	集落跡	丘陵	縄文・弥生・古墳・古代
9	土手内横穴墓群A地点	横穴墓	丘陵斜面	古墳
10	富沢道跡	包含地、水田跡	後背湿地	後期旧石器～近世

第39図 裏町古墳と周辺の遺跡



第40図 第3次調査区設定図

対象地は現在宅地であるが、第2次調査では、墳丘すべてを掘り下げていないことから、古墳構築土が残存している可能性が高く、墳丘構築土で覆われた古墳築造以前の遺構の存在も想定された。表土掘削の後、古墳構築土を確認し、それを掘り下げ、古墳築造時の表土である基本層Ⅰ層を検出した。基本層Ⅰ層上面で遺構検出作業を行ったが、遺構は検出されなかった。継続して基盤層である基本層Ⅱ層上面まで掘削を行い、再度、遺構検出作業を行ったが、遺構および遺物は確認されなかった。今回の調査では、必要に応じて、平面・断面図を作製し、デジタルカメラを用いて記録写真を撮影した。平成25年9月24日に調査を終了した。

3. 基本層序

現表土直下に宅地造成に伴う整地層が確認され、この直下に古墳構築土が残存する。古墳構築土下には、古墳構築時の表土である基本層Ⅰ層と基盤層の基本層Ⅱ層の大別2層を確認した。いずれの調査地点も基本層は共通している。

I層：黒褐色および暗褐色を呈する粘土質シルトである。古墳造営以前の表土とみられ、3層に細別される。

II層：にぶい黄褐色を呈する粘土で、調査区全域に分布する。層上面は基本層Ⅰ層の影響を受け、漸移的な変化が認められる。

4. 発見遺構と出土遺物

検出した遺構には、裏町古墳の構築土がある。

一方、古墳構築以前の遺構は検出されなかった。また、遺物は、古墳構築土、基本層Ⅰ層のいずれからも出土していない。以下に、調査区ごとに詳述する。

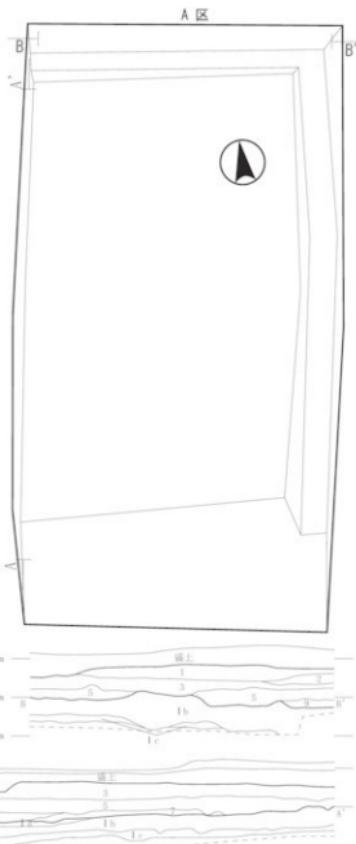
(1) A区

後円部北部に位置する本調査区では、盛土下に埴丘部を形成する9層の古墳構築土（第41図1～9層）を確認した。構築土は、黄褐色を呈する砂質シルトなどや礫を含む暗褐色および黒褐色の粘土質シルトで、しまりがある。残存する構築土の層厚は最大で0.50mほどで、ほぼ水平に積まれている。また、古墳構築土下には旧表土である基本層Ⅰ層が原地形に沿って堆積し、本層上面が層厚数cmの薄い炭化物層に覆われていることが確認された。

基盤層である基本層Ⅱ層上面から、遺構は検出されなかつた。遺物は、古墳構築土、基本層Ⅰ層のいずれからも出土していない。

(2) B区

後円部北東部に位置する本調査区では、盛土下に埴丘部を形成する12層の古墳構築土（第42図1～12層）を確認した。構築土は、黄褐色を呈する砂質シルト主体層と黄褐色を呈する砂質シルトなどや礫を含む暗褐色および黒褐色の粘土質シルト層に大別され、互層状に積まれている。いずれもしまりがある。残存する構築土の層厚は最大で1.10mほどである。原地形に沿って、北西から東と南に向かって傾斜して積まれている。なお、古墳構築土下に認められる旧表土である基本層Ⅰ層上面には、A区と異なり、炭化物の分布は確認できなかった。基盤層である基本層Ⅱ層上面から、遺構は検出されなかつた。遺物は、古墳構築土、基本層Ⅰ層のいずれからも出土していない。



基本層

層位	土色	土質	備考
I a	5Y3/1 オリーブ黒色	粘土	
I b	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	基本層Ⅰc層を斑状に含む
I c	10YR3/4 黄褐色	シルト	基本層Ⅱ層を小ブロック状に少量含む
II	10YR5/4 に赤い黄褐色	粘土	上面に移動的変化が認められる

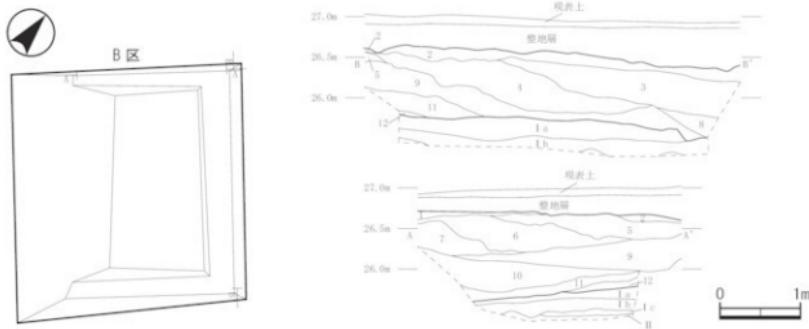
古墳積土

層位	土色	土質	備考
1	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	に赤い黄褐色(10Y R 5/3) 砂質シルトをブロック状に含む
2	10YR3/3 黄褐色	粘土質シルト	礫を含み、に赤い黄褐色(10Y R 5/3) 砂質シルトをブロック状に若干含む
3	10YR3/4 黄褐色	粘土質シルト	礫と一緒に赤い黄褐色(10Y R 5/3) 砂質シルトをブロック状に多く含む
4	10YR3/4 黄褐色	粘土質シルト	に赤い黄褐色(10Y R 5/3) 砂質シルトを粒状に少量含む
5	10YR3/4 黄褐色	粘土質シルト	礫を若干含み、に赤い黄褐色(10Y R 5/3) 砂質シルトをブロック状に含む
6	10YR3/3 黄褐色	粘土質シルト	に赤い黄褐色(10Y R 5/3) 砂質シルトと黒色(10YR2/1) 粘土をブロック状に含む
7	10YR3/2 黑褐色	粘土質シルト	に赤い黄褐色(10Y R 5/3) 砂質シルトを小ブロック状に少量含む
8	10YR3/3 黄褐色	粘土質シルト	に赤い黄褐色(10Y R 5/3) 砂質シルトを大ブロック状に少量含む
9	10YR5/3 に赤い黄褐色	粘土質シルト	基本層Ⅱ層ブロック主体層

第41図 A区平面・断面図

5.まとめ

- 調査地点は、裏町古墳後円部の北部と北東部に位置する。後円部北部に位置するA区では、古墳構築土9層を確認し、後円部北東部に位置するB区では、12層の古墳構築土を確認した。裏町古墳の規模と比較すると、限定的な調査であることから、古墳構築の特徴を把握することはできなかった。後円部北部と北東部では、構築土の様相がやや異なっているが、基本的には黄褐色土と暗褐色および黒褐色土が互層状に積まれていることが確認された。
- 後円部構築土直下には、旧表土が全域に分布することが推定され、今回の調査成果と昭和48年に実施された第2次調査の成果を検討すると、裏町古墳が表土を除去するなどの大規模な整地を伴わずに、墳丘が築造されたと考えられる。
- A区で確認した旧表土（基本層Ⅰ層）上面の炭化物層は、第2次調査においても検出されており、この報告では、古墳構築直前に野焼きなどが行われた可能性を指摘している。今回の調査では、炭化物の分布範囲を明らかにはできなかったが、その分布が第2次調査区の北側にも広がることが判明した。このことから、後円部中央部から北部の広範囲に炭化物が分布しているものと推定される。
- 古墳構築以前の表土と考えられる基本層Ⅰ層と基盤層である基本層Ⅱ層上面で遺構検出を行ったが、古墳造営以前の遺構および遺物は確認されなかった。



基本層

層位	土色	土質	備考
I-a	5Y3/1 オリーブ黑色	粘土	
I-b	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	基本層Ⅰc層を斑状に含む
I-c	10YR3/4 褐褐色	シルト	基本層Ⅱ層を小ブロック状に少量含む
II	10YR5.4 に、よい黄褐色	砂質シルト	上面に漸移的変化が認められる

古墳積土

層位	土色	土質	備考
1	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	雜を多く含む 古墳構築土
2	10YR3/4 褐褐色	粘土質シルト	雜を若干含み、に、よい黄褐色 (10Y R 5/3) 砂質シルトをブロック状に少量含む
3	10YR3/2 黒褐色	粘土質シルト	雜とに、よい黄褐色 (10Y R 5/3) 砂質シルトをブロック状に含む
4	10YR3/4 褐褐色	粘土質シルト	雜を若干含み、に、よい黄褐色 (10Y R 5/3) 砂質シルトをブロック状に少量含む
5	10YR3/4 褐褐色	粘土質シルト	雜を若干含み、に、よい黄褐色 (10Y R 5/3) 砂質シルトを小ブロック状に少量含む
6	10YR3/1 黑褐色	粘土質シルト	黄褐色 (25Y5/4) 砂質シルトと黒褐色 (10YR3/1) 粘土質シルトの互層 雜をごく少量含む
7	10YR3/1 黑褐色	粘土質シルト	黒褐色 (10Y R 3/1) 粘土質シルトと褐褐色 (10YR3/4) 粘土質シルトの互層 雜を若干含む
8	10YR5/4 に、よい黄褐色	砂質シルト	褐褐色 (10Y R 3/4) 粘土質シルトを小ブロック状に少量含む
9	10YR4/3 に、よい黄褐色	砂質シルト	褐褐色 (10Y R 3/4) 粘土質シルトを互層状に含み、雜を若干含む
10	10YR3/4 褐褐色	粘土質シルト	雜を多く含み、に、よい黄褐色 (10Y R 5/3) 砂質シルトをブロック状に若干含む
11	10YR5/3 に、よい黄褐色	砂質シルト	褐褐色 (10Y R 3/3) 粘土質シルトを小ブロック状に少量含む
12	10YR4/3 に、よい黄褐色	砂質シルト	雜を多く含む

第42図 B区平面・断面図



1. A区全景（南から）



2. B区全景（南西から）



3 A区西壁断面（東から）



4 B区北東壁断面（南西から）

写真図版 24 第3次調査

総 括

平成 25 年度に他局予算および事業者負担で実施した調査件数は、平成 25 年 2 月末で 35 件（30 遺跡）である。これらの調査では、縄文時代から近世にかけての遺構・遺物が発見され、荒井広瀬遺跡第 1 次調査など、重要な調査成果を得られた調査がある。本書では、平成 24 年度後半を含め、平成 25 年度 12 月 31 日まで行った調査の中で、別に報告される郡山遺跡を除き、10 件を報告した。その成果は、以下のようにまとめられる。

1 青葉区内の調査

（1）川内 C 遺跡

遺物包含層および井戸跡 1 基を検出した。遺物包含層からは、縄文土器、石器などが多量に出土した。また、遺構外出土遺物には土偶 1 点がある。特徴から縄文時代後期初頭から後葉に属するものである。井戸跡は近世以降と推定されるが、時期が不明であることから、江戸時代に描かれた絵図資料にある屋敷地に伴うかは明らかにできない。今回の調査成果から、当該地もしくは周辺に縄文時代の遺構が分布する可能性が推測された。これを受け、川内 C 遺跡として、新たに遺跡登録を行った。

（2）仙台城跡扇坂地区

扇坂は、仙台城跡二の丸へ至る登城路のひとつである。調査は対象地内に 7 箇所の調査区を設定して実施した。その結果、対象地が後世の改変を受けていることが明らかとなった。そのため、扇坂を描いた仙台城跡に関わる絵図資料にみられる表記を検討することはできなかったが、斜面上位に登城路に関わるとみられる盛土が確認された。上面が削平されていることから、詳細な積土による整地の状況は不明であるが、出土遺物から近世以降の年代が推定される。なお、1 トレンチから出土した「SINAGAWA」の押印のある煉瓦については、東京都品川区仙台城遺跡に類例がある。耐火煉瓦を生産した品川煉瓦会社製と見られる。

2 若林区内の調査

（1）沖野城跡第 15・16 次調査

沖野城跡関連遺構とみられる南北方向の溝跡 3 条を検出した。このうち、対象地東部の 2 条の溝跡は、今回の調査地点の北側で行われた第 2 次調査と対象地南側に位置する第 9 次調査でも、延長線上で溝跡が検出されていることから、さらに南北へ延びる一連の遺構と考えられ、大規模な区画施設の可能性がある。溝跡の詳細な時期は判断できなかったが、基本層との関係から、検出した溝跡 3 条には大別 2 時期の変遷が確認された。

（2）南小泉遺跡第 72 次調査

対象地南東部に位置する 9 トレンチで溝跡、土坑、ピットを検出した。遺構の年代を判断する資料に乏しいが、出土遺物は土師器が主体を占め、古墳時代中期に属する南小泉式が中心となる。また、遺構外から石庖丁 1 点が出土した。これまでの周辺の調査では、古墳時代中期から近世にかけての居住域が認められているが、弥生時代については、遺物は出土するものの、不明な点が多い。

（3）荒井広瀬遺跡第 1 次調査

2 箇所の調査区で、自然流路跡 1 条、溝跡 2 条を検出した。自然流路跡からは、弥生時代から平安時代の土器などが出土した。2 トレンチでは、自然流路跡とそれに並行する溝跡から地震痕跡である地割れ跡とそれを覆う津波堆積物が確認された。津波堆積物は、自然流路跡との重複関係、出土遺物から、隣接する杏形遺跡で確認された弥生時代中期中葉の津波堆積物と一連と考えられる。地割れ跡は、この津波の原因となった地震が日本海溝周辺で発生した可能性を発掘調査で明らかにし、さらにそれによって発生した津波の痕跡を確認した貴重な例である。

(4) 荒井南遺跡第2次調査

弥生時代中期中葉の水田跡とそれを覆う砂層を確認した。4トレンチでは、東西方向の大畦畔と考えられる畦畔を検出した。一方、対象地中央部に位置する3トレンチでは、水田耕作土が確認されていない。本遺跡における水田耕作域の範囲を検討するうえで、重要な成果を得られた。これを受け、遺跡範囲の検討を行い、範囲を南側に拡張した。また、この水田跡を覆う砂層は、隣接する杏形遺跡の津波堆積物に類似し、同一の津波による痕跡と判断される。

3 太白区内の調査

(1) 中田南遺跡第5次調査

溝跡、ピット、性格不明遺構を検出した。性格不明遺構からは平安時代に属するとみられる完形の須恵器杯が出土している。今回の調査で検出した遺構の時期は不明であるが、該期の遺構が対象地内および周辺に分布している可能性が推測される。遺跡の東部にあたる第1次調査（平成4年度）では、古代から中世にかけての集落跡および屋敷地が確認されており、本遺跡が立地する自然堤防上での古代の集落跡の広がりを考えるうえで、今後の調査成果の蓄積を待って検討が必要である。

(2) 西台畠遺跡第10次調査

堅穴住居跡1軒、溝跡1条を検出した。本遺跡は、郡山官衙遺跡に関わる大規模な居住域であることが、これまでの調査で確認されている。当該地は擾乱の影響で遺構の残存状況は不良であるが、堅穴住居跡1棟などを検出した。堅穴住居跡は、古墳時代後期から奈良時代に属するとみられる。出土遺物から、本堅穴住居跡が工房である可能性や周辺に同様の遺構が分布することが推測される。また、「編物石」の可能性がある礫がまとまった状態で出土し、当時の生業を考える資料となった。

(3) 裏町古墳第3次調査

裏町古墳の構築土を確認した。古墳構築土の下からは、古墳構築以前の遺構および遺物は遺構は発見されなかつた。2箇所の調査区では、古墳構築以前の旧表土が認められ、古墳構築に伴い、表土を除去するなどの整地が行われていないと考えられる。また、A区では、古墳構築以前の旧表土上面に炭化物層を確認した。一定の範囲に広がると推定され、同じく炭化物層が認められた第2次調査で指摘されたように、古墳築造直前に野焼きなどが行われたことを示す可能性があり、古墳構築のあり方を示す資料が得られた。

報告書抄録

ふりがな	かわうちしーいせき ほか						
書名	川内C道路 ほか						
調査名	発掘調査報告書						
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書						
シリーズ番号	第427集						
編著者名	平間亮輔 小泉博明 黒田智章 佐藤高陽 千葉浩一 早坂純一 千葉靖彦						
調査機関	仙台市教育委員会						
所在地	〒980-0811 仙台市青葉区一番町4丁目 東二番丁スクエア 3階 Tel022-214-8894						
発行年月日	平成26年3月31日						
所収遺跡名	所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		由町村	道路番号				
	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項
要 約							
川内C道路	仙台市青葉区青葉山	4100	01572	38° 15'33" 140° 51'23"	2013.09.17 2013.11.06	1320m ²	記録保存 (コンベンション建設)
	敷地	縄文・近世	井戸・遺物包含層	縄文土器・磁器・土製品・石器			
縄文時代後期初頭から前葉の遺物包含層を検出し、遺構外から土器が出土した。							
仙台城跡基壇地区	仙台市青葉区川内	4100	01033	38° 15'34" 140° 51'21"	2013.10.21 2013.11.06	393m ²	確認調査 (歩行者道路建築)
	城館	中世～近世	通路積土	瓦			
扇形登城路に関わる可能性のある人為的な積土を確認した。							
沖野城跡 (15次)	仙台市若林区沖野七丁目	4100	01234	38° 13'43" 140° 55'4"	2013.05.09 2013.05.16	1910m ²	記録保存 (宅地造成)
	城館	中世	溝路3・ビット5	陶器・磁器・木製品			
	沖野城跡に関わるとみられる溝路を検出した。						
沖野城跡 (16次)	仙台市若林区沖野七丁目	4100	01234	38° 13'43" 140° 55'4"	2013.08.21 2013.09.06	76.2m ²	記録保存 (建売住宅建築)
	城館	中世	溝路3・ビット1	陶器・磁器			
	沖野城跡に関わるとみられる溝路を検出した。						
南小泉道路 (72次)	仙台市若林区遠見塚一丁目	4100	01558	38° 14'17" 140° 54'45"	2013.10.23 2013.12.06	1536m ²	記録保存 (小学校新築整備計画)
	集落・聚落	弥生～近世	溝路1・土坑6・ビット6	土器・石製品			
	溝路1条、土坑6基などを検出し、土器の施、石廻子が出土した。						
荒井広瀬遺跡 (1次)	仙台市若林区荒井字広瀬	4100	01570	38° 14'15" 140° 56'54"	2013.05.13 2013.07.05	2710m ²	記録保存 (区画整理事業)
	河川	弥生～古墳	河川跡1・溝路2	弥生土器・土器・木製品			
	弥生時代から古墳時代の遺物が出土する河川跡と弥生時代中期に発生したとみられる地盤崩れを検出した。						
荒井広瀬遺跡 (2次)	仙台市若林区荒井字古新	4100	01571	38° 14'18" 140° 56'33"	2013.06.12 2013.07.16	1380m ²	記録保存 (東部排水路建設)
	水田	弥生	水田	弥生土器・土器・磁器・陶器			
	弥生時代中期とみられる水田跡とそれを覆う津波堆積物を検出した。						
中田甫遺跡 (5次)	仙台市太白区中田七丁目	4100	01272	38° 11'25" 140° 53' 6"	2013.04.23 2013.04.24	20.2m ²	記録保存 (宅地造成)
	集落	縄文～近世	溝路1・土坑3・性格不明遺構1・ビット6	土器・須恵器			
	性格不明遺構から実形の須恵器1点が出土した。						
西台宿遺跡 (10次)	仙台市太白区郡山二丁目	4100	01005	38° 13'24" 140° 53'15"	2013.09.09 2013.09.17	1145m ²	記録保存 (共同住宅建築)
	集落	縄文～中世	豊穴住居跡1・溝路1	土器・石製品			
	豊穴住居跡1軒などを検出し、石製品などが出土した。						
裏町古墳 (3次 A区)	仙台市太白区西多賀一丁目	4100	01040	38° 13'22" 140° 51'39"	2013.09.19 2013.09.24	33.2m ²	記録保存 (共同住宅建築)
	古墳	古墳	古墳構築土	なし			
	裏町古墳構築土を確認した。						
裏町古墳 (3次 B区)	仙台市太白区西多賀一丁目	4100	01040	38° 13'22" 140° 51'40"	2013.09.19 2013.09.24	22.5m ²	記録保存 (共同住宅建築)
	古墳	古墳	古墳構築土	なし			
	裏町古墳構築土を確認した。						

仙台市文化財調査報告書第427集

川内C遺跡ほか

発掘調査報告書

2014年3月

発行 仙台市教育委員会

仙台市青葉区一番町4丁目1-25

東二番丁スクエア

文化財課 TEL 022 (214) 8894

印刷 株式会社 仙台紙工印刷

仙台市宮城野区若林三丁目1-14

TEL 022 (231) 22450
